

『サチノミヤ ひいじさまもサチノミヤ』

高野 澄（たかの・きよし）

kuupachi@jade.plala.or.jp

<http://takano-kiyoshi.com/>

目次

第1章	「猿ヶ辻」	2
第2章	「有職故実の家」	14
第3章	「天明八 戊申 睦月」	31
第4章	「武命に依り閉門」	49
第5章	「幼名はサチノミヤ（祐宮）」	72
第6章	「サチノミヤは幕に隠れて参内する」	95
第7章	「議奏」	120
第8章	「和宮は江戸へ降嫁する」	145
第9章	「今宵も浅葱の幕の筒」	164
第10章	「クビとミミ」	183
第11章	「暗殺の夜」	206
第12章	「サチノミヤ践祚」	225

第1章 「猿ヶ辻」

——猿ヶ辻のサルが動くそうだ！

——くちびるも動くそうだ、ピクピクと！

——くちびるは動くが、なにをいつてるのか、わからないそうだ。

——うわさがひろまった。

うわさにうごかされて、木ノ内民夫は京都御苑に行った。御苑のなかに御所がある。

相国寺と同志社大学の正門を背にして、御苑の今出川門をくぐる
と御所の朔平門につきあたる。御所の築地塀にそって左（東）にゆ
き、右（南）にまがる角で、塀が内側に切りこまれている。

屋根裏の金網の奥に木造のサルがみえる。立烏帽子をかぶって御
幣をかつぎ、中腰で——サルの中腰は無駄な表現かもしれない
——北を向いている。

サルがいるから猿ヶ辻。

夜があけたばかり、まだ暗い、三十人ぐらいあつまって、屋根裏
をみあげ、てんでんにしゃべっている。

——からだは動かない、くちびるも動かない。

——目が醒めていないんじゃないかな。

——眠っているんなら、そのうちに醒めるはず。

——そのうち、って、いつ？

——おれには、ちょっとだけ、動いたようにみえたんだがなア。

——あんたの錯覚さ、動くわけがない。木造のサルが動いて、た
まるもんか！

朝の陽が屋根裏を照らした。

金網が光った。

——動いた！

——動いたんじゃないよ。陽光が金網に当たる角度が変わる、そ
の影響で一瞬、動いたようにみえるだけ、おれにはそうとしかおも
えないな。

「木ノ内さん！」

薄明かりのなかに、ききおぼえの声。

「太田黒さん、これはこれは」

先斗町の酒場、竹澤で月に二、三回は出合うのが太田黒俊一、知っているのは名前だけ、住まいも仕事も知らない。年金ぐらしなんだろうな、温和な印象の笑顔。

「動きましたか？」

「動いたような気もするが、錯覚かもしれない。あなたは？」

「老いてますます鈍感、動いたようにはみえませんでした」

「ならんで堺町門にむかう。」

「動くなら、朝でしような。光のパワーに刺激され、木造りのサルが動いて言葉をしゃべる、朝なればこそその現象ですよ。午後や夕方では、こうはいかない」

自分よりも太田黒のほうがサルにうちこんでいる。専門家なんだろうか、動物園につとめていたとか、医学研究所で動物実検をやっていたとか、肉親すべてが申年（サド）うまれだとか——きいてみようかとおもったが、先手を打たれた。

「木ノ内さん、サルに興味がありとみうけましたが、お仕事かなんかでサルに関係があたりでしたか？」

猿ヶ辻に駆けつけたんだから、興味がないわけではない。かといつて……

「ひま、ですからね。おもしろい噂をきくと、ちょっと行ってみるかなと、まあ、そんなところです」

「わたしはね、サルの親戚じゃないかとおもうくらいサルに興味がある。だけど、なぜこんなにサルに興味があるのか、きっかけもなにも、わからない。若いときには不安でしたが、としをとってありがたいことに、不安が楽しみに変わりました」

ほのぼのとした顔で太田黒はいい、

「あしたも来るつもり。朝の光に照らされて、ちょっとでも動いて

くれば儲け物」

「はあと返して、わたしは明日は来ませんよと表情でサインを送ったつもりだ。」

「なにもないまま、一年ちかくすぎ、」

「太田黒さんの奥さん……いまは、そのお、未亡人ですが……これを木ノ内さまにお渡しして、ご質問があったら説明してと頼まれたものですから……」

「亡くなった、太田黒さんが！」

「わざわざ知らせてもらうほどのおつきあいではなかった———そういおうとしたが、目の前に出された封書を見て、いえば失礼になるとわかった。」

太田黒は奥さんに、木ノ内民夫の名と住まいを教え、自分が死んだらこれをと、封書を託したのだそうだ。

「拝見いたします」

猿ヶ辻のサルが動く、なにかいいたいかのようにくちびるを動かすと最初に知ったのはわたし、太田黒俊一である。

わたしのほかにはだれも知らないとわかり、嬉しい、得意の気分になった。なんの取柄もないサラリーマン人生の最後を華やかな気分ですこせる確信ができた。

夜明けをまちかねて猿ヶ辻にゆき、サルの言葉を聴こうとしたが、なにか、いおうとする衝動を感じるだけで、意味は通じない。

焦燥の日々をおくるうち、わたしのからだは重病に侵されているとわかったので、先斗町の竹澤でときどきお目にかかる木ノ内さんに目をつけ、わたしの後任者になっっていたたく仕掛けをつくりました。

滑稽、ばかばかしいとおもわれるのを覚悟でいいます

が、サルのお告げとおもってください。

あなたを猿ヶ辻の現場に誘うために噂の仕掛けをつくったのは、もちろんわたし、太田黒です。

サルがいたい らしいのは……歴史の秘密、皇室の謎なんていうハイレベルでスリリングなものではないはず。失礼ながら、あなたがわたしとおなじタイプの退職サラリーマン、餓死のおそれはないにしても、興奮や感動とは縁の遠い晩年をおくりつつあると勝手にきめて、サルがなにをいいたいのか、わたしに代わって聴いてやってもらいたい。

ひとだすけ、ならぬ、サルだすけ。手塩にかけてきたサボテン、バラの鉢植を知り合いにゆずって安心して死にたい、ひまつぶしにはなりますよ、そんな気分なのだとおもって、どうか、ひきうけていただきたい。

封書を読みおわり、紙を折たたむ音に刺激されて意識をとりもどした。無意識のうちに封書を読んでいたのだ。

承知しましたと奥さまにおつたえください——いおうとしたが、使者の姿は消えていた。

京都御苑は人間とイヌの散歩の名所、猿ヶ辻で足をとめるひとはいるが、屋根裏のサルを凝視するひとは少ない、いや、いない。まれにあっても、サルとの会話をこころみるひとはいない。

木ノ内民夫は「おれは別の人間になるんだ」と自分にいいきかせ、太田黒俊一の後任だから太田黒俊二と名のるのもいいかな、などとかんがえる。

日の出のまえに猿ヶ辻にゆき、日の出の瞬間のサルを凝視し、いつかそのうち、かならずきこえるはずのサルの言葉を待つ。

太田黒に声をかけられた、あの記念すべき朝に顔をおぼえたひとも何人かきていたが、いつか少なくなり、やがてゼロになった。

こうなる日を、サルは待っていたのじゃないか。
その日がきた。

サルが、つーつと動いて、止まった。

静止から動への変化よりも動から静止の変化のほうが視覚では把握しやすい。サルがこの原理を知っているのはつーつと動いて止まった、その動作であきらかだ。

サルはつーつと動いて止まり、民夫を凝視する。サルが古典芸能の見得をきるテクニクを会得しているのがわかった。

サルが民夫をみて、民夫がサルをみて、サルと民夫の意識がつながる。

サルが声をかける。高い屋根裏から地面の民夫にサルの声が降ってくる、民夫は地面から屋根裏に声を放りあげる。散歩する人間とイヌにサルの声はきこえないとわかっている、安心して強く高い声ではなせる。

「ああ、木ノ内民夫さん、この日の来るのを、わたしがどんなに待っていたことか！」

「太田黒さんがお亡くなりになる、なんて」

「太田黒さんの病気が重いのは、知っていました。だから、あの方の後任がはやくきまってくれないかなと、これはまあ、わたしの勝手な事情ですが」

「あなたの事情というと？」

「サルにも寿命があります。わたしは木造サルですが、木造サルにも寿命がある。人間の個体は多数、役割交代が可能だからいいが、木造サルは、というか、わたしはというか、つまり猿ヶ辻のサルは唯一無二の個体だから役割交代が不可能なんです。わたしが死ねば、猿ヶ辻のサルは永久に消えてしまう。死ぬまえに、あなたに、つたえるべきことを、しっかりとつたえなければなりません」

一気にしゃべって疲れたのか、サルの息が荒い。

民夫の頭にとつさの言葉がうかんだ——聖なる義務。たいしたことやれぬまま、人生の終りがちかづいてくる。だれの罪でもない、

おれの怠慢でもないが、できるならば、の未練の想いがある。

サルの願いにこたえてやれば、聖なる義務を果たした人生といえるのではないか。

「耳をかたむけて拝聴し、一語も漏れぬように後世につたえる、誓うよ。さあ、語ってくれ！」

「拝聴なんて、そんなふうにいわれると恥ずかしい気にならないでもない。なぜかというと、これ、個人的な^{うら}憾みと願望にすぎないんだから」

一度ひきうけたからには、個人的な憾み、願望であろうと、なかろうと、全力をかたむける木ノ内民夫に変わりはない——そういうとサルは「ああ、よかった！」深い吐息をつき、金網の奥であぐらをかき、語りの姿勢をとった。

陽があがり、陽光は屋根にさえぎられて弱くなり、金網の奥はみえにくくなった。

みえにくい金網の奥のサルがみえるのは木ノ内民夫だけだ。

みえにくい金網の奥からサルの声が降ってきて、こんどは民夫の声が昇ってゆく。声が降って、昇って、会話がつづく。

「なにがくやしいとって、これほどくやしいことはない！」

強い調子の前置きにつづいて、猿ヶ辻のサルの憾みと強がりを展開される。

「猿ヶ辻のサル、つまり、わたし自身の存在は、ちかごろますます強調されているんです、ご承知でもありませんようが」

「京都歴史散歩といった書物では、ますます強調どころか、はっきりいって主役」

「存在を強調されるのが不満ではない、むしろ悦びですが、強調され方がいつまでも片落ち、それが不満」

「強調されるべきことが二点あるのに、一点しか強調してくれない、それが不満？」

「そのとおり。文久三年五月二十日の夜、御所の朝議がおわって朔

平門から出た姉小路公知(きんとも)が猿ヶ辻にさしかかると……こればかり」

「知つてますよ、猿ヶ辻の姉小路公知暗殺事件、幕末維新史では有名な事件だ」

太田黒俊一と知り合うまえから、民夫は猿ヶ辻の事件は知っていた。島根県からきた知人の御苑巡覧を案内することになって、事件の概要をしらべたこともある。

「姉小路公知を殺したのはだれか、いまだに判明していない。迷宮入りのまま」

「くやしいのは、そこなんだ！」

サルは深刻な状況におちいつている。それはわかるが、暗殺犯人迷宮入りとサルと、なんの関係があるのか、それがわからない。

「わたしはね、知らなかったんだ」

「知らなかった、なにを？」

「暗殺犯人の正体を」

「まさか！ そんなはずはない。あんたは、そこでみていた。高いところから見下ろしていた、地面でみるよりも、もつとはつきりみえたはずだ、暗殺犯人を」

「それはそのとおりだが、わたしはみなかった。居眠りをしていたのかもしれないが、それなら、わたしとしては致命的な恥だ」

「うーん」

「わたしが、なぜここにいるのかといえば、鬼門の良(うら)の方角、比叡山から近江、はるか東国、奥州のかなたまでずーっと見はるかし、邪悪なものの侵入をふせぐのが任務だからだ」

「大切な役目」

「大切な役目をおおせつかっているサルはわたしだけじゃない。すぐその……」

サルは北東の方角を指し、

「幸神社(さいのかみやしろ)にもわたしと同役のサルがいる。そのむこうの赤山禅院、

これは平安のむかし、慈覚大師円仁さまが唐での修学を終わって帰

国の途中、船上にあらわれて航海の安全をまもった唐の赤山の泰山府君を勧請なさったのが創建だが、ここにもサルが配されて東国からの邪悪の侵入を防いでいる。まあ、禁裏にいちばん近い猿ヶ辻の守備をまかされているわたしが首席とっていけないことはないが

「あなたが首席、そのとおり」

「大切な役目を果たしてきた自信がある、虫一匹も見落とさずにやってきた。それなのに、生涯で一度だけ、すぐ足下で起った暗殺事件の犯人の姿がみえなかった。こんな恥ずかしいことはない。恥ずかしいのは耐えるとしても、役目をとりあげられるおそれがある。そうになったら、生きてはいられない」

「ダメだ！」

サルはうなだれる。

「あんたが死ねば、太田黒さんの期待を裏切ることになるんだ。わたしも太田黒さんの信頼にこたえられない。だから死んじゃ、ダメ」

沈黙のサル。

「あんたが死なずにすむ手が、なにか、あるんじゃないかなア」

「あるんだよ、じつは」

「どうして早くいつてくれないんだ！」

「うまくゆくか、どうか、わからないから」

「生きるか、死ぬか、ふたつにひとつのこの切所せつしょ、うまくいくかどうか、なんて、気にするな！」

サルが口をひらく。よし、いうぞ。いうから、しっかり聴いてくれよと気合をこめたのがわかる。

「ひとちがい、だとおもう。いや、まちがいない、ひとちがいだ」

「ひとちがい……命を狙われたのは姉小路公知ではなくて、別人である、こういいたいわけ？」

「うん、そう」

「狙われたのは、だれ？」

サルの首が高くあがって、木ノ内の背後を見通す。

「あれ、だよ」

肩にかけていた御幣をさらつと横にたおして、東北の方角を指した。軍配団扇みたいで、格好がいい。合戦のとき、大将が手ににぎって臣下を指揮するのが軍配団扇。ただの団扇で、虫の一匹も殺せないが、指揮権のシンボルとして尊重される。軍配団扇のデザインは猿ヶ辻のサルの御幣に由来しているのかもしれない。

猿ヶ辻から東北へ百メートルばかり、塀にかこまれた一郭に和風の建物がある。サルが御幣で指したのはこれだ。

「あれは中山家、明治天皇の産屋……ああつ、そうか、姉小路公知は中山家のだれかとまちがえられて殺されたと、こういいたいんだね、あんたは」

サルは微笑し、うなずいた。「莞爾（かじ）として」と表記するのがふさわしい表情。

「前大納言、中山忠能（たやす）さま」

京都の上京に生まれ、そだって、上京で働いた木ノ内民夫である、京都御苑は子供のころの遊び場、おとなになってからは通勤往復のルートだ、しらべたとまではいえないが、御苑の様子、変遷についてはなんとなく知っている。

いま芝生になつている部分がかつての公家町、公家屋敷が櫛比していた。相国寺の南に広大な桂宮家の屋敷があり、その南に、西から一乗院の里坊、河籬、鷲尾、中山、滋野井、藤波、樋口の屋敷が東へ一列にならんでいた。

明治になつて公家屋敷はつきつぎに姿を消したが、中山家の別棟は明治天皇の産屋であるから解体されず、保存されてきた。

サルが語る。

「わたしはね、公家のなかでは中山さんにたいして格別の想いがあった、といえばわかるだろう、猿ヶ辻のサルの役目は良、東北の方角を見はるかして監視すること。わたしは室町時代から今日まで東

北を見通してきた。金網に閉じこめられて動けないが、動けないから、ひたすら東北を監視してきた。東北に視線をむけ、さあ、どんな邪悪も見逃さないぞと気合を入れると、最初に、真つ正面にみえるのが中山家、いやでもみえるんだ。金網の外へ出られたら、いちばん先に中山家を訪問したいとおもっていた。隠居の身分で中山家にお仕えし、老人にしかやれぬお世話をする、こうなったらどんなに幸せだろうかと、いつもおもっていた」

「ひとごととおもわれない、といった気分？」

「ひとちがい殺人を証明できたと仮定してのはなしだが、それはわたしが東北監視を怠らなかつたしるしになる。猿ヶ辻のサルの役目をきちんと果たしたのが証明され、役目をとりあげられず、あんたもわたしも死なずにすむ……まあ、こういうふうに計算しているんだ」

「あんたは心理的に窮地におちいつているんだ。姉小路公知暗殺事件の犯人の正体を知らないのに、読物スタイルの幕末史の書物や雑誌で、『猿ヶ辻のサルだけが真相を知っている！』なんて興味本意に書きたてられ、事実誤認を訂正してもらおう手段もない苦境」

「そこまでわかつてくれれば申し分はない」

「お手伝い、するよ」

「一文の得にもならないけれど」

「乗りかかった船、いきがかり、意地と人情……なんともいってくれ。先斗町(ほんとう)の竹澤で太田黒さんと酌みかわした酒の記憶を大切にしたいんだ」

「サケ……わたしは酒を呑んだことがない」

もうすこしくわしく知っておいてもらうのがいいんじゃないかとサルが提案し、いくらでも聴くよと民夫がつける。

「目のまえに中山家があったから、だけじゃない。下地というか、前提というか、そんなものがある」

「わかるよ」

「尊号一件、知ってる？」

「ソングウイツケン……きいたことがあるような、ないような」

「いまなら尊号事件というのがいいんかな、寛政元年にはじまり、寛政五年に終わった」

「寛政……ちよつと待ってくれ。猿ヶ辻の事件が文久三年、寛政五年といったら、七十年以上もむかしだ。あんたは生まれていないはずだが」

「そうか、木ノ内さんは知らないんだ、わたしが室町時代から生きているのを」

知るも知らぬも、そんなの無茶だよといおうとしたが、サルのほからかな笑顔をみて、なにもいわずにサルの説明に任せるのが賢明だと木ノ内は判断した。

「朝廷と幕府のあいだに見解の相違がおこり、あわや衝突の寸前までいった。お公家さんたちは顔色を変え、この猿ヶ辻のあたりを奔走していた。わたしのみるかぎり、いちばん興奮していたのが中山家の当主、愛親(なちか)さまだ。忠能さまの先々代、そのまた先代が愛親さま。愛親さまは江戸に召喚され、閉門の罰をうけて京都にもどられたのだ」

「お公家さんが江戸に召喚され、罰をうけた？」

「ありえないことが、起ったのです。これがきっかけでわたしは中山家を格別の想いでみるようになった。猿ヶ辻暗殺事件の七十年以上もむかしのことだが、わたしにとってはつい昨日のこと」

猿ヶ辻のサルは生身の動物ではなく、人間の造形作品である——
サルが説明をはじめた。

人間の造形作品が生身の動物のかたちをしている、そうかんがえるのがわかりやすいのではないか。デザインが先行し、デザインを追って人間が木造のサルを造形した。

京都は何度も大火にみまわれた、御所も焼けた、木造のサルは何

度も焼けた。

木造のサルは焼けたけれども、デザインは焼けないから永遠に継承される。七十年以上もあいだがあいている尊号事件と姉小路暗殺事件の両方をサルが体験するのは至極の当然。

「ウソだとおもうだろうが、わたしは応仁の乱も体験している。知識として知っているのではなく、ね」

「ほんとうに体験したのだと信じることにするよ。無理なく信じられる気がしてきた」

「木ノ内さん、調子があがってきましたね！」

「わたしがここから指示するから、指示のとおり動き、かんがえてもらう。わたしの言葉はあなたのほかにはきこえないから、他人の目には、あなたの動きが奇妙に見えるときがある。気づかれてもかまわないが、気づかれぬほうがいい」

「了解」

「あなたがわたしに話すときには、他人にみえない場所をえらんでください。相手の姿がみえないのにべらべらとしゃべれば、これまた奇妙な印象をあたえるから」

「了解」

(第1章・終)

中山邸跡へゆき、「猿ヶ辻のサルさんが中山家によろしく、といっていました」と挨拶する、これは木ノ内民夫にたいするサルの指示である。

指示にしたがい、猿ヶ辻から東北に歩きだすと、

「ああ、そのルート、まちがい。いったん朔平門までゆき、それからもどって中山邸跡。はじめにいうべきだった、ごめんごめん」

理由はきかない。猿ヶ辻から朔平門のまえまでゆき、もどって中山邸をめざす。

朔平門から中山邸まで、いつもの歩幅で百四十歩の距離、めざす、はおおげさだが、気分はあくまで、めざす、である。

猿ヶ辻から直接ゆくのと、朔平門からゆくのと、どこが、どちらがうのか、わからない。しかし、サルには確固としたかんがえがあつて指示したはずだから、指示のとおり動けばいい。

中山邸のまえに立つ。

柵の手前に「明治天皇誕生地」の石碑、柵の奥の井戸に「祐ノ井」ときざまれている。

背筋をのびし、

「猿ヶ辻のサルさんが、よろしく、とのことですよ」

さて、これからなにが起きるのかと待つ間もなく、ぴりぴりっとかすかな、しかし明瞭なしびれが地面から足裏にはいあがり、くるぶし、ふくらはぎ、ひざからまたへのぼつてのどに達した。

「のどがしびれてきた」

「耐えられますか？」

「苦痛ではない。むしろ快感、耐えられます」

サルの沈黙は「そのままです」ときこえた。

そのあと、木ノ内民夫は失神したらしい。

失神したのが何秒か、何分か、わからない。

たしかなのは、失神したあいだに別人になったこと。中山邸の柵のまえに、ではなく、柵の奥に立っているから、これは自分ではない、失神のあいだに別人になったと解釈するほかはない。

「これ、ですね？」

「それ、です」

「わたしは、だれになったのですか？」

「中山愛親。けれども、木ノ内民夫としての記憶や感覚がゼロになるわけではない。平均すれば愛親が九、民夫が一ぐらいの割合だが、固定するわけではない、愛親が七で民夫が三になる場合もある。変動数値と解釈してください」

「幕府に召喚されて江戸へゆき、罰をうけてもどってきた哀れなる中山愛親……それはわかるんだが、どうして、なぜ、こんな事態になったのか、ぼくにはさっぱり」

「中山愛親の受難を、あなたに追体験してもらいます。そうすれば、わたしが中山家にたいして抱いている格別の親近感を理解してもらえるはず、しっかり頼みますよ。わたしはあなたを、あなたしか頼れない」

「頼りにされるのは嬉しく、晴れがましいけれど、わたしの一存ではおうけはできません。家族に相談し、消極的な賛成、または同意のあとでおうけする、これ、どうですか？」

「ああ、家族！」

サルの叫びが、民夫には悲鳴にきこえた。

「サルも人間とおなじ、家族のなかに生まれ、家族とともに生きて家族のなかで死ぬ。ですが、猿ヶ辻のサルであるわたしには家族がない。家族のなかに生まれたのはまちがいないが、あまりにも遠い過去、家族のなかに生まれた認識はあっても記憶がない。わたしはずーっとひとり！」

わたしは孤独の身の上に耐えている、それなのにあなた（民夫）は家族に相談してなどと贅沢をいう、それはゆるしませんよ——こ

の理屈をおしつけられるのかと疑い、もしもそうなら愛親追体験の件はつけられないぞと民夫は肩をそびやかして抵抗のかまえになったが、

「どうぞ、相談なさったうえで。追体験は数ヶ月で終わるかもしれないが、事と次第では数十年、いや百年かかるかもしれず、そのあいだは家族のひとりが別人になってしまう。相談なしできめられるはなしではない」

「安心しました。わたしが迂闊な性分なのを案じるあまり、家族はときとして、わたしを圧迫する傾向があるのです」

「わたしも嬉しい。中山愛親追体験は容易ではない、重いのです。それをご承知の木ノ内さんだからこそ、家族と相談のうえでとおっしゃる。役目の重さを承知のうえで、ひきうけていただけるのがなにより嬉しい」

大宮通今出川上ル西、昭和の敗戦後に父がたてた木造二階建てのささやかな家に中山邸からもどり、

「みんな、あつまってくれ」

家族は妻と息子のふたりだが、民夫は みんな と呼ぶ。

「江戸時代のお公家のナカヤマナルチカ、ナルチカのナルは恋愛の愛、チカは親子の親、このひとになってくれないかと頼まれた。知っているひとの、そのまた知っているひとの頼みなんだ」

「最初の 知っているひと って、太田黒俊一さんでしよう？」

「知ってたのか」

「でも、太田黒さんが知っているひと、っていうのがわからない」

「わからなければ、ダメ？」

「あたしはかまわないけど……」

この子がなんていうか、の顔つきで息子をみる。

「おもしろいなア、お父ちゃんが別のひとになる、なんて。学校で説明しても、クラスのみんながわかるまでには半年か一年ぐらいはかかるね、それがおもしろい」

「おもしろい、賛成します」

「ぼくも賛成、はやく別のひとになってもらいたい」

息子がちよつと首をひねって、

「お父ちゃんが別のひとになると、お父ちゃんはいなくなるのかな、死んじゃうとか、消えちゃうとか」

「そうじゃなくて、ふたりになるんでしょう。あるときは元サラリーマンで年金生活者の木ノ内民夫、あるときはお公家さんの中山愛親」

「便利だな。ますますおもしろい！」

猿ヶ辻にとつてかえし、

「妻と息子、ふたりとも賛成してくれました。おもしろいといいます。あなたの名はいわず、太田黒さんの知り合いとだけいっておきました」

「太田黒さんの人間鑑識眼はたいしたもの、すばらしい家族にかこまれる木ノ内さんに目をつけたのですからねエ、敬意を表します」

「自信はないが、やりますよ」

「では、時刻を合わせます。あなたとわたしの現在ただいまの時刻認識がズレたままだと、どこか、次元のわからない世界で、おたがいには見えなくなるおそれがあるから。じゃ、いいですか、テンメイ八チ、ツチノエサル、ムツキ、さあ、ここからあなたの、中山愛親さんの奮闘がはじまる」

「テンメイ八チ、ツチノエサル、ムツキ」

「調子が出てきましたね。もうすぐ、ご自分が木ノ内民夫であることを忘れますよ」

「キノウチ……きいたことはあるんだが、だれだったかな？」

民夫が記憶混乱のただなかにあるのを、サルが知らぬはずはない。それなのに、サルから民夫に指示、教唆の言葉はない。中山愛親さんよ、これからはご自分のかんがえと判断でやってくださいよと念をおしているつもりなんだ。

どこから手をつければいいのか？

中山愛親は困惑しているが、困惑は軽度、やがてきりぬけられる予感がある。困惑の我が身を忘れさえしなければ、きりぬけられる。

庭に——中山家の——降りて、あたりの様子をうかがう。

門をあけて外に出てもいいが、前大納言の愛親が供もつれずに外出すると、どんな陰口をたたかれるか、わかったものではない。

右前方に内裏、左の前方、やや遠くに仙洞御所と大宮御所。

「内裏には当今（とぎ）のサチノミヤさまがお住まいになっておられる」

おもわず、つぶやいた。

天皇を話題にして呼ぶのは、ふつうは「主上（しゅじょう）」「陛下（へいか）」だが、「今上（きんじょう）」や「当今」と呼ぶと親近感をあらわす雰囲気が出て、天皇に近い立場にいるしにもなる。それ以上の親近感表明の手段として天皇の幼名を口にすることもある。

いまの天皇は光格天皇、光格天皇の幼名はサチノミヤ、中山愛親がおもわず、知らず「当今のサチノミヤさま」とつぶやいたのは天皇にたいする格別の親近感を自分で確認したかったからだ。

内裏には当今のサチノミヤさまがお住まい——あたりまえのことを声に出したのは、今日のこの時刻が自分にとって格別なものだと意識しているからだ。いや、意識しているか、どうかを確認するためにつぶやいた、このように言い換えるのがいい。

「そして、仙洞御所には」

こんどはじゅうぶんに意識してつぶやいた。

内裏と仙洞は一对のもの、「内裏には当今さま」とつぶやいたからには、つぎに仙洞御所をいわなければバランスがとれない。当今は内裏御所に、当今の父であられる院さまは仙洞御所に、これでバランスがとれる。

バランスがとれるといった、その一瞬あと、愛親はおのれの迂闊に気づいた。

「そうだった、当今の父上は院さまではない！」

当今のお父上の閑院宮典仁（ぢひ）親王は天皇として即位しなかつた、だから院でも上皇でもない。つぎの天皇に譲位した天皇が院、上皇と呼ばれるのだ。

典仁親王は院でも上皇でもないから、お住まいは内裏ではなく、閑院宮家のお屋敷である。

左右のてのひらを胸にあてて、なで、さすり、とんでもない失敗を逃れた安堵の想いを実感した。

あぶないところだった！

こころの芯がふるえる。

こころの振動を止めてはならぬ。うけとめ、振動の意味するところを探りあて、からだに内蔵すべし！

からだのなかにきこえる声は、ひとりごとではない。まちがいないく猿ヶ辻のサルの声だ。愛親がこころの振動を無視するのではないかと警戒したサルが、愛親のなかの民夫を通じて指示を発してきた。

「ゆっくり、じっくりかんがえなさい、そういうことだな」

ひとりごとをいうぞ、と意識していったひとりごとである。

当今のお父さまは仙洞御所にはお住まいにならない、お父さまは院さまではないのだから。

何度も何度も、おなじことを、くりかえして口に出す。ほかに案が浮かばない。

何度もくりかえしていれば、どうすればいいか、策が出てくるだろう。

当今のお父さまは仙洞御所にはお住まいにならない。お父さまは院さまではないのだから。

それが、どうした。わが中山家と、なんのかわりがある？

中山家、中山家とつぶやくこと十数回、意識のこぶが躍動して、ついに突きとめた。

わが中山家は有職故実（ウツクジツ）の家！

猿ヶ辻のサルは欣喜雀躍、ふりまわす御幣が金網にあたって破れそうになる。

いいぞ、いいぞ、愛親さん、民夫さん。その調子でつつ走ってくださいよ！

中山愛親はサルの欣喜に気がつかない。門から離れ、母屋の座敷にかけあがって書棚に走った。

ネンジュウシヨクジシヨウゾクヨウシユウ——つぶやいて書棚から『年中諸公事装束要集』をひきだし、瞑目し、額の高さにかかげて拝戴のしるしとする。

これぞ中山家！

朝廷の官職、典礼について深い知識のあるひとを有職故実家ゆうしやくじつといった。なにごとにおいても伝統に立脚するのを正義として優先すべし——この強い信念のもと、伝統に依らずに新儀にかたむくことに警告を発するのが有職故実家、略して故実の家の立場である。

平安時代の中期、藤原師輔の九条流をはじめ、故実を家の職とする公家がつぎつぎと誕生した。

中山家も有職故実を家の職とした。初代の忠親ははやくから礼儀作法を研究して注目され、摂政の九条兼実から称賛された。

いま愛親が手にする『年中諸公事装束要集』は忠親の子の忠定の著作、故実を家職とする中山家の存在を天下にしめした記念すべき書である。

故実の家の正式な資格といったものは不要、そもそも資格というものが存在しない。

有職故実について研究、発言をくりかえし、文章にして世にひろめてゆくうちにおのずから信頼を得て故実家として遇される。朝廷から諮問をつけることが重なれば、有力な存在となる。

『年中諸公事装束要集』は字のとおり装束にかんする故実書だが、といって中山家の故実研究が装束にかぎるわけではない。装束は儀式につながり、儀式は身分に相応するから、故実家はあらゆるジャンルの故実に通じているのが現実だ。得意、不得意があつては故実家として通用しない。

先祖の著作の感触に刺激され、愛親は我が身の来し方をふりかえる。

寛保元年（1741）に誕生、五歳の年に叙爵して従五位下になったのは記憶にないが、九歳の寛延二年に元服、昇殿をゆるされたあたりから記憶がのこる。

三十一歳の年に父が亡くなって中山家の当主となり、三十五歳で権大納言となった。権大納言は一年で辞し、四十三歳で再任、一年で辞し、その後は参議や議奏をつとめた。中山家の家格として権大納言は最高だから、愛親は可もなく不可もなしの公家生涯をおくってきたといえる。

だがさて、先祖がのこした故実書を手にする四十八歳のいま、可もなく不可もなしの生涯に満足していいのだろうかと奇妙な感慨にふける。

じつは、それ自体が愛親にとっては奇妙だ。可もなく不可もなし、生涯、満足——めったに使ったことのない言葉が、なぜ今日にかぎって足下に沸いて浮き、胸のあたりに這いあがってくるのだ？

昨日のわれは今日のわれとおなじではなかった！

それが、なぜ、今日なのか？

わからない。なぜ、なぜ？

手に重みを感じた、『年中諸公事装束要集』を持ったままだ。

これだ！

そのあとは、もつれた糸を解くようにすらすらと謎が解ける。

当今のお父上は、なぜ仙洞御所にお住みにならないのか、なんていう愚かな疑問にとりつかれ、あのままならば、知人に「なぜなのか？」と質問して、前権大納言の頭脳にいささかの不調が発したよつだなどと吹聴され、大恥をかいていたところだ。

愛親が疑問を感じたのは正しかった。

だが、疑問を解決しようとした方針が愚かであった。

当今の父上が仙洞御所にお住まいにならないのは正しいのか、ど

うか、故実家の当主の責務として、この点をこそ追究すべきであったのだ。

当今の父上の境遇がいまのままでよいのか、よくないのか、故実家として検討し、得られた見解を当今の左右に達する。天はそのことを、われ、中山愛親に命じている！

天皇の子（皇太子）がつぎの天皇になる、これがふつつ、順当だ。生前に子に譲位すると上皇（太上天皇の略称）の尊号を贈られ、院と呼ばれて仙洞御所を住まいとする。出家すれば法皇。

第百十八代の後桃園天皇は安永八年十月、二十二歳で亡くなった。後桃園天皇には欣子内親王のほかには子がなかったため、閑院宮典仁親王の子のサチノミヤが養子にむかえられて践祚、即位した。第百十九代の光格天皇である。光格天皇は欣子内親王を皇后とした。

宮家というのは天皇家の親戚である。

閑院宮家は百十三代の東山天皇の遺志にもとづいて創立された。初代は東山天皇の皇子の直仁親王、二代が典仁親王である。典仁親王は東山天皇の孫、光格天皇は曾孫にあたる。

光格天皇は内裏、皇后欣子は内裏の北の女御御所、後桜町上皇が仙洞御所、桜町天皇の女御の青綺門院が仙洞御所の北の大女院御所に住んだ。

光格天皇の皇室は女性優勢の感じがあるが、異例のことではない。だが、光格天皇は精神的な苦境を強いられた。父の典仁親王をさしおいて、子の自分が天皇になった、これは親不孝ではないかと自責しなければならぬ苦境である。当今の祐宮さまの苦悩を消してさしあげる、これは臣下としての義務である——愛親は確信した。

苦悩を消してさしあげる、その方法はなにか、愛親として、こたえは簡単に出る、有職故実家としての知識と経験を發揮すれば、こたえは出るはずなのだ。われながら確信がある。

愛親の視線が書棚のそこ、ここに向けられ、これと目をつけた書

物が一冊、また一冊とぬきとられて書見台に積まれる。

祐宮さまからのご諮問にそなえて、いつでも答申もうしあげられる準備をしておく。短くて五日、長くても十日あとはご諮問があるにちがいない。

愛親が動きだした。

昨日はここ、今日はそこと、親しい公家をたずね、

「祐宮さまはお悩みのはず。われら臣下、知らぬふりをして、ゆるされるのでありましょうか」

しずかに、しかし重い口調で説く。

中山家は摂関家のひとつ、一条家の家礼の役をつとめる。家礼とは番頭役だといえはわかりやすいだろう。資本主義時代の企業ならば総務役。一条家になにかコトがあると、家礼たちが招集され、額をよせて協議して事態打開の策を講じる。

一条家当主の輝良は愛親より十五年の年少、官職として最高の左大臣をつとめる。左大臣と大納言ではかなりの差があるが、そこはふるくからつづく主と従の関係である、輝良は愛親を威圧することなく厚遇してくれる。

当今の苦悩について愛親が推測するところを披露すると、

「あなたのうちに秘めておかれるなら、それはそれでよろしかろうが、いつまで秘めてもおられまい。いずれ、当今ご自身の口から漏れて出るのではなかるうかと……」

左大臣輝良も愛親とおなじく推察していたのだ。

「ならば、むしろ」

愛親は膝をすすめ、

「漏れるのを恐れるよりは、当今がお漏らししやすいようにしてさしあげる、それがわれら臣下の務めではありませんか」

「逆手に取る、のか」

「逆手などともうせば、闇下とわたくし、なにやら悪事を企んでおるようにつきこえましょうが」

「当今のためなら、悪事を企むに気兼ねは要らぬ」

左大臣と前権大納言のあいだに提携が成立した。左大臣と前権大納言の地位は対等ではない、提携とよぶのは妥当ではないが、ふたりの心境はまさに提携である。

「当今のまわりに噂をふりまく、当今のおこころを拝察して中山愛親が、お望みが実現する策の準備にとりかかっておるらしいとの噂がある、と」

「当今のお望みとはなにかと問われたら、なんと説明いたしましよつか？」

「われらが進んで明かすべきではない。賢明な臣下であれば、いずれは察知しよう。これを察知できぬものは愚者である、愚者を相手にするのは危険、放っておけばよい」

うわさがうわさと呼んで、ひろがる。

—— 当今さまは切なるお望みを抱かれておる。中山愛親が当今のお望みを実現する策を講じておるそつだ。

—— 切なるお望み、そりゃ、いつたい、なんだ？

—— 判然とはせぬが、お父上の身にかかわることのようだ。

—— 閑院宮家のご領地を増やしてさしあげたい、といったようなことか？

—— そんなところだろうが、となると相手は江戸、所司代の頭越しに大事を謀ると、痛い目にあつぞ。

—— 中山にたずねてみれば？

—— いうものか。名案は他人に真似されやすい。手柄をひとりじめにしたいから、前権大納言は口が裂けてもいわんじやろう。

—— ひとりでやる、のか、中山愛親が？

—— うしろについているよ、大物が。おんみずからは姿をおみせにはならんだらうが。

中山愛親が大事をおこなうなら、うしろでささえるのは左大臣一条輝良、公家のあいだでは周知のことだ。

愛親と輝良の予感 は事実となった。

「もはや耐えられぬと……」

「耐えられぬ…… 当今さまのお言葉？」

「ちかごろのお顔つきから拝察すれば、さようにしか、かんがえられぬ。苦しみを顔に出してはならんと、おんみずから戒めておられるのが、かえって……」

「お苦しみを」

「正月の朝賀の席で、閑院宮さまが当今さまに敬礼をなさる。宮さまが当今に敬礼するのは異例ではないが、宮さまともうしても閑院宮さまは別格、当今のお父さまなのだ。お父さまが子の当今に臣下の礼をとる。当今さまが子として耐えられぬ想いをなさるのは当然、いままでよくぞ我慢なされたと、陰で称賛の声もあるそうだ」

輝良が愛親の顔を凝視する。

愛親が同意の視線を返して、提携成立の確認の合図とした。

「われらふたりだけ、ではない。競争相手がある、早いうちにわれらの手を打っておくべし」

「お怒りかもしれませぬが、すでに愛親、いささかの準備にとりかかってはおるのです」

「それを察せぬ、われとおもうのか」

「まず、承久（じょうきゅう）の……」

「声が高い、壁に耳あり」

お父上に上皇の尊号をさしあげ、親をさしおいて天皇になった不孝の罪を謝するしるしとしたい、これが当今の切なる願いにちがいないと観ることで一条輝良と中山愛親は一致した。

天皇の周辺に 当今はお父さまに尊号を進上したいと願っておられる と噂をふりまき、様子をうかがっていると、

—— 当今は尊号進上を切望なさっている。

—— 当今は尊号進上を実現する策をお探しになっておられる。

そんな噂がながれてきた。

愛親と輝良の策は的中した。

そこで、さて、有職故実の家、中山家の当主、愛親の出番である。父をさしおいて天皇になった子が父に上皇の尊号を進上した事例があったか、どうか、あったとすれば、その天皇はだれか、父はだれか、調べて注進し、天皇のご覧に供する。有職故実の家として実績を積んできた中山家の注進である、ほかの家の注進とは重みがちがう。

尊号進上は天皇の行為だが、江戸の幕府の承認が必要だから、先例の交渉役はだれか、どのように進めたのか、これも調査の必要がある。

過去の先例の調査、これこそ有職故実家の得意とするものだ。

愛親はすでに、じゅうぶんに調査していた。

一条輝良から、

「ご諮問がくださった、早速に注進もつしあげよ！」

愛親は注進内容を朝議にかけ、衆議の結果として天皇に注進する手続をとった。

第一の例は後堀河天皇である。後堀河天皇は父の守貞親王に上皇の尊号を贈呈した。

守貞親王は高倉天皇の第二皇子、母は藤原殖子。高倉天皇の第一皇子は平清盛の娘の徳子（建礼門院）を母とする安徳天皇である。安徳天皇の弟の守貞親王は平知盛の養育で成長し、源氏が平氏に勝利して京都を制圧すると異母兄の安徳天皇とともに西国に逃れた。

長門の壇の浦で平氏が滅亡したあと、守貞親王は京都にもどって出家、持明院宮入道親王として隠棲生活にはいった。

平氏を打倒した源頼朝は鎌倉に幕府を樹立した。

それから二十九年、後鳥羽上皇は鎌倉幕府打倒をこころみて失敗、後鳥羽上皇や土御門上皇、順徳天皇は流罪され、仲恭天皇は退位させられた。承久の乱である。

高倉天皇の系統の皇族が朝廷に復帰し、守貞親王の第三皇子の茂仁親王が即位した、後堀河天皇である。隠棲していた持明院宮入道親王も復帰し、後堀河天皇から上皇の尊号を贈られて院政をおこなった。

鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』は守貞親王が院政をおこなうにいたったいきさつを、つぎのように述べる。

「持明院入道親王 御治世あるべしと云々」

治世は治天とおなじ、皇室の実質的な代表として政治をおこなう立場、つまり上皇だ。『吾妻鏡』の記事は守貞親王が実質的な上皇として治世するのを幕府が承認、いや、歓迎する姿勢であったのを示している。

後堀河天皇が父の守貞親王に上皇の尊号を贈ったのは八月十六日だが、『吾妻鏡』に尊号の件の記述はない。すでに実質的な上皇である親王に、あらためて上皇の尊号が贈られた、問題視するにはあたらないうのが幕府の対応であった。守貞親王の諡号は後高倉院とさだめられた。

中山愛親はひとつの峠を越えた気分である。筆をにぎる指にちらをこめ、後堀河天皇から守貞親王に尊号が贈られた理由を書いた。

「皇父たるに依つてなり」

天皇が天皇の父に贈呈するのだ、なんら違法の措置ではない。文句があるなら、いつてみる！

愛親の気分は昂揚している。

「皇父たるに依つてなり」

この一文が意味するものを、なによりも強く、強く、当今祐宮の胸におさめていただきたい。

第二の例は後花園天皇である。後花園天皇は父の伏見宮貞成（むさは）親王に上皇の尊号を贈呈した。そのいきさつは、つぎのとおり。

第百代の後小松天皇が第一皇子の実仁親王に譲位した。実仁親王は十二歳で即位、第百一代の称光天皇となり、後小松上皇が院政を

おこなう。

称光天皇は若年であるうえに病弱、父の圧迫から逃げようとして逃げられず、精神の安定を欠き、皇子皇女にめぐまれぬまま天逝した。

後小松上皇は伏見宮貞成親王の第一王子、彦仁王をみずからの養子にむかえ、即位させた。第百二代の後花園天皇である。

後小松上皇の院政はしばらくつづいたが、上皇が亡くなると後花園天皇は親政をおこない、皇子の成仁親王に譲位して院政をおこなった。

伏見宮は北朝第三代の崇光天皇の第一皇子、崇仁親王が創建した宮家である。二代は治仁王、三代が治仁王の弟の貞成親王。

称光天皇が亡くなったとき、貞成親王が践祚するのではないかと噂が出た。親王は噂をうち消すために剃髪出家し、入道道欽と号した。貞成親王の王子の彦仁王が後小松天皇の養子にむかえられ、即位したので以後の皇統は崇光天皇の子孫によって継承される。

正長元年に践祚した後花園天皇は父の貞成親王に後崇光院の尊号を贈った。

「伏見宮さまが剃髪までして践祚の噂をうち消したのはは異常だ、いきさつを説明してくれぬか」

「ふるいはなしです。そのうえ、持明院統と大覚寺統の皇統争いと両統迭立てつりつ（てつりつ）、南北朝の争いがかかわってはなしの筋道がみだれます、わたくしの推測をまじえなければなりません……」

「必要ならば推測は有効、有職故実の中山家の恥にはならぬ」
一条輝良に励まされ、ならばと前置きして中山愛親は語る。

持明院統の光厳天皇は足利尊氏の奏請をうけ、在位三年で弟の豊仁親王に譲位した、北朝二代の光明天皇である。光厳上皇は院政を開始した。

延暦寺に逃れていた大覚寺統の後醍醐天皇が帰京したので、光明天皇は後醍醐天皇に上皇の尊号を贈り、後醍醐の皇子の成良親王を

皇太子とした――

「ええっ、後醍醐天皇も上皇の尊号を！ 知らなかったなア」

「この時点ではまだ、両統迭立のルールは有効だったのです。後醍醐天皇の皇子をみずからの皇太子とすることで、光明天皇は、後醍醐天皇が自分に譲位した形式をつくったつもりでしょう。上皇の尊号は皇位無効の通告書みたいなもの」

「なるほど。同一人が天皇と上皇を兼ねるのは不可能だ、論理矛盾だからね」

だが、後醍醐天皇が京都を出て吉野にむかったため、朝廷の南北分裂が決定的になった。

光明天皇はすかさず皇太子成良親王を廃し、兄の光厳上皇の皇子、自分には甥にあたる興仁親王を皇太子として、やがて譲位した。北朝三代の崇光天皇である。

崇光天皇の在位三年目、足利尊氏と弟の直義が戦争をはじめた。幕府と朝廷の分裂がからみあい、政局は複雑な状況となるなか、崇光天皇は退位に追いこまれ、皇太子も廃され、北朝の天皇が不在の異常な事態担った。

足利尊氏と息子の義詮は直義との戦争に勝利し、京都を制圧、鎌倉も占領した。義詮は光厳上皇の皇子で崇光上皇の弟の彌仁親王を皇位につけて北朝の建て直しをはかった。後光厳天皇である。

彌仁天皇が擁立される過程で、崇光上皇はみずからの皇子崇仁親王の践祚が可能なのではないかとの展望を抱いた――

「……ではないかと、推測いたします」

「崩してはならん絶対の掟、とまではいわぬが、嫡子と弟がいるなら嫡子を皇位につけるのが常道」

「崇光上皇は幕府にはたらきかけたはずです、崇仁親王践祚の道をもとめて」

「幕府は相手にすまいな。嫡子践祚は常道、常道が通ると幕府は強権行使の機会を失う。あえて邪道をゆくのが権力強化の道なのだ」

宿願をはたせぬまま、崇光上皇は亡くなった。

榮仁親王も足利義満によって落飾させられ、父祖伝来の領地の多くを皇室領としてとりあげられ、窮地におちいったが、おもむろに勢力を挽回し、ついに伏見宮創設に成功した。

いま、今出川通りをはさんで伏見宮家と桂宮家は南北にむきあっている。中山家とも近い。

「崇光天皇と榮仁天皇、二代にわたる無念を貞成親王が知らぬはずはない。たとえ践祚の機会が到来したからとて、先祖二代の無念を知らぬ顔で践祚するわけにはいかなかった」

「貞成親王の謙虚が後花園天皇の尊号贈呈につながったというとなにやら因縁ばなしになりますが」

愛親の注進状がまちがいなく当今のお手にとどくようにと、段取りを検討、これでよしと確認したあとで、輝良が宣言した。

「これが、ことのはじまり」

「はじまりです。テンメイ八チ、ツチノエサル、ムツキ・・・」

「テンメイ八チ、ツチノエサル、ムツキ・・・なんじゃ？」

「はあ……ええっと、なんでしたかな？」

(第2章・終)

火が出た。

天明八（1788）、戊申（つちのえね）の年の睦月（むつき）三十日の未明、京都の宮川町団栗辻子（どんぐし）から火の手があがり、鴨川を越えて市街を焼きつくし、二月二日の明け方に鎮火した。焼いて焼いて、焼きつくし、燃えるものがなくなって鎮火した。

三万六千七百軒の民家が焼失、被災所帯は六万五千三百、二百一の寺と三十七の神社が焼けた。死者があまりにも多いから数がわからない。

光格天皇はとりあえず下鴨神社に避難、内裏が焼けたとわかってから聖護院に行幸し、仮の内裏とした。

中山家も焼けた。一乗院宮里坊も河鱸も、鷲尾も滋野井も藤波も、みんな焼けた。

猿ヶ辻も焼けたにちがいないが、とすると、

「ああっ！」

自分の叫び声に刺激されて正気をとりもどし、木ノ内民夫にもどった。

猿ヶ辻はどうなった？

サルは？

中山家よりも先に猿ヶ辻やサルのが案じられたのは、中山愛親よりも木ノ内民夫の割合が濃厚な状態で正気にもどったからだ。

余燼けぶるなか、猿ヶ辻まで、いや、昨日までの猿ヶ辻に走った猿ヶ辻の塀は焼けて崩れ、残骸に変わっている。残骸のなかからニユーツとつきだしている焦げた針金はサルを閉じこめていた金網だろつ。

「ここにいたサル、どうなったか、ご存じじゃないですか？」

「御幣かつぎの、あのサル？」

「金網が焼け落ちるまえに焼け死んだのではないかと」

「焼けたにきまつているが、焼け死んだというのは、どうかなア」
「はあ？」

「木でつくったサルだからね、生きるも死ぬもない」
民夫は両手を鼻と口にあて、くすぶる煙の臭いに耐えられない様子をした。このひとと会話していると、猿ヶ辻のサルの存在の神秘を察知されるかもしれない恐怖を感じたから。

サルは焼けて、死んだのだろう。

だがしかし、おれは、どうして、こんなにも猿ヶ辻のサルのことが案じられるのか？

猿ヶ辻から離れ、あてもなく歩いていたら、

「テンメイハチ、ツチノエサル、ムツキ」

足下で声がする。

テンメイハチ――

「生きて、いた！」

サルが生きていたのはわかったが、姿がみえない。

「いま、どこに？」

「テンメイハチ、ツチノエサルっていう声が大きくきこえる方角に歩いてきてください」

「どういうふうにも、やればいい？」

「グルリグルリと輪をかきながら歩く。輪をすこしずつ広げれば、声が出ている方角がわかりますよ」

この技術、ソナーっていうのじゃなかったかなあ。ソナーを正しくいえば sound navigation ranging、単語の頭の s と n a と r をとって snar、ソナー。二周目、三周目とすこしずつ輪を広げたら、声が大きくなる方向を特定できた、猿ヶ辻から東方の方角である。

むかし、このラインを歩いたことがあるような、ないような――

「木ノ内さん」

ささやく声が地を這ってきこえ、幸神社の金網におさまるサルが御幣を振って歓迎してくれた。ようやくサルと再会。

「焼け死んだのじゃないかと、心配で、心配で……」

「焼けた、ともいえる。焼けなかった、ともいえる」

「説明してください、ぼくに理解できる言葉で」

「むずかしくかんがえないで、ぼやーっと、シンプルな精神になればわかります。われら木造のサルは人間がつくりました。デザインが先行し、デザインを追いかけて個体が造形される。焼け死んだり、盗まれたりするのとは造形された個体、デザインは永遠に存在します」

「猿ヶ辻には、もともと金網はなかった。あなたが夜な夜な地面に降りて遊びにゆくから、金網を張って閉じこめたのだというんですが」

「金網で閉じこめられるのは造形された個体です、デザインは閉じこめられません」

「赤山禅院のサルも……」

「おなじです、新日吉(いひえ)神社のサルもデザイン先行、造形後追い」

「いるんですか、サルが、新日吉神社に？」

木ノ内民夫は、新日吉神社へ行った。あなたは、いまはひまだが、もうすこしすると忙しくなる、新日吉神社にゆくならいまのうちだとサルがいったから。

新日吉神社、正面の石段をあがりきった両脇、金網のなかに、なるほど、サルがいた。

「新日吉神社、サル、いました」

「個体ではないが、新日吉神社にはもうひとつサルがいるのに気づきませんでしたか」

「もうひとつ……？」

「サルというよりは、サルと綽名(あだ)された人間」

本殿の右奥のちいさな摂社、この祭神がサルと綽名された人間なのだそうだ。まあ、行ってみなさい、忙しくならないうちにと勧められ、またまた行った。

本殿の右奥のちいさな摂社に樹下(このもと)神社の額がかかっている。樹下神社の祭神がサルと綽名された人間だと猿ヶ辻のサルはいうんだが、わからない。

わからないまま、幸神社にもどり、わかりませんと報告した。

「コノモトをキノシタと読めませんか？」

「コノモトをキノシタ……ああ、そうか、太閤秀吉、木下藤吉郎を樹下藤吉郎としたのか！」

「比叡山の神が日吉山王、山王のお使いのデザインを造形したのがサル、秀吉の幼名が日吉丸、サルと綽名されたゆかりで新日吉神社にサルが配属され、樹下神社ができたとかんがえられる。表立って秀吉を祀れない時期があったから、木下を樹下として非難を避けたのでしよう」

「わたしは忙しくなるんですね、これから」

「木ノ内民夫さんはなんでもないが、中山愛親さんは目がまわるほど忙しくなります。江戸では、もうはじまったのです」

「ナカヤマ……ああ、えーと、そうだ、ぼくは木ノ内民夫だが、中山愛親でもあるんだ！」

猿ヶ辻のサルが「江戸ではもうはじまっている」といったのは幕府の老中首座、奥州白河藩主松平越中守定信(えっちゅうのみさだのぶ)の上洛がきまった、そのことをさしている。

京都大火について、幕府の対応は早かった。

高家(こけ)の武田安芸守信明を光格天皇と皇后欣子、後櫻町上皇の見舞いとして上洛させたのが二月四日、十日には勘定奉行の根岸肥前守鎮衛(やまもり)を上洛させた。重役の勘定奉行派遣は内裏御所と二条城の再建という大事業の開始をつけるものだ。

十三日には天皇への黄金五十枚ほか、さまざまの見舞いの品々をどける使者として高家の中条河内守信義の派遣が決定した。京都市民救済資金として米三千俵と銀六十貫目の貸与がきまったのは二十一日。

三月二十二日に松平定信が禁裏御所御造嘗御用掛に任命された。
定信は西国の巡検も兼ねる。

京都大火の急報がとどき、勘定奉行の役人たちが顔色を変えて、大
変だ！」と騒いでも定信は平然、「大飢饉よりはましだ」といつて
のけた逸話がある。

定信の政治家として器量を語る逸話だが、器量はもちろん、出身
も上格である。徳川御三卿のひとつ、田安(たやす)宗武の三男だか
ら八代將軍吉宗の孫にあたる。ときの將軍十一代家斉はおなじく御
三卿の一橋治済の子、吉宗の曾孫にあたる。十代將軍家治に子がな
かったので、家斉が養子となって十一代將軍となった。

定信が家斉より十五歳の年長、器量も定信が上とみられていたら
しく、はじめは徳川本家の養子としては定信が適任とみられていた
ようだが、惜しいかな、それより先に定信は白河藩松平家の養子に
なっていた。養子縁組を破棄して田安家にもどり、あらためて本家
の養子になる手がないわけでもなかったが、当時の老中の田沼意次
が妨害し、実現しなかったといわれる。

英才の定信が將軍になると、田沼はおのれのおもいどおりの悪辣
政治ができなくなる、だから妨害したのだと解釈され、そこでまた
定信の英才が高く評価される。真相はともあれ、悪評高い 田沼時
代の主役の田沼でさえ敬遠した松平定信が京都にのりこんでくる。

「どうなるんですか、英才政治家の松平定信をむかえる京都の政界
は？」

「しっかりしてくださいよ、木ノ内さん。どうなるも、ならないも、
すべては中山愛親、あなたの肩にかかっているのです」

「そうだ、わたしは中山愛親なんですね。すっかり忘れていた！」

「一条輝良と中山愛親の提携を崩さない、これが第一」

「わたしが一条卿を激励し、自信を持っていただく」

「そのとおり！」

一条家の屋敷の再建工事がすすみ、仮普請ができるのを待って愛親は祝いにかけてつけ、輝良と対面する。

「先日の注進状を拝見させていただきたい」

「なにか、不足の文言でも？」

「後日に疑惑の種をのこさぬよう、念には念を入れて」

「頼むぞ」

愛親が起草して輝良の検閲をうけた注進状が持ち出された。

愛親としては注進状の文言に欠点はない自信がある。それをあえて今日、ここに持ち出してもらったのは輝良の覚悟のほどを試したいからである。

「よろしゅうございますか、左大臣さまとわたくし前大納言は宮中をゆるがす一大事件をやるうとしていのですぞ。失敗すれば猛烈な反撃を食らうでしょう。そうならぬために、念には念を入れて」

「恐怖のこころはない。われは決断した」

輝良の声には張りがあった。家礼の愛親をじゅうぶんに信頼している。

「まず前文から、『仰せに依り注進』、よろしゅうございますな」

「もちろん、よろしい。われら臣下の勝手な存分で注進するのではない。さきに当今の仰せがあり、われらは仰せに依って注進も申しあげるのだ。もうしあげるのが臣下の義務、口を噤（づ）んでもうしあげるのは臣下の義務に背く、反逆といって過言ではない」

「つきに本文の第一、『親王より院号進呈の初例、後高倉院……』」

「よろしい、申し分ない」

愛親は注進状から視線をあげ、輝良の表情から覚悟のほどを探るうとする。

「よろしい」

輝良がくりかえし、

「越中守が到着するまえに朝議で決し、勅許をいただいでおかねばならぬ」

「越中守、どんな男でしょうか？」

「田安家の生まれ、ことと次第によつては当代の將軍になっていたかも知れぬという」

「手強い相手？」

「ならばこそ、われら、やり甲斐もある」

中山家の屋敷も再建され、愛親の有職故実研究も以前の調子をとりにどした。

大火によつて失われた内裏御所が再建されるのは当然ながら、せっかくの機会である、ほんものの御所を再建できぬものかといった気分が公家のうちに盛りあがった。ほんものの御所、それはいうまでもない、平安京の内裏とおなじ構造の御所だ。

朝廷に再建資金がないのはもちろんだが、織田信長から豊臣秀吉、そして徳川家康と代々の権力者は御所造営に権力の金庫から造営資金を投じてきた。であるから、このたびの再建造営費用は徳川が支出して当然、われら公家の責任は、ほんものの御所とはこのようなものであるぞと徳川に示してやることだ。徳川が果たすべき責務の内容を教示してやるのだから、徳川に媚びるのではない、徳川を助けてやるのだ。

こうなると、さあていよいよわれの出番だと愛親は奮起する。ほんものの内裏とはこのように素晴らしいものであったのだと示して、さすがは有職故実の中山家だと評判されたい。

平安京の大内裏や内裏の様子はどのようなものであったか、あれこれと調査をすすめるうちに、

「中山さま、失礼ながら、そのことなら、あなたよりずっと詳しく知っておる方がおられますよ」

「どなたですか、それ？」

「裏松(うらまつ) 光世さま、いまは隠棲なさっておりますが」

裏松光世、きいた名だが、はて、どこで耳にした名か——はっと記憶がもどった。桃園天皇の治世、宝曆八年の騒動である。年号に

ちなみ、後世では宝曆事件という。

越後の竹内式部は上京して徳大寺家に仕え、垂加神道と和学をまなび、駄屋町通丸太町に塾をひらいて門人に教え、公家にも神書『日本書紀・神代巻』を講義して影響をあたえた。桃園天皇の側近に門人が多いところから、いつしか天皇自身も式部の学説に惹かれるようになった。

神代史を研究していると、いつか、かならず、武士勢力が存在しないことに気づく。武家勢力に頭をおさえられる現状を屈辱とする気分が公家のあいだに醸成され、「いつか、かならず、やりかえしてやるぞ!」と、革命にあこがれる空気が生まれる。天皇のまわりには武芸をならう公家があらわれた記録もあり、そのままには信じられないが、革命憧憬のうすけむりぐらいは立っていた。

それが京都町奉行や所司代に察知され、そうと知らされた桃園天皇は「もう、どうにでもしてくれ!」と絶望の声をあげた。三十数人の公家が処罰され、左少弁の裏松光世は出仕停止、永蟄居。

十八歳だった中山愛親、事件の記憶は生々しい。

光世のあとは四辻実長の三男の公英が謙光と改名して裏松家を相続し、隠居の身の光世は平安京の研究に専心して長い時間をすごすことになる。

裏松家は烏丸(かすね)家の庶流、公家としての家格は六段階のうちの下からかぞえて二番目の名家、領地は百三十石の微禄、烏丸家の家礼の役をつとめている。家礼はあくまで同族の世界のなかの立場であって、官職ではない。名家の能(家職)は文筆ということになっっているから有職故実とちかいいえばちかいが、おなじともいえない。

光世は烏丸光栄の子として生まれ、裏松家の養子になった。永蟄居の処分は二年後に解かれたが、出仕停止はそのまま、つまり浪人、生活は困窮をきわめた。

自分の蔵書といえるほどの書籍はなく、あちらの家、こちらの家をたずねて書庫をみせてもらい、これと目をつけた書籍を借りてひ

たすら抄録にはげみながら平安京大内裏の研究をつづけた。

その裏松光世にちかづき、平安京に関する光世の有職故実研究を知って、愛親は動転する想いをさせられた。ほかのことなら他人にゆずることはないが、平安京の故実となると、自分は光世の足下にもおよばない感じだ。

困惑の極みに立ち至った頭をかかえる愛親だが、光明がさしてきた。

「テンメイハチ、ツチノエサル……」

「ああーっ、助けてください。」の場合、どうすればいいんですか！」
気がつくとき、幸神社の金網のサルの前に坐っている。

「困ったとき、なーに、これくらいの苦境は自分で突破するさ、な
どとがんばらないでください。がんばるのがいちばんよくない」

たったいま経験したばかりの真理である、木ノ内民夫はウンウンと深くうなづき、サルの教えを待つ姿勢。

「有職故実の家として第一番の誇り、これをまず捨てるのです」

「我が中山家は無名の存在になってしまつたのでは？」

「無名になるか、ならないか、それはあなたが賢明にかんがえ、賢明に行動するか否かにかかっている」

「それは、まあ、そのとおりです」

「裏松光世の大内裏研究は最高レベル、これ、あなたは自信をもつていえますか？」

「くやしいのですが」

「ほら、それがよくない。いいですか、素晴らしい研究成果に出合つて、こんなに嬉しいことはないと言喜の気持ちに浸るのです」

大事なところですよ、あわてずにとサルの温顔がはげましている。

あわてずに、あわてずに――

「はい。嬉しい気分が湧いてきました」

「その調子！」

「いい気持ち、これを歓喜と言ってまちがいないとおもいます」

「それなら、もう、わかったはずですよ、素晴らしい研究を成し上げた裏松光世は偉大な学者にちがいないが、その事実を認めて広い世界に紹介する努力を惜しまない中山愛親のほうがもっと高いレベルにある、こういえるじゃありませんか」

「そうかつ、わかってきました！」

「それが賢明な思考、賢明な行動です」

裏松光世から大内裏研究の大概を教授してもらい、朝廷にもちこみ、光格天皇の同意をいただいたうえで幕府に告げる、内裏御所の造営規模について主上はこのとおりの旧制に復帰するのをお望みでありますぞ、と。

「これでいいですね」

「もちろん！」

「主上の同意をいただくのは、どのようにすれば？」

「なんのための左大臣ですか！」

「一条輝良さまのお手を借りる……？」

「そのとおり！」

ここで民夫は気を失い、反対側の世界で正気にもどると中山愛親になっている。いつものとおり。

松平越中守定信は天明八年五月二十三日に入京、洛東の建仁寺を宿舎とした。大火の火元となった団栗辻子は建仁寺の境内の西、そのまた西が鴨川の川原。

定信はまず、新任の京都所司代松平和泉守乗完を召して内裏御所造営の予備工事の進捗について聴取した。そして二十五日、仮御所の聖護院に参内、天皇以下それぞれに献上物をさしあげた。

在京の幕府高官が天皇に拝謁するとき、両手両膝をつき、這いつくばって進むのがしきたりであった。陪席の公家はそれを軽蔑して「関東の犬這い」と呼び、日頃のウツパンを晴らす。「這い」と「拝」が通ずるところから「犬這い」の呼称になったのだらう。

「越中守は犬這いをしなかった！」

一条輝良が驚愕の気持ちをおさえられぬ風情で、愛親にいう。

「犬這いをせず……ならば越中守は、どのように主上のまえに出たのですか？」

輝良によれば、定信は上半身を起したまま、膝頭を交互について進み、拝礼し、膝頭について退席した。定信が退席したあと、天皇は関白鷹司の耳になにごとかを告げていたが、それはどうやら、定信の動作に好感を得たとの印象をつたえたようであった。

「越中守、手強いですな」

「なかなかのもの」

越中守は手強いぞとの印象の出所について、もうひとつの逸話がある。

定信は仮御所の門で下馬したあと、すべての供の者に槍を伏せさせた。

槍は横にするよりは縦にするほうが武器として強い印象をあたえるが、御所参内のような場面では、主人が下馬した時点で供のものの槍を横に伏せるべきものであった。いつのまにか、在京の武士がしきたりをまもらなくなったが、公家のちからでは矯正は不能だ。

それをいま、老中首座の越中守みずから、下馬したあとの正しい槍の扱い方を示した。老中が手本を示せば、下位の所司代は槍を伏せなければならない。

それみたことかと溜飲をさげた公家も多いが、じつはこれ、錯覚にすぎない。これこそ定信の意気込みがなみなみならぬしであった。一条輝良と中山愛親が「越中守は手強い」とみたのは正しかった。

越中守定信が最初に会見したのは関白の鷹司輔平(すけら)であった。

じつをいうと、輔平は閑院宮家の出身、つまり皇族である。閑院

宮初代の直仁親王の第三王子だから二代典仁親王の弟、光格天皇の叔父だ。

内大臣の鷹司基輝が嗣子のないままに没し、同族のなかに養子の適任者がいないため、春日神社の神託によって輔平が継嗣にえらばれた。まず櫻町天皇の猶子、つぎに関白一条兼香の養子となつてから鷹司家を継ぎ、従三位、左大臣から関白になつたのが天明七年三月、四十九歳である。関白就任一年で、内裏造営事業をめぐつて越中守定信との会見に臨む。

輔平と定信の会見の前日、愛親は一条邸で輝良と密語をかわした。

「関白に先を越されました、わたくしの落度です」

「関白と越中守は、遠いながらも縁続きである。越中守の上洛がきまると、時をおかずに明日の会見を約束したのであらう」

「われらの注進は朝議で一決し、勅許を得たのです。関白は明日、朝議の結果を越中守につたえ、尊号の件を承諾させる義務がありま
す」

「朝議の結果は当今もご存じ、つたえぬわけにはゆかぬから一応はつたえるだらうが、あくまで、一応は、にとどまるとみておかねば」

「当今の甥にあたる関白、そのような図々しい所業はゆるされぬはずですが」

「閑院宮家の出身ではあつても、いまは関白鷹司家の当主、宮中席次は典仁親王さまより上である、実家の宮家よりは鷹司の利を図るのが人情。明日の会見、関白が越中守に十のうちの一か二でもつたえれば、ともかくも事ははじまる、よしとせねば」

「聖護院の仮御所、拝見いたしました。仮とはもうせ、あまりにもお手狭、主上のご心痛のほど、お察しもうしあげます」

「であるからこそ、江戸の内大臣に尽力していただき、主上のご満足なされる構造の御所を造営してもらわねばならぬ」

天明七年の將軍宣下によって家育は権大納言から内大臣に昇進し

ていた。

「再建造営にあたっては旧制復元をめざす、これが主上ならびにわれら臣下一同の望み。内大臣におかれては異存なしとおもわれるが

「旧制復元、それは我が内大臣の望みでもありません」

両者のあいだでいきなり合意に達した旧制復元とはつまり、王朝時代とおなじ規模の内裏御所をつくること、紫宸殿・清涼殿・承明門・日華門・月華門・回廊などをそなたほんものの御所の造営だ。関白輔平の旧制復元要求にははっきりとした含みがあった。俗にいうところの 吹っかけてやった！ たぐいの要求ではない。

「旧制復元に異存はありませんが、しかるべき指図(さしず)がなければ雲をつかむはなし」

定信が強く出たのは、しかるべき指図(設計図)のない現状を共通の認識として、新築内裏をできるだけ小規模にしたいからだ。構造はどうであってもかまわないのが、縦横(たよこ)の規模は縮小して費用の削減をはかりたい。旧制の指図があると、おもいのおりの小型造営の邪魔になる。

「しかるべき指図が存在せぬとおっしゃいましたな。失礼ながら越中守殿、そのこと、どちらからおききになりましたか？」

「だから、といって……」

あるはずがないと決めこんでいるから、咄嗟の返答ができない。

「裏松光世、ご存じでしょうか」

「いや」

「宝暦八年、竹内式部の……」

「竹内……ああ！」

式部の事件の起った宝暦八年は松平定信が江戸の田安邸で誕生した年である、記憶がないのはもちろんだが、宝暦事件の続きといえべき明和事件が江戸で起ったのは十歳のときだった。宝暦事件の関係者処罰については京都所司代が公的に介入したから、幕府の記録

にのこり、高級官僚にとっては検討すべき事件とされている。

「裏松光世は永蟄居に処され、隠退したあとは平安京大内裏の調査研究に挺身してまいりました」

裏松光世から中山愛親へ、愛親から一条輝良へ、そして輝良から輔平に託された研究結果の一部の書類が松平定信の前にあらわれた。

一読、松平定信は仰天した。

定信は考証学者である。いにしえのあれこれを調べ、証拠をあげて論述するのが考証、いいかえれば有職故実である。中山家のように家の職としてはいないから有職故実家とはいえないが、このたびの上洛でも、公務の余暇には京都の史蹟の考証をやるうと、楽しみにしている気配がある。

こういう定信だ、考証学者として桁違いにレベルの高い裏松光世が三十年にちかい時間をかけた渾身の研究結果を目のまえに出されては、素晴らしさに目を奪われ、ポヤーツ、抵抗なんかできるわけがない。

「出水(でず)通とは、そもそもは近衛通であったのですな！」

「近衛府の門からはじまる大路だから近衛通です」

「左京の二条には代々の主上が池亭(けい)にお出ましになられて景色をお楽しみなさった神泉苑が……いもはもう影も形も失われました」

「恐縮に存じあげます」

平安京の優雅な園の神泉苑が徳川家康によって踏みつぶされ、その跡地に無骨そのものの二条城を建てた。

裏松光世の研究成果をまえにして、暗にそのことを指摘されると、定信は頭をさげて恥じ入る姿勢をみせるしかない。

このときにかぎってというと、徳川幕府老中首座、悪名高い田沼意次でさえ敬遠せざるをえなかった松平越中守定信は関白鷹司輔平と左大臣一条輝良が仕掛けた擲擄の沼の底につきおとされたのである。

「越中守殿、まさか不同意のはずはないが、念のためにもうさば、

主上は新たな内裏御所はほんものの御所、つまり桓武天皇がおつくりになった平安京の御所と同規模となるのをお望みである」

「承知いたしました。とはいえ……」

「おや、なにか、ご不満でも？」

「不満ともうされても……」

「ご遠慮なさらず、ここは遠慮無用の場なれば」

「関白殿、ありていにもうさば、われらが内大臣の台所、火の気も消えんばかりの払底。かともうして、いまより以上の負担を民に強いるのも、主上のご面目をかんがえれば好ましいとはもうされませぬ。そこをどうか勘案なされて」

輔平は瞑目、沈黙する。一瞬の沈黙の効果を計算したうえで、の瞑目、沈黙だ。

ようやく目をひらき、

「主上のご面目……恥辱をこらえていわねばならんが、不肖輔平、いまのいままで、そのこと、忘れておりました。越中守殿、どうか他言無用に願いますぞ」

一歩の退却をじゅつぶんに認識させておき、ころあいを見はからって反撃に出る。

「主上のご面目、それをこそ第一にかんがえねばならぬわけだから、新御所の規模については……」

「ははーっ」

膝を乗り出す定信を押し返して、

「おなじ形であれば、縦横の尺の多少の削減はやむをえないともうしても、それがかならずしも主上のご面目に傷をつけるわけではないかと……」

「かたちは平安京とおなじでなければならぬが、縦横の長さ、つまり御所の大きさは縮小してもいいのではないかと輔平が妥協の綱をなげた。

「関白殿、了解いたしました。これ以上のことは、もはや……」
妥協が成立したからには本日の会見は終了、お疲れでございま

たと挨拶をかわし、そろって退席——定信はこうしたいわけだが、
輔平はそうはいかない。半分の任務がのこっている。

「お待ちあれ、越中守」

トノもサマもつけず、越中守と呼び捨てて、

「主上のご面目、もはや傷ついておるのを知らぬか」

「傷ついておられる、もはや？」

定信の口調は、関白輔平のいう「傷ついた主上のご面目」とは、
もしいや、アレではないかと瀬踏みしている心境をのぞかせた。

瀬踏みしたら、深追いはよくない。深追いすると、そのまま、二
歩、三歩、ズルズルツと深みに嵌まるおそれがある。

「主上の父上、おそれおおくも閑院宮典仁親王さまは践祚も即位も
なさらなかった。そこで主上は、もしいやご自分は親不孝の罪におち
いつているのではないかと、昼も夜もお悩みである」

江戸の幕府の老中のまえで、実の兄ながら宮中席次では自分より
下位のひとを「おそれおおくも閑院宮さま」と呼ぶのは、切ない気
持ちに、むずがゆい気持ちがかさなって奇妙だが、ここは耐えねば
ならない。

「はーっ」

定信の瀬踏みは的中した、アレである。

瀬踏みが的中したとわかったからには、躊躇はかえってよろしく
ない。サーツと返して、この場をサーツと下がるのがいい。

「主上におかれては、ご尊父閑院宮典仁親王さまに太上天皇の尊号
を贈呈なさりたいご意向であられる。よって江戸の内大臣はしかる
べく手続をすすめよと関白鷹司殿が將軍輔佐の不肖松平越中守に指
示なされた、かように承知いたして、さしつかえございません」

語尾の「な」にちからをこめて高調子にし、不貞腐れた気持ちを
表現した。定信が不貞腐れているわけではない、不貞腐れてみせた
のだ。

そして輔平が、

「太上天皇はすなわち上皇と略称する」

関白としてはなんと滑稽、余計なことをいったものだが、わざと俗な調子でいつてのけて、ともかくは会見が穏やかに終了した印象をのこしたつもりだ。

鷹司輔平と松平定信の会見の様子は、つぎの日にはもう左大臣一条輝良につたえられていた。幸神社に仮住まいの猿ヶ辻のサルが輝良の家礼の中山愛親に、そして愛親から輝良につたえられた。

「越中守は裏松光世の永蟄居処分を解除すべしと指示したそうです」「すでに処分は解かれたも同様だが、裏松の大内裏研究にはよほど感服したとみえる」

「先を越されました」

「裏松の名を当今に披露するのは鷹司関白、そのときには当然、越中守の名が添えられます」

「当今さまが越中守を賞する材料ができるのはわるいことではない。越中守を味方にすれば、尊号進呈の件は実現しやすくなる」

つぎに、尊号進呈が話題になる。

「越中守が尊号贈呈に異議をとえなかった、これは不審におもわれますが」

「越中守は予想していたからだ」

「尊号問題がもちだされる、と？」

「じつは、江戸にも尊号問題がもちあがりそうな気配がある」

「なんと、まあ！」

愛親はおもわず、「なんと、まあ」といったのだが、いったあとで後悔した、江戸で尊号問題が起きるはずはない、天皇もいない、親王もいない江戸に尊号問題などはないのだから。

愛親につぎをいわせず、輝良が、

「天皇もいない、親王もいない江戸で尊号問題が起るはずはない、そうおもっておるのだな」

「ちがっておりますでしょうか？」

「おおちがい！」

叱責の大声ではない、たがいの共感を確認したしるしの大声だ。

「とすると、だれが？」

「内大臣、征夷大將軍の徳川家斉」

「まさか」

「將軍にも父親はおる」

「それは……ああ！」

徳川家斉は御三卿の一橋治済の子で、十代家治の養子になり、十代將軍となった。

將軍として自信をつけると、実父の治済に大御所の尊称を進呈したいとかがえるようになった。

親王や摂家、清華家、大臣家、將軍家の隠居所を大御所といい、そこに住むひとを大御所と尊称する。幕府では駿府に隠退した家康を大御所と尊称したから、最高の尊称とされていた。

「どうなるか、まだわからんが、家斉が言い出したら、越中守、なんとするか」

(第3章・終)

第4章 「武命に依り閉門」

松平定信は在京十日で江戸にもどった。

定信が去った京都では、裏松光世がつくった指図をもとに内裏御所の再建工事がはじまる。

「越中守は、鷹司関白との会談はまずまず安穩におわったと、好印象をもって江戸にもどったはず」

「関白も同様でしょう」

「ならば、前大納言よ、いまが好機であるか？」

「江戸は、御所造営の竣工をなによりも優先としておりましょう。」

工事の進行の邪魔にならぬかぎり、たいていのことは容認する気になっておるはずです」

「ならば、われより関白へもうしあげる、内々で所司代へ申し聞かすべしと」

「まずは内々で……」

- 49 -

左大臣一条輝良の提議を鷹司関白は承認した。

関白の指示によって武家傳奏が召され、所司代の太田備中守資愛の役宅に走り、中山愛親が起草した文書を手渡した。寛政元年二月のことである。

「典仁親王さまは御実父であらせられるゆえ、主上は尊号を宣下なさりたいと、ここ数年にわたって叡慮なさってこられた」

「先例がある。後堀河天皇がご実父の守貞親王に後高倉院の尊号をさしあげ、また、後花園天皇がご実父の貞成親王に後崇光院の尊号を贈られた」

愛親起草の文書に傳奏が言葉を添えた。

「多事のおり、このような重大案件をもうしいれるのは遠慮すべきとは存するが、主上のお望みであるからには、よんどころなく……」

「太田備中はうけとったのだな？」

「うけとりました」

「だが、江戸へ伝達した様子がない」

「太田備中が手元に留保している、さようにしか、かんがえられませぬ」

「所司代に、そのような権限があるのか？」

「所司代の役向きに、われらは手も口も出せませぬ」

一条輝良の顔に苦渋の色があらわれ、中山愛親がくちびるを噛む。

「備中は握りつぶすつもりか」

「できるならば、われらに文書を返却して、すべてがなかったことにしたい、などと」

「ならぬ、ゆるさぬ」

「しかし、鷹司関白が所司代の威圧に負けてお受けとりになれば、われらには手が出せませぬ」

「なにか、手はないか」

「なにもないはずはないと、愛親はおもつ。関白より一段の下位とはいえ、左大臣一条輝良さまが一步もつこけぬはずはない。なにかある。ないはずはない。」

「あります！」

「あるか！」

「江戸に手を伸ばしましょう」

「越中守に、いきなり告げるのか」

それでは事が荒くなりますと愛親はいった。荒くなると、もしやのときの退路をふさがれる。

「江戸にいうぞ、それでもいいのかと……」

「さようか、その手があるか。備中守を脅すわけだ」

どうすれば太田を脅せられるか、愛親が勘案をはじめた。

愛親が所司代をおとすれ、備中守に直面して、「傳奏を通じて渡された文書の処置はどうなったか」と問い質すのが真つ正面からの脅しだが、備中守が窮地に陥って逆上し、騒ぎになると、とりかえ

しがつかない。あの文書がすみやかに江戸に送達されるように仕掛けるのが目的、備中守を脅すのは手段にすぎない。

ああでもない、こうでもないと言親が頭をしぼっているうちに夏になり、そろそろ名案をみつけないと手遅れになるぞと焦りが出てきた。

所司代屋敷の前で奇妙なさわぎがおこっている、毎日々々、おなじ時刻におなじさわぎが起きる、さわぎを起こすのはきま^つって通日雇^{やと}の飛脚だ——うわさが愛親の耳にとびこんできた。

「通日雇がさわぎを起こす?」

飛脚便はもともとは宿継(しゆくつき)である。A宿↓B宿↓C宿↓D宿↓E宿へと飛脚人夫が受け継いで貨物をはこぶ方式だが、費用と時間がかかるのが欠点、大名や旗本は専属の人夫を雇って目的地まで直通の運搬を委託するようになった。これが通日雇。御用飛脚とも呼ばれて宿継飛脚より権威も信用も高いが、それを笠に、道中で優先扱いを要求し、容れられないと乱暴をはたらくこともあった。

ここ数日、格好も気つぶもいい若い男が三、四人、飛脚着に身をかため、陽があがるころ、所司代屋敷にやってきて、
「うかがいました。大切な品、おあずかりいたしました。宿継ぎなしに江戸までつつ走り、千代田のお城に無事におとどけいたします!」

大声でいう。

「なにをもうすか。ちかごろ、飛脚は呼んでおらん」と所司代の役人がいい、飛脚は「まちがいなくご注文いただきました」といいかえし、しばらくガヤガヤやって、いつのまにか姿を消す。

六日、七日と、別の男が飛脚着でやってきて、さわぎをおこした。

「千代田のお城に……飛脚はさようにもうすのか?」

現場の様子をしらべにやった小頭がもどってきて、愛親の問いに

「飛脚と自称する男の顔ぶれは変わっても、『千代田のお城』ともうすのはおなじ」と報告した。

「そうかッ！」

猿ヶ辻のサルが仕組んだ芝居じゃないかなと、愛親のなかの木ノ内民夫の部分が察した。確信はないが、この芝居が上出来なのはまちがいない。人間わざとはおもわれない上等な出来だから、やはりサルだな。

所司代屋敷の前の飛脚さわぎ——民夫がこの一点に意識を集中すればサルから反応があつて、これはあれ、あれはこれと説明してくれる仕組みになっている。だが、この芝居の件にかぎつては説明をうけないほうがいいと民夫は判断した。説明よりは、この芝居の効果はどう出るか、そこに期待をかけるべきだとかんがえた。

二月に所司代にとどけられた愛親起草の文書は、所司代の添え書とともに、ようやく九月のはじめに松平定信はじめ江戸の老中一同に送達された。

老中会議で定信は尊号宣下に反対の意見をのべ、老中一同の同意をとりつけ、將軍家斉の承認をうけて京都へ返信した。

「容易なるざる義であるから、再考なされたし」と、文面の主題は再考だが、実は拒絶である。

朝廷への返答とは別に、定信は鷹司輔平にあて、「ただいま、和漢の前例、故事をしらべております」と拒絶を匂わせる文言を送った。

年がかわり（寛政二年）、輔平から定信へ、「この問題につき、われは格別の意見をもたぬ」と、一步退却の見解が示され、「あなたが吟味なされた前例、故事の実例を拝見したい」とつたえてきた。

寛政二年十一月に新御所が竣工し、光格天皇は仮御所の聖護院から遷幸した。

皇族も公家も、町のひと、これが桓武天皇のおつくりなさった

平安京の内裏だったのかと、感嘆の声をあげる。

訳知りのひとは、平安京内裏の指図を復元した裏松光世、いまは落飾して法号を固禪とした人物の誉れを讃える。江戸の將軍の介入で忌まわしい罪に落とされ、三十年もの長期にわたって浪人ぐらしを強いられた固禪の名誉回復を、わがことのように悦んでいる。

すべてが大火以前とはいえないが、公家の屋敷もだいたいはもとどおりに再建された。公家屋敷の再建に幕府からの資金援助はないから、みんな爪に火を灯す苦しいカネぐりで再建した、新しい負債返済に苦しむ日々がはじまる。

新しい御所の新しい猿ヶ辻――

中山愛親は一条輝良の屋敷再建に祝辞をのべるため、まっさきに御所の西の一条家にかけてつけた。猿ヶ辻を過ぎるとき、サル見物のひとが猿ヶ辻に群れているのを見た。大火以前と同様、いや、前にもまして猿ヶ辻のサルが人気ものなのは愛親としても嬉しい。

一条家ではかたどおりの祝辞を述べ、帰路は猿ヶ辻に足をとめた。
「動きませんア」

「動かない」

「せっかく造りなおしたのです、新しい生命エネルギーを注入され、派手に動いてみせてくれるれと期待したんですよ、わたしは」

期待をはずされたひとが、ひとり、またひとりと去ってゆき、のこっているのはふたりだけ。

「つままないね、お母さん」

「だからいったでしょ、いくら新品ピカピカでも、木造のおサルさんが動くわけではないって」

いいながら、去ってゆく。

あれっ！

妻の愛子と息子の忠光――ではない――である――いや、やっぱり愛子と忠光だ。

ということはおれは中山愛親ではなくて木ノ内民夫にもどったのかなア？

サルが激しく動き、動きを言葉に変えて民夫の煩悶に光明をさす。

「木ノ内さん、お気づきのとおり、奥さんと息子さんですよ」

「いくら虚構だといっても、虚構が真実を超えるはずはない。妻と息子、どこがどうなって二十世紀の平成から十八世紀の天明、寛政に越境できたのですか？」

「わたしにもわからない。どこかに手違い、食い違いが生じたのです。でもね、あなたは心配しなくていいのです。あなたの横に立っていたのに奥さんも息子さんも、あなたが夫であり、父でもある木ノ内民夫とは気づかなかったのですから」

「手違いと食い違いがかさなればマイナスの自乗でプラスに転じる、つまり正常の状況にもどるのではないですか？」

「ものごと、かならずしも理屈どおりには展開しないということの、実例のようなものでしょう。奥さんと息子さんが寛政時代でも元氣澁刺と暮らせる能力があるとわかって、よかったではありませんか」
「おサルさん、あんたはわたしばかりではなく、妻と息子も、その、なんていえばいいのか、太田黒俊一さんの遺言の実践者として働かせるつもりなんですか！」

サルはくぐもった声で、ふたこと、みこと、弁解の文句のようなものをならべた。

「通日雇のさわぎ、あれは、あなたが仕掛けたにちがいないとみましたが、ちがいますかな？」

「わたしがやりました。ご覧のとおり、効果はありましたよ」

「分担からいえば、あれはわたし、ええと、木ノ内民夫ではなくて、中山愛親がやるべき仕事だったが……」

「左大臣とあなたは、ちょっと危険な領域に踏みこみつつある、しばらく控えていただこうかなと。中山愛親、つまりあなた、木ノ内民夫ですが、有職故実家としての名譽はじゅうぶんに高めたのです。京都だけではなく、江戸にまで。そろそろ、このあたりで……」

「一步後退すべきである、こういいたいわけ？」

「越中守は尊号問題を掘りおこしたのは中山愛親なのだ、すでに察知している。裏松固禪の名誉はなかなかのものだが、中山愛親には名誉のほかに江戸を刺激し、警戒態勢をとらせることから、政治力ですな、それがある。あなたは固禪を越えています。いつかもおなじことをいいますが、意地を張るのはおやめになること」

「わたしが退却しても、左大臣さまは、いかなさるかとおもうと
「深みに嵌まらぬうちに、はやく」
そこまでいって、サルは動きを停めた。

裏松光世の永蟄居処分ははやいうちに解除されていたが、出仕停止はつづいていた。新御所造営がおわつたのと同時に出仕停止が解かれたばかりか、『大内裏図考証』を献納して生涯三十金を下賜される途もひらけてゆく。

愛親は裏松光世が羨ましい。

わが中山家の有職故実の家職と裏松家の家職は違うものだから比較しても意味はないが、それはそれ、輝くばかりの功績をあげた光世が羨ましくてたまらない。

いや、光世の大内裏図考証の成果にケチをつける気は毛頭ない、猿ヶ辻のサルと固く約束したのだ。

だが、それにしても、である、褒賞ばかりか、三十年前の固禪の罰がゆるされ、名誉の回復を遂げたのは羨ましい。前大納言さまよ、このつぎはあなたの出番ではありませんか、うまくゆけば固禪さま同様の名誉をつけるではありませんかと囁く市井の声に誘惑され、煽動されている気がして、焦る。

さて、輝良と愛親は関白輔平が軟化しつつあると判断した、江戸の威圧に負けそうになっていると。
「関白を脅さねばならんのかな？」

「左大臣が関白を脅すとなると、『畏れ多くも』と前置きしなければなりません」

「おう、いかにも『畏れ多くも』だ」

鷹司輔平の弱点は、尊号宣下の件が光格天皇自身の発案であるところにある。江戸の威圧を理由に輔平が退却を策しても、天皇が、「朕（ちん）は退却せぬぞ」と宣言すれば輔平は違勅の罪に問われかねない。

しかしまた、輔平にも途はこのこされている、あからさまに「尊号宣下策を推進するについては反対」とはいつていない、書いてもいない、そこだ。

愛親は輝良に提案した。

「ここはひとつ、関白を激励するのがよろしいではありませんか。当今のお望みが実現される方向に臣下一同邁進すべし、関白さま、われらはどこまでもお味方いたしますぞ、と」

「それは名案。左大臣や大納言はもちろん、公家一同が関白に味方している姿を主上にご覧になっていただくわけだ、効果満点！」

輝良は輔平のあとの関白の椅子を狙っている。現時点では、輔平に味方する姿勢をみせておくのが得策だ。

「大納言は他人の気持ちを手にとるように察する。まるで手品の芸を、どこで修練したのかな、？」

「文学部で心理学をやりましたから」

「シンリガク……それは、なんであるか？」

輝良の率直なる問いによって、愛親はとつぜんの思考停止に襲われた。

ブンガクブデシンリガクなんて、いったい、なんのことだ？ われの頭脳は機能停止の状態になったのであるか？

愛親の現在の身分呼称は前権大納言だが、前任か現任かにかかわらず、権大納言に任じられた公家の切なる望みはただひとつ、「権」の字を外して百パーセントの大納言になることだ。

権大納言の一段上が大納言、それほどの差はないとおもつのは権大納言になった経験のないひとだ。ご当人としては一日もはやく「権」の字を外して大納言になりたい。

であるから、目のまえに権大納言がいれば、「権」の字を取って呼んで悦ばしてやるにかぎる。愛親は前権大納言だから、前大納言と呼んでやる。

愛親が「文学部で心理学をやりましたから」とこたえたのは自分を喜ばそうとしてくれる輝良のこころづかいに刺激されたからだ。が、「文革部で心理学」といった途端、「ブンガクブデシンリガク」なんて、これはいつたい、なんのことだろうと不安な気持ちに襲われた。文学部で心理学をやった木ノ内民夫の経歴が生身の中山愛親のなかに芽生えてきたのを、愛親自身は気づかない。

年が変わって寛政三年（1791）の正月、こんどは鷹司輔平から松平定信に「再考していただけませんか」と、尊号宣下に同意をもとめる書簡がとどいた。

「お父上の典仁親王にたいする（天皇の）御孝心に発していることである、まさか幕府として天皇のご孝心を無視なさるつもりではあるまい」

親孝行の倫理の次元に立って、正面から突っこんできた。

輔平の書簡には「どうだ、反論の余地はなかるう！」といった強硬姿勢がにじんでいるが、じつをいえば、松平定信としては、これはむしろ、「待つてました！」である。

当方が尊号宣下に反対するのは断じて経費のことではありませぬぞと、京都方が問題視するにちがいない論点を舞台からひきおろし、「尊号宣下のくわだてのすべてが非礼なのです」と切つて捨てた。

「このような非礼を正さなければ、正義は永久に立ち消え、はなはだもって嘆かわしき次第と存じあげます」

定信は末尾に「わたくしの所存をのこらず申しあげました」と書きそえた。内大臣家育はいざ知らず、内大臣の政務委任を一身にあ

ずかるわたくし越中守といたしましては一文一語たりとも変えるつもりありませんと、最後通牒（つうちょう）をつきつけた格好だ。

江戸側が強硬姿勢を示したことで、京都側は対抗措置をとらねばならない。誇張していえば、朝廷は胆を冷やしたのだ。

一条輝良と中山愛親の立場はむずかしくなった。強烈な起爆力がある尊号呈上策を政界に登場させた名譽の立場を否定されかねないのである。輝良の関白就任どころか、わるくすると左大臣の地位を失うかもしれない。

「名を捨てて実を取る、これは如何でしょう」

「実というと？」

「上皇の尊号はともかくとして、幕府が上皇同等の待遇をすればよいのだと、主上のお許しを得て江戸につたえる」

上皇同等の待遇とは、たとえばどのようなことか、過去に前例があるのかと輝良は問い、愛親が自信の顔色も強く、答申した。

「小一条院（こいちじょういん）の前例があります」

咄嗟の返答が出たところを見ると、愛親はすでに実質優先の秘策を練っていたにちがいない。

「小一条院……」

輝良の声には逡巡の色がある。

小一条院、安易にあつかえる存在ではない、ぐらいの知識は輝良にもある。

だが、故実にくわしい愛親が、いま、苦境にきりぬける秘策としてあえて小一条院をもちだすからにはそれなりの狙いはあるはずだ。

藤原道長が全盛期にさしかかったときの天皇は三条天皇である。

三条天皇は先代一条天皇の譲位をうけて三十六歳で即位した。皇太子であったとき、藤原済時の娘の姫子を入内させて寵愛し、敦明（あつあきら）親王をはじめ多くの皇子皇女にめぐまれていた。

三条天皇は敦明親王を皇太子にしたいと計画していたが、これに

対して藤原道長は娘の彰子が産んだ敦成（あつひら）親王の擁立をもくろみ、なにかにつけて天皇を圧迫した。敦成親王が即位すれば道長は天皇の外祖父になれる。

藤原道長は三条天皇の身辺に強引に介入した。耐えかねた天皇は敦明親王が皇太子になるのを条件として敦成親王へ譲位した。後一条天皇である。

約束どおり敦明親王が後一条天皇の皇太子になったが、道長は敦明親王を圧迫し、たまりかねた親王は皇太子の地位を投げ出し、敦成親王の同母弟の敦良親王が皇太子になった。のちの後朱雀天皇である。

退位した敦明親王には小一条院の院号があたえられ、上皇に準じる待遇をうけた。親王は藤原道長の娘の寛子を妻にしていたので、道長から少くない領地を贈られ、小一条院領とよばれる荘園が誕生した。愛親がいう「名を捨てて実を取る」の「実」が小一条院領だ。

- 59 -

「小一条院領……いかにも、名を捨てて実を取る、であるな。しかし、これを江戸が承諾するだろうか？」

輝良にいわれるまでもなく、愛親としても躊躇するところはある。

「小一条院の故事をあきらかにすれば、皇室にたいする道長の悪辣はあますところなく披露されますが、これは七百七十年もまえのこと、皇室にたいする悪辣を比較すれば内大臣徳川家斉の悪辣は藤原道長とおなじ、あるいは道長以上との悪印象が生じます」

「道長と家斉、さように簡単には比較できぬとおもわれるが」

「事実の比較ではなくて、印象の比較です。江戸としては主上に領地を献納するかわりに尊号贈呈は回避したい、つまり、名を取って実を捨てる」

「乗るかね、越中守定信は、内大臣家斉は？」

「乗らぬわけにはまいらぬはず」

愛親の目論見（もくろみ）は的中した。

典仁親王を小一条院と同等に待遇するならば尊号の件はひっこめてもよろしい——愛親が発案した策は朝議で承認され、鷹司閔白によつて光格天皇の勅意のかたちをとり、江戸に送達された。この時点では松平定信と鷹司輔平——江戸と京都——は提携の関係にあつた。

松平定信は勘定奉行にたいして、親王に呈上すべき——呈上し得る——妥当な領地の面積を面積を算出せよと命じる一方、輔平に感謝の意をつたえる書簡を送った。天皇が 尊号宣下を断念なされたとのご沙汰は「身にあまる」とまで感謝している。

勘定奉行が算出した数字はつぎのとおりである。

「閑院宮家の家領は基本が一千石、天明四年に 格別の訳 を以て一代かぎり一千石を加増済みであり、このたびの新規加増を一千石とし、一代かぎり合計三千石とするのが妥当であります」

合計三千石の数字のあとに、勘定奉行は強硬な姿勢にもとづく一文を添えていた。

「このように致せば、ご孝養の筋も立つのではございませぬか」

時間をさかのぼつて寛政三年の正月、鷹司輔平から松平定信にとどいた「再考していただけないか」と、尊号宣下に同意をもとめる書簡は、つぎの強烈な言葉で締めくくられていた。

「尊号贈呈の件は御父、典仁親王にたいする（天皇の）御孝心に発していることである、まさか幕府として天皇のご孝心を無視なさるつもりではあるまい」

倫理の次元に立つての朝廷の攻撃にたいし、そもそもは倫理の次元に立たないはずの幕府財政官僚が「親孝行の倫理なら、われらのほうがはるかに実践的でありますぞ！」といわんばかりの強硬な姿勢で上司である老中松平定信を突きあげたのだ。

勘定奉行の答申は老中会議で承認され、定信から輔平に呈上された。

老中会議の決定とおなじ内容の文言が定信から尾張家と水戸家に

もつたえられたが、そのことを記録した定信の手控えには、なぜ尾張と水戸へつたえたのか、その理由が、こう書かれている。

「深き存じ、これあり候につき……」

ふつうならば尾張や水戸へつたえる必要はないが、コトがコトだけに、あえてつたえたのだと定信は特記した。

気は進まないが、仕方がない――

このように処置しなければ、尾張や水戸から非難された場合に、対応できない――

定信はなにを恐れているのか？

閑院宮家の所領を一代かぎり総計三千石とするから尊号宣下の件は撤回してほしい――松平定信から鷹司輔平へつたえられたのは寛政三年の六月はじめだが、それから二ヶ月のあいだ、京都政界は関白人事をめぐる熾烈な争いにあけくれた。

そして八月二十日、鷹司輔平は閑白の座からひきおろされ、氏長者・内覧・隨身・兵仗などの身分特権を失った。輔平の閑白在任は天明七年三月からのあしかけ五年であった。

鷹司輔平の後任の閑白、それはいうまでもない、左大臣の一条輝良だ。

狙っていたことではあるが、これほどまで、おもいどおりに展開すると、なにやら空恐ろしい気にならないでもない。

中山愛親でもある木内民夫が目をつぶり、カンパクコウタイ、カンパクコウタイと声に出さずに観念、集中していると、猿ヶ辻に通じた。カンパクコウタイを字に書けば閑白交代である。

「来てくださーい！」

「このところ観光客が倍増、倍増、またまた倍増。お相手するのに忙しくて、そちらへ行けない。そちらから、こちらへ来られませんか？」

「行けません。ぼくがそちらへ行けば、中山愛親ではなくなつて、

ただの木ノ内民夫にもどってしまふ。木ノ内民夫の存在が無意味なわけではないが」

「あ、そうだった、忘れていた。緊急ですか、用事というのは？」

愛親でもある民夫が「緊急」とこたえ、待っていると、

「お待ちせ」

猿ヶ辻のサルの到着したのが肌と空気が接する感覚でわかる。慣れてきたから、視覚や聴覚、嗅覚に頼らずにサルを身近に感じられる。

「わたくしは、いや、輝良さまとわたくしはこうなるのを願っていた。懇望していたといつても、おおげさではない。だけどね……」

「輝良関白誕生のために、これといって具体的な工作はやらなかった、いや、やれなかった、そういうわけでしょう？」

「そうなんですよ。だから気持ちが悪い」

「わたくし、すなわち猿ヶ辻のサルがいきさつを説明してあげれば、いくらかは気分が楽に、なりますか？」

「おねがいます！」

「尾張と水戸です」

「越中守が尾張と水戸へ、閑院宮さまの領地を総計三千石に増額する案をつたえた、それですね。それなら、輝良さまも、わたくし愛親も知っているが……そうかつ、越中守をその気にさせたのが、サルさん、あなただったのか！」

「猿ヶ辻の金網のなかから、じーつと東北の方角を監視するわたしの視線に限界はない。尾張も江戸も水戸も、すぐそこ、至近距離」

あなたも知つてのように——サルが説明をはじめ。

十一代将軍家育は一橋治済の子、十代家治の養子として将軍になり、自信をつけると実父の治済を江戸城の西丸にむかえ、大御所として処遇したい欲望のとりこになった。

本気かどうかはともかく、家育はこの——サルは背中から入れて内裏の位置を民夫に意識させ——サチノミヤさまのように親孝行の倫理に立っているから強い姿勢をとれるわけだ。

治済にもその気はたっぷりだから、いわば父と子の協同作戦がはじまっている。

「だが、老中筆頭の越中守定信は治済を大御所にしたくはない……？」

「そのとおり。いまでさえ、元気いっぱいの家斉に手を焼いているのに、家斉の父の治済が大御所として乗りこんでくれば操縦は困難になる。越中守は田沼意次を真似て將軍の頭をおさえ、ほしいままの政治をやりたいわけではないのだが」

「將軍が元気であれば老中が困る……？」

「將軍は有能なる老中がやりやすい環境をつくってやり、老中は政策を立てて執行する、それがいちばん理想的」

尾張と水戸がどのように関係してくるのか、民夫の問いの表情に気づいたらしく、サルは、

「一橋治済の西丸のりこみを避けたい勢力、それはなにか？」

「それはつまり越中守の味方……そうか、そこへ尾張と水戸が出てくるわけだ！」

家斉の実家の一橋家は八代將軍吉宗が創設した御三卿のひとつ、そして吉宗は紀州家の出身だから、家斉も紀州家出身の將軍に数えていい。紀州家から二度も將軍が出たのに、おなじ御三家の尾張と水戸からは一度も將軍が出ていない。

「大御所とは將軍経験者の尊称だから、治済が大御所になれば紀州から三人の將軍が誕生するかたちになる」

「でしょう。尾張も水戸も黙ってはいられない」

松平定信が尾張と水戸へ、「深き存じ、これあり候につき……」と意味深長な言葉を添えて尊号献上は停止、かわりに総計三千石の領地進呈の案をつたえたのはそういうわけだった。

「サルさんに示唆された尾張と水戸がサチノミヤさまの周辺に内密の工作を展開したわけですか、わたしはぜんぜん知らなかった！」

「越中守は家斉にむかって宣告する、『天皇さまでさえご尊父への尊号宣下を撤回なさるのです、天皇さまの臣下の内大臣徳川家斉が

父に尊号を献上するなど、とんでもない！』と。もちろん無言のうちには、ですがね。尾張はともかく、水戸は古くから京都とは密接な関係を築いていましたからね、ツウといえばカアですよ。輝良さまも愛親さん、あなたも、知らぬぼうがよかったです、束縛されないから」

「よし、やるぞ！」

より広く、より多く——これが関白輝良と中山愛親の合言葉となつた。

「前大納言は中納言を……」

「関白さまは右大臣を……」

「関白さまの身で下僚を説得なさるのは畏れおおいことですが」

「非常の時である、しきたりに構ってはおられぬ」

手分けして公卿を説得する。より多数の公卿の賛同を得て、数achiから江戸を圧倒する作戦だ。

関白交代が寛政三年八月、十二月に参議以上の公卿にたいし、尊号宣下を是とするか、否とするか、見解をもとめる諮問が発せられた。

「否としたのは二名、前関白の鷹司輔平と左大臣鷹司政熙」

「予想どおり。かれらとしては否とせざるをえない」

鷹司政熙は輔平の子、一条輝良が関白になったのをつけて左大臣となつた。

「是としたのは三十五人」

「中山前大納言愛親、なかなかの強硬意見」

「お褒めにあずかり、恐縮でございます。渾身のちからをこめて筆をにぎりました」

「広橋前大納言伊光（これみつ）がこれほどまでの強硬論を陳述するとは意外であった」

「伊光が傳奏も権大納言も辞してから長い時間がすぎました。ちからを發揮する機会到来、これを離してなるものかと奮闘したのでし

よう

「われらにとっては強い味方」

「おおせのとおり」

「公卿の総意がしめされたといえる！」

「主上もお悦び！」

公卿の総意は二名の武家傳奏、正親町公明と万里小路政房から京都所司代を通じて幕府に正式につたえられた。文中に「前々から交渉してきたが、かなりの年月を経たので（主上は）猶予なく決定せよとおぼしめされている」とあり、時限を切った最後通牒だ。

京都方は背水の陣を布いた。

年があけて寛政四年の正月、江戸の松平定信は重職会議をひらき、京都方の強硬姿勢がしめされても屈しない、これまでどおり尊号宣下には反対するとの見解を表明した。京都方は典仁親王の老齢を理由として、すこしも早く尊号宣下を実現したいというが、親王の老齢を理由とするならばこそ、実現されるはずのない尊号宣下はあきらめ、閑院宮家の領地加増をきめて孝養の道を尽くすべきだと結論づけた。

京都と江戸のあいだに緊張が高まった。

四年の八月、兩傳奏から幕府に、「今年の十一月までには尊号宣下を実現すべきである」と、時期を限った催促がきた。

おなじ八月、京都所司代の太田備中守資愛が解職されて、堀田相模守正順に任命された。太田備中守の解職理由は病氣とされたが、尊号問題処理の最終段階にきて能力不足が懸念されたにちがいない。

松平定信は將軍家斉の権威をかりて最終段階をのりきろうとした。公卿のうちの強硬論者を処罰する腹をきめ、家斉の承認をとろうとした。家斉への伺書には強硬論者を「不忠の者」ときめつけ、「こ

れら不忠の者を退職させ、処罰するのは関東のご職任であります」と家育を威勢づける文言がおどっていた。「関東のご職任」とは將軍の権限を意味している。

九月、定信は老中にたいして「公卿衆三、四人を召喚するのが妥当」との見解をしめし、賛同を得たうえで家育の承諾をとりつけた。伺書には公卿三人、正親町前大納言公明、中山前大納言愛親、広橋前大納言伊光の名が書かれていた。

「もう一步、突き進むべきではありませんか」

愛親の言葉に、一条輝良は苦しい表情でこたえる。

「越中守は三卿の召喚を通告してきた。退却せぬつもりだ」

関白輝良の退却の意向がしめされた。

「わたくしの身を案じなされての後退でありましようか？」

輝良は無言、こたえない。

輝良の無言の意味が、愛親には手にとるように理解できる。愛親がこれ以上の強硬姿勢に出れば、輝良の関白の地位が危険にさらされる、そのことだ。

背を起し、輝良は重い口をひらいた。

「われがお側にいなければ……」

その先は愛親にもわかっていて。自分が関白を辞めさせられれば、主上をお守りするちからがなくなる、輝良はそういいたいのだ。

「承知いたしました。わたくしが江戸へゆきます。サチノミヤさまにも関白さまにも、それが最も安全な策でありましよう」

愛親の覚悟の披瀝で、輝良は勇気をとりもどした。

「家育と越中守のおもいどおりにはさせない」

まず、光格天皇サチノミヤの名で「公武に差し障りがあるから尊号宣下を見合わせる」と声明した。

そのつぎに、三卿の江戸召喚は前例がないとして反対を表明し、いくらかのやりとりのあとで、二卿なら止むを得ないとの妥協にあらずさりした。

京都側の尊号宣下停止をうけて、幕府からは高家の前田信濃守長禧が京都への使者に任命された。宣下停止を「善政」と讃え、正式に受け入れたことをつたえる使者である。前田信濃守は光格天皇サチノミヤに贈呈する豪華な歌集をたずさえていた。

三卿から広橋伊光の名が消え、中山愛親と正親町公明（きんあき）が寛政五年の二月に江戸に着いた。

江戸にむかう日、愛親でもある民夫は猿ヶ辻に行つてサルに訣別の挨拶をした。

「行つてきます。これが最後になるとはおもわないが、と行って、無事では済まないと覚悟しています」

「愛親さんがひどい目にあわぬよう、ここからじーっと良（うしとら）の方角を睨んでいますよ。武家政権の強圧など、柳に風とうけながして、軽傷でおもどりになるのを最優先なさってください」

- 67 -

猿ヶ辻から自邸にもどり、いよいよ江戸をめざしたとき、見送りに集まってくれた十数人のひとのなかから、少年の声があがった。

「中山大納言さまだ。無事におもどりになるといいね、お母さん」

「でもねえ、江戸には恐ろしいひとが住んでいるというから……」

ききおぼえはある声だが、だれの声か、わからない。

だれだろうなとおもいながら、東へ向かう。

中山愛親と正親町公明は寛政五年の二月十日に江戸に着き、十一日に松平越中守定信と会見、十六日から尋問がはじまった。十九日、二月二十二日と尋問がつづく。

尋問をつけながらも、幕府方になにかしら躊躇（ちゅうちょ）の様子があるのを察知する余裕が愛親にはあった。強圧して愛親を追いこむ姿勢がみえない。

かれらは、なにを恐れているのか？

それとなく観察をつづけるうち、愛親は膝を打って納得した。

じつは、中山愛親と正親町公明に、光格天皇サチノミヤの宸翰が渡されていた。ふたりとも宸翰を読むのは許されていないが、宸翰に封をし、「輝良封」と署名した責任者関白一条輝良から内容については知らされている。

宸翰には、なにが書いてあるか？

讓位である。

幕府が京都側を強圧するならば、天皇は讓位の意志を表明することと幕府を叱責する。

天皇退位の異常事態が起れば、真つ正面から責任を問われるのは筆頭老中の松平定信である。そうなるのを待ちこがれている定信反對の勢力が江戸城中には跋扈（ばっこ）している。尋問の席にみられる幕府側の弱気の原因がこれだ。

二月二十八日、松平定信をはじめとする重職一同が列座し、家斉の出御をおおいで中山と正親町の処分案を評議した。

松平定信がしめした処分案は尊号問題を提議したのを罪として問うのではなく、過誤として処理するのを前提にしていた。

- ① 中山と正親町が江戸へつたえた書簡に不行き届きがあった。
- ② 尋問の席における返答ぶりが不束（ふつつか）であった。
- ③ 宸翰を所持して江戸にきたのは軽薄な行為である。
- ④ 將軍家斉の御前における態度がよろしくなかった。

松平定信がしめした処分案は衆議で承認された。

三月七日、月番老中の戸田采女正の屋敷に中山と正親町が呼びだされ、罪状が申しわたされた。

中山愛親——議奏を罷免、閉門。

正親町公明——傳奏を罷免、逼塞。

愛親は権大納言を辞めたあと議奏役をつとめていた。天皇に近侍して政策を協議し、口勅を公卿以下につたえるのが議奏である。議

奏や武家傳奏は源頼朝によって創設された朝廷の官職で、天皇や關白が武家政権に背き、恣意による政策を決定、執行できないように抑止する職能を期待されている。

戸田采女正の屋敷で罪状がいわたされたとき、正親町公明が中山愛親に質問した。

「京都へ伺ったうえで、お請けするか、せぬかをきめるべきでしょうか？」

「江戸に参ってから仰出されたこと、すでに公武の間に同意があったとして、この場でお請けすればよろしいではありませんか」「ごもつとも」

その日のうちに愛宕下の青松寺に身柄を移され、閉門の暮らしにはいった。老中から渡された書付に、閉門暮らしの心得が書かれていた。

① 門を閉じ、外出は許さぬ。

② 門の外から板を打って閉じなくともよろしい。窓を釘閉（くぎじめ）するには及ばない。

③ 外出しなければならぬ緊急の用事があるなら、夜のうちに、こっそりと外出して済ませること。

④ 病気になったときに医師を招くのは夜間ならばよろしい。

⑤ 火災で危険になったときは支配方に届けたうえで避難すること。

自火はもちろん近所の火災でも、屋敷のうちで防火作業をするのは許す。

正親町公明がつけた遍塞処分は閉門よりは軽い。

① 門は閉じ、日中でも潜戸から目立たぬように外出するのは許す。

② 重病になったとき、医師・親類・縁者がひそかに参るのは許す。

③ 火災のときの心得は閉門と同様。

三月十日か十一日に帰京せよと指示があり、中山と正親町は十日に江戸を発った。御徒目付の荻原藤十郎と細見権十郎に監視されて

三月二十二日に京都へもどり、そのまま閉門の暮らしをつづける。自邸にはいるまえに猿ヶ辻にゆきたい、サルに帰京を報告したいと愛親はかんがえたが、不浄の身で御所の塀にちかづくのは不敬なりと糾弾されるおそれがある、唇を噛んで自邸にはいった。

出迎えのひとがちらほら、

「大納言さまはおもいのほか、元気だね、お母さん」

「天子さまの信頼の篤いひととわかっていいるから、江戸の役人さんもひどい扱いはできないでしょう」

ききおぼえがある——ような声でもあるし、ない——ような声でもある。おぼえがあるなら、声の主はだれなんだろう？

江山愛親と正親町公明のほか、尊号宣下を推進した公家にも処分がくだった。万里小路大納言と広橋大納言は差控、勸修寺大納言、甘露路大納言、千種大納言は急度心付と判定された。

関白の一条輝良を辞職させるべきだとの意見もあったが、これは沙汰止めとなった。

— 70 —

九月十三日、宮中で天皇出御の歌会があり、中山愛親も召された。「お召しいただいた光栄、身にあまるものですが、いまだ閉門処分の解けぬ身、もしやサチノミヤさまにとってのご迷惑になりはせぬかと……」

関白輝良も首をかしげて思案の様子であったが、「歌会には出る、しかし御前に出るのは遠慮、これでいいのではないか」

なるほど名案と愛親は納得し、つづけて、「わたくしの処分がここに至るまでのいきさつ、なんと表現すればよろしいのでしょうか？」

愛親は天皇の臣下であるから、愛親を罰するのは天皇であって徳川家育ではない。家育は内大臣、愛親は権大納言、官は家育が高い

が、だからといって愛親を処罰する権利が家畜にあるとはいえない、そこが愛親の納得のいかぬところだ。

「たとえば、子孫に、なんとつたえればよろしいのか」

あるべきはずのない処罰をうけた、そのような愚かなことのいきさつを、なんと行って子孫につたえればいいのか？

ふた息、いや、三息のあとが、輝良は強い声でいったのである。

「武命に依りて閉門、このようにすればよい」

武命に依りて閉門——これならば、江戸の將軍の命令で違法な処罰をうけた事実が正確に子孫に伝えられる。

歌会のかえり、江戸からもどって以来はじめて猿ヶ辻に脚を停めた。

金網の奥をみあげる。

チラッとサルが動いて、

「愛親さん、関白さまもなかなか名言をおっしゃるものですな。武命に依りて閉門、おみごとツの一語に尽きますよ」

(第4章・終)

上京区の大宮通今出川上ル、少年と母が、おぼつかない歩きの中年の男とすれちがった。

「お母さん、あのひと、中山大納言さんじゃないかな？」

「なにいつてるの、大納言さまはとつくのむかしにお亡くなりですよ。江戸時代のまんなかから、ちょっとだけこっちに近いころ」

「でも、中山さんはいくら代が変わっても大納言なんだから」

「そうか。そういえば、そうよね。いまの方、何代目の大納言さまなんだろう？」

「何代目って、どこから数えて何代目？」

「わたしたちが知っているのは江戸に呼ばれて、閉門の罰をうけてもどつてこられた……」

「愛親さま」

「いまの方は愛親さまによく似ているから、血つづきの子孫にちがいない。さーて、愛親さまから数えて何代目なんだろう？」

中山愛親に似ているといわれた男は、立ち止まり、ふりかえり、遠ざかる母と子の背をじーっと観ている。

あの母と子は、だれなんだろう？

いや、母と子の素性より先に、いま、おれが立っているこの場所は、どこなのか、おれはいつたい、だれなのか、そいつを突き止めなければならぬんだが、どうすれば――

意識がボンヤリしてきた。

意識がボンヤリするのは好ましい徴候だ。からだの感覚がシャープになり、それまできこえなかった音や声がかきこえ、みえないものがみえてきて――ほーら、きこえる！

テンメイハチ、ツチノエサル、ムツキ――

「おおっ、猿ヶ辻のサルさん！」

「やっと通じましたか、木ノ内民夫さん。よかった、よかった、安心しましたよ。今日のこの日、この時まで、なにをしていたんですか？ わたしはもう、心配で心配で……」

「なにをしていたか、といわれても、ねえ……ああ、そうだ、ボンヤリしていたんです」

「ボンヤリですか。それならいいんです、話は通じますから」

「そちらへゆくまえに、確かめたいことがある、いいですか？」

「なんでも、どうぞ」

「ぼくがいま居るのは、どこですか？」

「大宮通今出川上ルです、記憶はありませんか？ 大宮の今出川から猿ヶ辻までの道筋、まさか忘れたわけじゃないでしょうね」

「からかい半分の口調でサルがいい、木ノ内民夫は「忘れるはずがないじゃないか」と答えたものの、記憶に自信がもてない自分に気づき、困ったなアとおもったけれども、大宮通と今出川の交差点からながめる東の空の色に惹かれるものを感じたから、方角を東にさだめた。

まず堀川通、それから油小路と新町通、室町通を越えたところで、

「ふん……？」

前方の木立の感じに記憶がつながる気がして、

「あれだ、あれが御苑の森なんだ！」

「ここまでくれば、迷うおそれはない。乾御門から御苑にはいり、塀に沿って東に進んで、まず朔平門（さくへいもん）、そのむこうが――

「お待ちしました、木ノ内さん！」

金網の奥から、なつかしいサルの声が降ってきた。

「大宮通今出川ですれちがった母と子が、『あのひと、中山愛親というひとに似ている』、なんていったのですが」

「似ていなければおかしい、あなたはズーッと中山愛親をやっていたんだから」

「わたしが、中山愛親を……？」

「まあ、すこしずつ思い出すでしょう」

中山愛親は文化十一年に死んだ——サルが説明をはじめめる。

「ブンカジユウイチ……？」

「キノエイヌというほうが、木ノ内さんにはわかりやすいかな」

「西暦でいうと？」

「そうか、木ノ内さんは西暦親近感濃厚世代ですね。ええと……」

ぺらぺらと慣れた手つきで、サルが小版の歴史年表のページをめくる。

「わたしのあしもとで、観光客が、『この猿ヶ辻で起った姉小路公知暗殺事件は文久三年だそうだけど、文久三年は西暦なら何年？』

『わたしに歴史の知識がないのは、知ってるでしょ、もう何年つきあっているのよ！』なんていうんです。喧嘩になっちゃ困るから、

こうやって年表を繰って、文久三年は西暦一八六三年と確認し、あしもとの観光客に教えようとするんだが、そこではじめて、わたしはわたしの暗愚を知る、おそまきながら

「どこが、どういうふうな暗愚？」

「わたしが意志を通じられるのは、木ノ内さん、あなたひとりだけ。ほかのひとは、ぜんぜん話が通じない」

「ああ……」

「自分の暗愚を知ると感覚が麻痺する、それがサルの神経構造。ガツクリきて、文久三年は西暦一八六三年と確認した記憶が消える。

するとまた、つぎの観光客がきて、姉小路事件は文久三年、西暦なら何年？のくりかえし。もう、ウンザリなんだけど、それが通じる相手ではないから厄介だ」

年表の表紙をトントンと爪ではじいてサルはわが身を苦笑の対象とする。そこには苦笑を楽しむ余裕がある。

「あ、ごめん。文化十一年は西暦一八一四年、ナポレオンが退位し、ナポレオン以後のヨーロッパ統治をめぐってウィーン国際会議がひ

られる」

「ウィーン会議の滑稽、ドタバタをコミカルに描いたエリック・シヤレル監督の映画が『会議は踊る』、ヒロイン手袋屋の娘クリステルに扮したのがリリアン・ハーヴェイ、主題歌『ただ一度だけの恋』は大ヒット！」

「映画って、そういうことまでやるんですか、すごいものだなア。

わたしはね、映画、いちども観たことがないんです、くやしい！」

「ウィーン会議の実況を写したわけじゃない、つくりもの、やらせを写しただけなんですよ。がっかりするにはおよばない」

猿ヶ辻のサルは金網から出られない。金網から出なければ映画は観られない。それはサルにとって気の毒、いや、残酷なことだから映画なんか観られなくてもたいした損にはならないと、民夫はサルを慰めたつもりだったが、そのじつ、民夫は映画ほど素晴らしいものはないとおもっている。

そこにウソが出たのをサルに感づかれ、

「わたしを相手にウソはやめてください。簡単でいいから、話してくださいよ、ウィーン会議の結末はどうなったのか」

なぜ、この質問をするのかとサルに問いたい気がしたが、やめた。ウソをついた失態をとりかえそうとすればするほど深みに嵌まる。

ナポレオンがヨーロッパ全土の支配権をにぎるまえ、つまり一七九二年の政治状態にもどるのを前提とすることでは合意したが、議題が領土分割に移ると各国の利害が衝突、始末がつかない。仕方がないから、各国の代表者は踊って踊って時間をすごすだけ、だから映画のタイトルが『会議は踊る』になった——民夫が説明すると、サルは大きくうなずき、

「総論賛成、各論反対はむかしからあったのだ。まったく、仕方のないものだ、人間さまは！」

民夫は頭をさげ、うんうんと同感の意をしめす。

金網のなかでサツと音がした。短くて低い音だが、じつに鮮明な音である。サルが御幣をはげしく左右に振った、サルの決断の音

だ。

「おなじ、ですよ、木ノ内さん！」

「なにが、おなじ？」

「ブンキユウサン、ミズノトイ、サツキとそっくりだ！」

「政治の中心は江戸から京都に移っていた。その京都の政界を牛耳（ぎゆうじ）っていたのは長州藩です。尊皇攘夷派勢力が長州藩の政権をにぎり、威勢のいい尊攘の志士が京都に出てきて孝明天皇の信頼を笠に、政界を牛耳っていた。長州藩主の息子の毛利定弘は尊攘派の藩士にかつがれて京都に出て、尊攘派の先頭で旗を振っていた。長州尊攘派をナポレオンとみれば、この時期の政界の様子がよくわかる」

「ナポレオンが長州藩……ですか。なにを狙っていたんですか、長州は？」

「徳川に代わって天下を取る」

「なるほど、ナポレオンだ」

「長州藩と提携する公家もあらわれた」

「長州が天下を取るとみて、先物買い……？」

「そうかんがえてまちがいない、三条実美（さねとみ）とか姉小路公知とか」

「おお、そこへ出てきますか、姉小路公知！」

「出てくる。四月（うづき）には上下（かみしも）の賀茂神社と石清水八幡宮への天皇行幸を実現、もう天下を取ったつもり」

「四月のつき、五月二十日に姉小路さんが殺されても尊攘派の勢いは衰えなかった？」

「衰えない、むしろ尊攘派は狂奔する」

「ますますナポレオンだな」

「松平姓の諸家や、島津なんかは長州の独断専行を許すものかと互いに提携して長州を叩こうとこころみるのだが……」

「総論賛成、各論反対？」

「ばらばら」

「ウィーン会議そっくり！」

木ノ内民夫が「ウィーン会議そっくり」といったのが鉄の蓋を閉めたのか、双方、突然の沈黙。

大宮通今出川上ルでゆきちがった母と子の会話を耳にした途端、民夫は、あの母と子がだれなのか、知らねばならぬ宿命を背負った自分に気づいた。もちろん、宿命を背負う自分自身がだれなのか、これまたわからない自分なのだ。

猿ヶ辻のサルからの救援信号が通じて猿ヶ辻に走ってきたのは、あのふたりはだれか、自分はだれか、サルに教えてもらうためだった。

だから、あの母と子はだれなのか、自分はだれなのかと率直に問えばいいものを、なにかひつかかるものがあって、問えない。問えないから、文化十一年の西暦がどうの、こうのと、わざと回り道をした。これが木ノ内民夫の沈黙の理由。

サルは、ずっと前から民夫に連絡がとれないので、ひよつとしたらと案じていた。それがようやく通じて猿ヶ辻へ誘導したのだから、いいたいことをそのままいいのに、いえない。いいたいことの中身があまりにも重いを知っているから、いえず、ウィーン会議に回り道をした。

「サルさん……」

沈黙に耐えかねて民夫が口をあけたのと、

「木ノ内さん……」

サルがだまりあぐねて口をひらいたのと、ほとんど同時。

こういうのは、おたがい、バツが悪いが、長く重い沈黙に耐えられなくなっていたのが、むしろ救いである。ただし、ふたりが同時にしゃべるのを、そのとおり文字に書くのは不可能だから、やむをえない、別々に書く。

「あの母と子、そして、ぼくは、だれ？」

「こんどは中山忠能（ただやす）の追体験を……」
強烈な衝撃を受けたのは木ノ内民夫である。民夫の問いがサルに
衝撃をあたえたのはまちがないが、民夫のつけた衝撃よりは軽度
であった。

「追体験……ああ、そうだ、ぼくはあんたに頼まれて中山愛親の追
体験をやった、たしか、そうだったねッ？」

「木ノ内さんの記憶力の強さには敬服いたしますよ」

「あなたに頼まれ、ぼくは中山愛親の生涯を追体験し、愛親が文化
十一年に死んだから、ぼくはあなたと交わした誓約から解放された」

「そのとおり」

「こんどは愛親の子孫の忠能の追体験をやってくれと、こういうん
でしょ」

「そのとおり」

「ぼくは、愛親の生涯を追体験にすると約束し、約束どおりに追体
験したが、忠能について約束したおぼえはないんだ！」

「木ノ内さんとわたしの約束の発端を思い出してください。姉小路
公知は、ほかのだれかにまちがえられて暗殺された疑いが濃厚であ
る……ここから約束がはじまったのです」

「ええと、それはまア、そんなふうだったかな」

「だった、のですよ」

「ですか」

「ひとつの推論として、姉小路は中山忠能とまちがえられたのでは
ないかとわたしはかんがえ、まちがいの原因は忠能の先祖の愛親の
思想と行動に発しているはずだ、それを知るには木ノ内さんが愛親
の生涯を追体験するのがいちばいい、こういう結論になって……」
「ぼくとあなたの約束は半分しか果たされていない、こういうこと
になる？」

「なるのです」

自信ありげのサルの顔には、

——こういうこと、木ノ内さんは嫌いじゃないんでしょう？

好みをくすぐる色がある。

「家族が、なんていうかなア。なにしろ二度目だから」

「そりゃもちろん、ご家族の賛同が不可欠です」

「家族……ああ、そうかつ、大宮通今出川ですれちがった母と子は
ぼくの妻の愛子と息子の忠光なんだ！」

「中山愛親から木ノ内民夫にもどる途中だから、愛親の雰囲気は濃
厚、だから奥さんと息子さんにはわからなかった」

「奇妙すぎて、この世のこととはおもわれない」

「木ノ内さんはこういうことが好きなんですよ。奥さんも息子さん
も、かならず賛成してくれるでしょう」

サルにいわれるまでもない、民夫はもう、やる気になっている。

「先斗町（ポントちょう）の……」

「竹澤でいっしょに酒を呑んだ太田黒さん、でしょう」

「じつは、太田黒さんの知り合いというひとに、お公家さんのナカ
ヤマタダヤスになつてくれないかと頼まれた。拒否する理由もない
から、家族が同意してくれるならひきうけましょうと……」

「ナカヤマナルチカさんとナカヤマタダヤスさんは親戚なのかな。

忠光、どうおもう？」

「親戚じゃなくて、先祖と子孫の関係じゃないのかな。ナカヤマさ
んのお屋敷は猿ヶ辻の東北にある、あれでしょう？」

「あたしは賛成」

「ぼくも賛成。お父さん、がんばってね！」

「賛成なんだけど、ちょっとおかしいところがある」

「どこが、おかしい？」

「あのお屋敷に住むナカヤマタダヤスさんが自分でナカヤマタダヤ
スさんの役をやればいいんじゃないかしら」

「これは芝居の役とはちがうんだ。ほんもののタダヤスさんは人生
のやり直しができない。おれが頼まれてニセのタダヤスさんになっ
て、もういちど、やり直すのさ」

「人生をやり直すと、どうなる？」

「姉小路公知殺害事件の真相がわかる、かも、しれないんだそうだ」

「殺害事件、すごい！」

「こんどの合言葉はブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキです」

「西暦なら千八百二十三年、フランスがスペインの革命に干渉し、

アメリカがモンロー主義を宣言した年です」

「文政六、癸未、睦月の五日に中山忠能が孝明天皇の近臣となりました。父の忠親がいるから、忠能は部屋住の身です。官職とは関係なく、天皇の手となり足となって仕えるのが近臣です。忠能はすでに左近衛権少将で伊予権介ですが、これは名目だけのこと、席次はありますが、これときまつた業務はない」

「近臣は正式な官職でないとすると……？」

「天皇の私的な臣下という矛盾した言い方になりますが、近臣を説明するには最適の表現かな」

「近臣を束縛する掟はない、だから自由に動ける、それが近臣ですね」

「近臣が相手ならば、天皇はいいたいことがいえる。まあ、限界はありますが」

「忠能は、何歳？」

「十五歳」

「近臣になったことで、出世が早くなるのですか？」

「木ノ内さん、それこそ、あなたの奮闘によります」

「ああ、そうだ。ぼくが中山忠能になるんだ」

「だいじょうぶですか、心配になってきたなア。合言葉を確認しておきましょうか、ハイッ」

「ブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキ！」

「よろしい。さあ、スタート！」

文政八年五月二十一日に父の忠頼が亡くなり、十七歳の中山忠能

は解任された。服喪の身として一時的に解任されるのが服解（ふくげ）、かたちばかりのものだ。

七月十二日に服喪を解かれ、忠能は復任し、中山家の主となった。家祖の忠親からかぞえて二十三代目が忠能だ。

ささやかな祝賀の宴の席上、ひとりの女から肌が痛いほど熱い視線がそそがれるのを、忠能は感じる。

熱い視線の主は曾祖父愛親の十四女、忠能には大叔母にあたる中山續子（いさこ）である。

續子は寛政七年に生まれた。幼名は宗姫。尊号問題は光格天皇サチノミヤの譲歩によってかたづいたが、まだ余燼はくすぶっていた時期だ。文化四年、光格天皇皇太子の恵仁（あやひと）親王（のちの仁孝天皇）に仕えて上臈となり、高松局と称し、名を愛子（なりこ）とあらためた。

仁孝天皇の践祚によって典侍となり、宰相典侍と称した。忠能が中山家の主となった文政八年に續子は宰相典侍、三十歳だ。愛子から續子とあらためたのは文政十一年。

宰相典侍の大叔母から忠能にそそがれる、熱い視線――

――大叔母さまは、わたくしに、なにかおっしゃりたいのだが、じつと堪えていらっしやる。緊張した顔つきからして、なみの祝辞でないのはわかる。

天子に仕える身の目と耳と口は、すべてが天子ひとりだけのもの、たとえ身内のためでも、めったに使ってはならぬものだ。

なんだろう、なんだろう――祝いの酒でその夜の眠りは深かったが、目覚めのころ、頭をチカチカと刺激され、

「サチノミヤ、サチノミヤ」

低い声だが、いや、低いからこそかえって鮮明にきこえるのか、忠能を刺激する。

「サチノミヤ、サチノミヤ」

サチノミヤ――それは如何なるモノ、またはコトであるのか、じ

っさいのところを説明してくれなければ、応対しようがない。

もっと詳しく説明してほしいと忠能は願うが、「サチノミヤ」と呼ぶ声は消えない。

われはサチノミヤではない。だから、われを呼ぶ声でないのはわかっているから、「サチノミヤ」の声に悩まされることはない。気味はわるいが、苦しくはない。苦しくないから眠りが妨げられないのはありがたい。

——ありがたい？

どうして、なぜ、われが「ありがたい」などと感謝しなければならぬのだ？

はつきりと目が醒め、「サチノミヤ」は鮮明な声となって忠能の頭脳に沁みだ。耳の病に耳鳴りというのがあるのは知っているが、

「サチノミヤ」は耳鳴りではない。あえていえば快感だ。

からだのうしろで「サチノミヤ」がきこえ、からだを前に押される感じがすることもある。からだの前からきこえて、からだを後ろへ押される感じのときもある。

——「サチノミヤ」の声は消えないのだな。われの生涯に付きまとして、離れることはないのだ。われの宿命から発する音響だ。われの宿命が、中山忠能よ、「サチノミヤ」を忘れてはならんぞとわれに命じている。

祝いの宴から数日、大叔母續子がまた中山家にやってきて、「権亮（ごんのすけ）さまに……。」という。

父が亡くなるまえ、忠能はすでに右近衛権中将、伊予権介、皇太后宮権亮の三職を兼ねていた。皇太后宮権亮がいちばん新しく、典侍の續子と縁の深い職でもあることから續子は忠能を権亮と呼んで親近感をしめしている。

権亮の忠能に会うだけが目的で續子が朔平門の横の穴門を抜けて中山家に来てきたのは、思い詰めた顔つきからあきらかだ。

対面、挨拶がおわると息もつかず、續子は忠能の目を見すえて、

「サチノミヤさま……」

「サチノミヤ…… ああつ、大叔母さまも、その……」

「気づきましたね、サチノミヤさまのこと」

「夢のなかでお告げをいただきました。若いくせに迷信ぶかいとおっしゃられるかもしれませぬが、いま、ここは、迷信に従うのがよろしいかと存じます。いきさつの詳細は知りませぬが、わたくしにとってこれ以上はない重大事」

「それでよろしい。サチノミヤさまの御身にかかわることでああなたの曾祖父、わたくしの父の愛親が江戸に召喚され、なんとおぞましいことには、武士（もののふ）の指図で閉門の罰をうけました」

續子が もののふ に籠める苦衷と軽侮の気持ちは忠能の胸に快感を起した。苦衷と軽侮の気持ちを後宮の実力者と共有する快感は、若い忠能にとつては誇りだ。

誇りに胸を張った忠能を續子は頼もしくおもったにちがいなく、言葉が続く。

「もののふ の大将から罰をうけたのです、天子の重臣中山愛親が！」

「ゆるませませぬ！」

「ゆるせぬ。さあ、そこで、権亮さま、あなたはなんとなされますか」

續子大叔母に挑発され、宿命の渦にひきこまれてゆく自分の姿が見える。不安ではなく、快感の姿。

「ひいじいさまが もののふ の大将に罰せられた事実は消えない、さようですな、典侍さま」

「事実は消えませんが、消えないのが事実。だが……」

権亮よ、あなたがいいなさい、なんといいばいいか、わかっていないはずだと續子の顔が告げる。

「事実は消えないが、第一の事実を超える第二の事実をつくるのは可能、そういうことはありませんか。第二の事実に超えられる第一の事実はみえなくなる、まるで、第一の事実そのものがなかった

かのように」

じゅうぶんですと續子はいい、中山邸を辞して穴門をくぐり、宮中にもどった。

十九歳の年に、忠能は石清水臨時祭の使をつとめ、二十二歳の年には葵祭の近衛使（このえづかい）をつとめた。近衛使は武官の勅使役、晴れがましい役だ。

近衛使の大役を無事につとめたあと、續子が「権亮さまは夫人をむかえねばなりません」といい、「わたくしに心当たりがありません、お任せを」と強圧した。

忠能の結婚によって同格の公家とのあいだに強い姻戚関係が生じることを目標とすべきであり、そのためには、どこから夫人をむかえるのがいいか、すでに考慮している、だから自分に任せなさいということ、それが續子の「心当たり」だ。

「平戸の隠居、松浦静山の娘の愛子（あいこ）をむかえます」

「平戸……」

九州の名門大名の松浦家、もちろんものふの家だが、徳川に対するような敵愾心は續子にはない。

権亮の忠能が少年のころから續子は松浦家に目をつけていたにちががなく、青年に達した忠能の夫人に「静山の娘を」ときめた理由の第一は松浦家の富裕のはずだ。自分の幼名とおなじ愛子に関心が向いたこともあるだろう。

後宮は世間の風が吹かぬ聖域とみられているが、じつをいえばそうでもなく、「あの大名の娘は」とか、「あの家のカネのやりくりは」なんていうなまぐさい観測が飛びかっている。うわさの渦の後宮を取り仕切るひとりが宰相内侍の中山續子なのだ。

膨大な随筆『甲子夜話』（かつしやわ）の著者として有名な松浦静山のつぎが熙（ひろむ）、熙の妹の節子が姉小路公遂に嫁いで公前を産んだ。公前の子が問題の公知（きんとも）である。

「きんとも……そうかア」

猿ヶ辻の東向かいに野々宮家、その南に飛鳥井家、そのまた南に姉小路家の屋敷がならんでいる。

中山家からは野々宮や飛鳥井の屋敷が邪魔になって姉小路の屋敷はみえないが、歩いて三分ほどのご近所。忠能が石清水臨時祭の使をつとめた文政十年に生まれた少年が公知と名づけられたのは知っている。

松浦家は名門だ。系譜によれば松浦家の祖は嵯峨天皇の第八皇子、嵯峨源氏初代の源融（とおる）である。

京都の鴨川の西岸に宏壮な別荘をたてて「河原左大臣」と称せられた融にもっともふさわしい形容は 豪勢 と 風流 だ。嵯峨の山荘樓霞館（せいかかん）の跡はいま清涼寺になっている。

源融は陽成天皇が退位したあとで即位しようと計画したが、摂政の藤原基経に妨害され、断念した。

静山は公家の世界との接触到に誇りをもっていた。四女の季子を園基茂の夫人とし、七女の節子を姉小路公遂の夫人とし、そしていまは十一女の愛子を園基茂の養女として中山忠能の夫人の椅子にすわらせようとしている。

續子が「園家とも姉小路家とも親戚としてつながります」と強調して、忠能を承知させようとする。忠能が承知するも、しないも、コトはすでに續子によって決定されている。

續子はさらに、「この件は当今さまもご存じ」と付け足し、自分が仁孝天皇の信任をつけ、勅意を代弁できる権威者であることを強調した。

愛子は天保二年の十二月に中山忠能に嫁ぎ、忠愛（ただなる）・慶子（よしこ）・公董（きんただ）・公憲・忠光（ただみつ）を産む。

長男の忠愛には性格、言動に問題があった。成長するにつれて粗放がひどくなり、忠能の悩みの種になっていた。

——どうしたものか！

忠能が迷っていると、

——ブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキ！

「ああつ、猿ヶ辻のサルさん！」

「迷ったら合言葉、これ、忘れちゃだめですよ」

「わたくし、中山忠能のからだのなかで木ノ内民夫がむずむずと動きはじめました。そこへゆくまでには全身が木ノ内民夫にもどります」

「油断は禁物、猿ヶ辻で脚を停めてはなりません。だれが監視の目を光らせているか、わからない。警戒しなければ。一条家に伺候の途中、といったふうに通り返してください」

猿ヶ辻の前でスピードをゆるめ、金網のなかのサルとひさしぶりの打ち合わせ。

「忠愛は見放す。気の毒だが、ほかに手はない」

「見放す覚悟はできているのです。だが、となると、わたしのあとの中山の当主をどうするのか」

「忠光を忠愛の子とすればいいのです。養子縁組ではなく、実子縁組」

「忠光がわたしの孫になる……こりや名案ですな」

他人の子を養子とする養子縁組には幕府の了承が必要だが、実子縁組に幕府の了承は不要だ。官職につけば給料も出る。

「忠光、威勢がいい、期待できますね。不吉の間を寝室として変えないところなど、見上げた肝っ玉です」

「そんなことまで、ご存じ？」

中山家の屋敷には「不吉の間」があり、この部屋で寝起きする者にはかならず異変がおけるといわれていた。そうと知った忠光、まわりのものが止めるのもきかずに寝室として、毎夜々々、寝苦しくて目が醒めるのも構わない。母の愛子が「加持祈祷してもらっては」と勧めてもきかず、不吉の間に寝ている。

「ああ、民夫さん、停まってはだめ。歩いて、下を向いて、歩いて」

——いずれ、また。

背中では別れの挨拶をして、木ノ内民夫から中山忠能にもどりながら一条家へゆく。

次男の公董は正親町家の実徳の養子になった。

実徳の姉の雅子は仁孝天皇の後宮にはいり、天保二年に熙宮統仁親王を産み、やがて親王が即位、孝明天皇となるのにもなつて新待賢門院と尊称される。

統仁親王が即位して孝明天皇になるのは弘化三年、忠能が松浦愛子を夫人にむかえた天保二年の十二年後だが、そのときに中山忠能は孝明天皇の叔父の養子の父となることが確定した。血縁と姻戚が混合してわかりにくい構図だが、ともかくも、そういうことなのである。

公卿のつぎのランクの公家には官人が付属し、諸大夫と呼ばれる。天皇によつて配属させられる立場だから、主家との関係は私的な雇用関係ではなくて公的な立場、なかなか権威のある官人であつた。

87

諸大夫の役割はなにか、御用人または顧問というのがわかりやういだろう。公家の子弟の教育や健康、財政など庶政全般を担当する。中山家の諸大夫は田中近江介綏長（やすなが）であつた。この男について詳細はわからないが、天保十四年に娘の増栄が婿をむかえたのがわかつているから、文政三丁四年の生まれ、忠能より十三歳ほどの年少であつたらうか。

増栄の婿になつたのが小森賢次郎といい、但馬の出石の医師の家に生まれた。医業は継がずに京都に出て、はじめは摩島松南に儒学を、それから本草学者の山本亡羊にまなんだ。

塾をひらいて数年、旧師の忘羊に「中山家の諸大夫、田中近江介の婿にならぬか」と打診された。賢次郎が承知したのは近江介より中山家の名に魅力を感じたのだらう。

賢次郎は近江介の娘の増栄の夫となり、やがて独立して田中河内介綏猷（やすみち）とあらため、中山家の諸大夫となつたのが天保

十四年だ。主人の忠能は三十五歳で正三位、新清和門院の別当である。

中山家の長男の忠愛は父の忠能さえ匙を投げている凡庸で粗放な男、次男の公董は正親町家の養子になったから、河内介が教育するのは娘の慶子と、三男ではあるが兄の忠愛の子、父の忠能の孫という奇妙な身分になっている忠光だ。

慶子と忠光の教育について河内介に指示するのは忠能の役目だが、忠能よりも續子のほうが熱心だった。

河内介がはじめて續子に挨拶したとき、

「わたくしの父の愛親のこと、知っておりますよな」

「伺ってはおりますが、くわしいことまでは……」

「くわしいことは、どうでもよろしい。典仁親王さまへ尊号をさしあげる件をめぐって愛親は江戸に召喚され、なんとおぞましいことには武命によって閉門の罰をうけられた、それさえ知っておれば」

「はい」

「中山家の当代の忠能と孫の忠光には、愛親がつけた恥辱を拭いはらう義務があります。そうしなければ中山家の武命閉門の家の汚名は消えませぬ。河内介よ、そこをしっかりとわかりわきまえて忠光を教え、そだててもらいたい」

「慶子さまについては、どのように……」

「慶子はいずれ後宮にはいり……」

續子は、そこで口をつぐみ、河内介の顔を凝視した。

言葉にしていわずとも、わかっているはず——續子の表情はそういつている。

「忠光さまが愛親さまの恥辱の詳細をご存じか、どうかはともかく、心に決するものがあるのは、もうしあげてよろしいかと」

「それを、はやく」

「楠木正行の決死の起請文を、ご主人さまが忠光さまのお部屋にお掛けになりました。そして忠光さまは、朝に晩に読誦なさっております」

れます」

「よい兆しです。曲げず、真っ直ぐに育ててゆくのが肝腎」

弘化二年（1845）、河内介と増栄の息子が生まれ、河内介は磋磨介（さまのすけ）と名づけた。磋磨介は忠光の学問と遊びの相手役をつとめる。

仁孝天皇は弘化三年正月に亡くなり、皇太子統仁（おさひと）親王が践祚、即位した、孝明天皇である。中山續子は大典侍に昇進した。

嘉永四年（1851）、中山忠能の娘、十七歳の慶子が孝明天皇の後宮に召され、まずは典侍雇として安栄の名を与えられ、まもなく典侍に昇進した。孝明天皇は二十一歳だ。

はじめて宮中に仕える官人は古参の縁故ある者の局の部屋子になって保護をつけ、勤務の作法をならうのがしきたりだ。慶子の部屋親の役は大典侍の續子がつとめる。

- 89 -

中山家の門を出て猿ヶ辻から西に向かい、朔平門にちかづく慶子の姿を、猿ヶ辻のサルは見送った。内裏の塀は猿ヶ辻で内側に切りこんであるから、金網のなかのサルは門をくぐる慶子の姿はみられない。

——木ノ内民夫というのがいいか、中山忠能というのがいいか、注目される度合いがこれまでは格段に違ってくるから、連絡をつけるのがむずかしい、困ったものだ。木ノ内さんに本格的に活躍してもらうのは、むしろこれから、なんだがなア！

嘉永五年（1852）三月、典侍の中山慶子に妊娠の兆候がみられた。女医博士の賀川満崇が診断し、妊娠四ヶ月と判定した。

慶子は内裏ではなく、実家の中山家にもどって出産にそなえることになった。

慶子が実家にもどるのは四月二十三日ときまり、民間では岩田帯

という着帯の儀式の日にちと帯親の決定などが複雑な手続によってきめられてゆく。慶子の帯親には忠能の妹で勘解由小路光宙の妻の順がきまった。

慶子が実家にもどって出産するときまったとき、女御の九条夙子は「それがよろしい」と賛成したはずである。夙子は孝明天皇第一子の順子内親王を産んだが、病弱、慶子の妊娠が確定されたときにはもう明日をも知れぬほどに悪化、死が近いのはあきらまかった。

夙子にとって慶子はライバル、そのうえに妊娠したとあつては自分の地位をおびやかす脅威として遠ざけたい気ではあつたはずだが、それよりも健康な皇子皇女の出現への期待が優先した。慶子の子が即位すれば女御は天皇の母、つまり女院（によいん）として処遇される。

じつのところ、女御の心境は「典侍の子など流産すればよろしい」「といったものであつたかもしれず、断言はできないが、たとえそうであっても、

「女御さまは、中山家での出産が望ましいとおおせられました」

大典侍續子のひとことでもかたはつく。慶子のお産は中山家の総力をあげての大事業である。

さて、それから忠能は産屋の建築にとりかかるが、これはまさに苦心惨憺の事業となった。

自宅の敷地は狭いから皇子皇女の産屋を建てるには適しないとかんがえ、屋敷の北の八条殿町の民家のあいだに敷地を得ようとしたが、関白の鷹司政通が承諾しない。屋敷の西隣の鷲尾隆純の屋敷のなかの空地を借りようとして交渉したが、鷲尾は応じない。嫉妬の壁につきあたったのはたしかだ。

ほかに手がなから、狭いとわかっている自宅の母屋の西に産屋を建てるときめたが、そのつぎには新築資金の調達という、最大の難関がひかえている。

天皇から百兩を借りられるときまっているが、いくら簡素な設計にしても倍の二百兩は必要とわかったので二百兩の拝借計画をたて、まずは議奏の東坊城聡長に相談、聡長から武家傳奏の三条実万、実万から鷹司政通につたえられたが、政通は旧例遵守、百兩までは可能、以上はだめと行って動かない。

「だめですな。こうなったら大典侍さまに動いていただかねば」

「百兩は通例にしたがい、不足の百兩は典侍さまにおすがりする、そういうことですな」

来年から十五年の年賦返済を条件として産屋造営資金百兩を借りる書類を実万に提出し、銀六貫が貸与された。銀六貫は金百兩に相当する。

不足の百兩は續子からの内奏のかたちで拝借願いが出され、半金の五十兩が十年の年賦返済を条件として貸与された。

四月二十三日、慶子は中山邸にもどり、内々の着帯の儀をおこなった。

八月二十四日に慶子は内裏にもどり、二十七日に着帯の儀をおこなった。天皇みずから慶子の帯をむすんだ。船鉾町と船鉾町の年寄りから神功皇后の神面がとどけられ、二面とも唐櫃におさめて産屋正室の床の間に祀られた。

夏の祇園祭で鉾町を巡行する鉾のひとつの船鉾ふねぼこは神功皇后を主神として祭る。新羅を攻略して凱旋し、筑紫で応神天皇を出産した。戦勝と皇子出産の吉事にちなんで皇后は武略と安産の神として崇められ、皇后の神面は安産に効験があるとされてきた。

神功皇后の神面が皇子皇女の安産を祈って届けられるのは古来からのしきたりで、唐櫃におさめられたまま、蓋をあけることはない。櫃のなかの皇后の神面を毎日拝しながら、慶子は出産の日をむかえる。

中山忠能の委嘱をうけて、陰陽頭の土御門晴雄が皇子皇女の産湯

を汲む場の方位を勘案した。九月一日から二十五日のあいだの出産ならばこちら、二十六日から十月二十五日のあいだならばあちらで産湯を汲むべしと忠能に答申した。

九月四日、中山忠能は賀茂川の出町橋の北で産湯を汲ませた。出産の日がちかづいたからである。賀茂川の水をそっくり産湯に使うわけではない。屋敷の井戸水を汲んで、そのなかにちよっぴり、賀茂川の水を混ぜて産湯とする。

九月二十二日、中山忠能邸の産屋で皇子が誕生した。船鉾町と船鉾町の年寄りが召され、神功皇后の神面が返還され、初穂料が納められた。

九月二十八日がお七夜だが、この日、皇子の姉にあたる順子内親王が三歳で亡くなったので一日延期され、二十九日にお七夜の礼がおこなわれた。

お七夜には皇子の幼名が決定される。

天皇が参議の五条為定に「七字を選んで勸進せよ」と命じ、為定から「豊・美・建・義・敦・祐・重」の七字が勸進された。天皇は七字のうちから「祐」の字をえらんだので、皇子の幼名は「祐宮サチノミヤ」ときまった。

天皇みずから「祐宮」と書いた備中檀紙三折に、「祐は佐知（サチ）とよむべし」と、これまた小字で書いた宸筆の奉書紙四折の訓書が添えられ、二枚ともども守刀を入れた箱におさめられた。

年があけ、嘉永六年正月二十日、九州の平戸城の松浦熙に祐宮の誕生をつたえる中山忠能の書簡がとどいた。熙は松浦静山の子、熙の妹の愛子は中山忠能の妻として慶子を産み、慶子がサチノミヤを産んだから皇子の外祖母になった。愛子の姉の季子は権中納言園基茂の妻、もうひとりの姉の節子は中納言姉小路公遂の妻である。

熙あて忠能の書簡は皇子誕生の喜びをうたいあげ、なぜ悦ばしいのか、なまぐさい理由をあげた。

「これまで、皇室には宮さまがひとりもおられませんでした。ただひとり、女一宮さまがおいでであったのですが、去る六月十九日、まことに畏れ入ることながら、お亡くなりになったのです」

松浦熙よ、あなたの妹の孫、わたくしの孫でもあるサチノミヤさまはただいまのところ、ただひとりの皇子なのですぞ！

祐宮さまがただひとりの皇子の状態のまま主上が——畏れ多いことながら——お亡くなりになれば、あなたの妹の孫、わたくしの孫はかならず即位いたされます。おわかりでしょうか？

念をおす気持ちを強調する理由がある。

「主上は若宮さまの幼名をさだめられ、宸筆で『祐宮』とお書きなされ、『祐』の訓みは『佐知』なりとお書きになりました」

そのあとに忠能は細字で注釈した。

「サチノミヤとは光格天皇さまのご幼名であります。この事実を以てすれば、主上は深い配慮を籠められて『祐宮』と命名なされたと信じてよろしいわけです！」

——はじめて得た男子、ことによると生涯ただひとりの男子になるかもしれないぬ子の名を「祐宮」とした主上の心境を最初に知ったのが皇子の外祖父のわたくし、中山忠能、二番目があなた、皇子の外祖母の兄の松浦熙なのですよ！

文章だけでは刺激が弱いと案じたのか、忠能は一重の衣を添え、衣の由来を説明した。七夜に天皇から祐宮に祝いとして贈られ、皇子が袖を通したあと、忠能にお下げ渡しになった衣だ。沓の形の餅も添えた、天皇から忠能がいただいた餅である。

熙は忠能の書簡を平戸城本丸の神聖宮と安国祠の側におさめ、「永宝として仰奉すべし」と遺訓した。

松浦熙の興奮は中山忠能に優るとも劣らない。はやいうちに引退して藩主の地位を息子の曜（てらす）にゆずり、京都に關係することだけを基点としてかんがえ、行動するぞと決意した。

熙はまず最初に京都の詳細な地図をつくり、居室に掲げて朝に夕に祈った。

宮廷人の官服をつくって平戸城に常備し、天皇からお召しがあれば官服を着用して京都に駆けつける態勢をととのえた。京都の詳細な地図をつくって掲げたのは、その晴れの日に道に迷わないための準備だ。

茶室の露地に笹竹を植え、一首、詠んだ。

うちなびく時なわすれそ

ささたけの大内山の紫の雲

猿ヶ辻のサルは満面の笑顔、

—— 木ノ内民夫さん、ご心配なさるなよ、予想以上にうまくいっているんですから。中山忠能の時間が長すぎましたかな。長すぎると木ノ内民夫にもどるのが困難になるから、ちかいうちに、いちど、こちらにもどっていただきましょう。

(第5章・終)

第6章 「サチノミヤは幕に隠れて参内する」

一条家へ伺候の途中、猿ヶ辻の下で、なにか思案にあぐねた、といった様子でたちどまってもらいたい——猿ヶ辻のサルから木ノ内民夫に通告があった。サルは、民夫が停まる瞬時の間に新しい策を提案するつもりのようにだ。

民夫は中山家諸大夫の田中河内介に「一条家へうかがう」と告げ、小者をつれて屋敷を出て、猿ヶ辻の下で停まり、履物の具合をなおすふりをした。

金網の奥からサルの声が降る。

「ちかごろの中山忠能の心境、どんなふうになっていると推測しますか？」

——忠能の心境がどんなふうになって、われにきくのはおかしいじゃないか。われが忠能なんだから。

「もどるのに時間がかかりますね」

「もどる……？ ああ、そうか。おれはいま、中山忠能から木ノ内民夫にもどる過程の中途に存在しているんだった」

「いまはもうすつきりした、でしょ、頭が」

サルが確認してくれて、木ノ内民夫はひさしぶりに木ノ内民夫にもどった。

「観光客、とくに修学旅行の生徒さんの人気者になりましたね、サルさん」

「嬉しいんだが、それがまた困ったもの」

「なぜ？」

「木ノ内さんとの意志疎通の秘密が守りにくくなった」

「ああ、そうか、なるほど」

「思ってもみなかった、でしょ？」

いわれてみれば、そのとおり。サルは木ノ内民夫の姿がみえる、民夫もサルの姿がみえる。だが、猿ヶ辻の観光客には金網の奥のサルの姿がみえるだけで、サルの相手の民夫の姿はみえない。この時

刻——いや、時の次元とか時の軸——というのが正しいか——
この場では木ノ内民夫の存在は無だ。

存在が無である民夫と対話するサルの姿に観光客が気づくと、ただではすまない。宮内庁の京都事務所が黙ってはいない、そうときいて新聞社やテレビ、ラジオがさわぎ、「騒動にならぬまえに猿ヶ辻を閉鎖!」と息巻く連中があらわれないとはいえない。京都地方限定の話題のうちはいいが、東京の宮内庁に知られると厄介だ。

「そうになったら……」

「木ノ内民夫さんが中山忠能の生涯を追体験するなんていう呑気なところみは……」

「呑気というか、切羽詰まらぬというか」

「スニーカーに踏みつぶされ、こっばみじん」

「姉小路公知殺害の犯人を目撃できなかったサルさんの恥辱雪冤のための奮闘も雲散霧消……」

「それじゃ、わたしの生甲斐はゼロ!」

この「!」記号は元氣ハツラツとは反対のサルの絶望予感、溜息の「!」記号だ。

— 96 —

元氣を出してくださいよ——いおうとしたとき、

「もう、だめッ。時間です、歩いてください、歩いて。歩かないと気づかれてしまう、危険!」

忠能は「危険で、なんですか?」の質問の最初の「き」だけを言葉に出して、つづきは口をふさいだ。「気づかれるって、だれに?」「とサルに問うつもりだったが、それがつまりサルのいう「危険」だと気づいた。手遅れかもしれないが、気づかないよりはましのはず。

一条家にむかって二歩、三歩と歩いて、

「あっ、この子っば!」

背筋が寒くなった。

小者として供をさせたのが四回か五回ほど、はじめてではないが、名に素性にも記憶がない。「どこの、だれだれの子でございます」

と知らされたはずだが、記憶はない。

つまらぬそうな顔つき、主人に従って歩くだけの、罪も替れもない小者としかみえないが、サルに「危険」と警告されたばかり、その気でみると、「大納言さまは猿ヶ辻の下で履物の具合をお直しになれられましたが、具合がよくなつてからもしばらくはお歩きになられず、ぶつぶつと独り言をいつておられました」などと、闇のなかの人物に告げない保証はない。

中山愛親のあとが中山忠能、二度目の追体験だから慣れてきた。しかし、その慣れがよくない、慣れが油断の基となつて恐ろしい事態を招く。

一条家がかたちばかりの挨拶をし、決意を肚におさめて帰宅、田中河内介を呼んで、

「さきほどわれの供をした、あの小者、名はなんといつたかな、どこの、だれの子であつたかな？」

「はあ？」

「今日の、供の、小者……」

「嵯摩介……でございますが……」

「サマノスケ……？」

「わたくし、河内守の息子でございます。お忘れございましたか」
思い出した。

忠能は諸大夫の田中河内介を信頼している。口をひらけば 皇室の繁栄 しかいわぬから堅苦しいが、実務一点張りを自任して世のうごきに無関心の諸大夫では話相手にできない。あえていえば河内介はおしゃべりである、それがいい。

忠能が嵯摩介を忘れていたについては河内介もいささか不安を感じたにちがいないが、河内介が「息子の嵯摩介」といつたらすぐに思い出してくれて、安心した。

「サチノミヤさまのお世話は大たくしの職掌の外でございますが、すこやかにお育ちの日々を拝察、存外の悦びでございます」

安心ついでに河内介がいつたのに無意識に反応し、「サチノミヤ

……？」と不審の言葉が出かかったのを、忠能は後悔した。サチノミヤは皇子にちがいないが、わが孫でもあるのを忘れるなんて、じいさまとしては失格ではないか！

サチノミヤは嘉永五年九月二十二日に誕生した。

誕生三十日にあたる十月二十二日、はじめて宮中に参った。参内始めである。

生母の慶子に抱かれて板輿に乗る。

祖父忠能などの歓送をうけて中山家の門を出た板輿は東にすすみ、中筋街を南にとり、飛鳥井家の門前で西にむかい、有栖川宮邸から北にむかい、朔平門の前街を西に進んで清所門をくぐってようやく奏者所に到着、昇殿した。中山家からまっすぐ清所門にゆかないのは、陰陽助があらかじめ吉凶を勘案したルートにしたがわねばならないからである。

生母の慶子が典侍として給されている局が、数日のあいだのサチノミヤの御在所となる。母が勤務する部屋でしばらく暮らすわけだ。

二十九日、宮中では新嘗祭（にいなめさい）の神事がはじまった。月障（つきのさわり）の乳母があるかもしれぬことを避けて、祐宮は中山邸にもどった。一年のうちにはかぞえきれないほど多くの神事があるが、もっとも神聖な神事が新嘗祭だ。

祖父の忠能は宮中の勤番は解除され、サチノミヤの養育に専念せよと命じられた。祖母の愛子、そして忠能の母の綱子が昼も夜もサチノミヤの養育にあたる。

綱子と上臈代勘解由小路継など、皇子に配属される男女の飯米、薪炭や灯油は宮中から現物が支給され、食料費は銀で支払われるが潤沢ではないから、乳母や奴婢など、じっさいは六人のところを十人と申請し、過剰申請の五人分を中山家の収入とした。

このような会計措置を融通（ゆうづう）と呼んでいた。厳密に言えば掟に背くことだが、これでさえも忠能の大叔母で大典侍の山續子の存在がものをいった結果だ。

年があけて嘉永六年の三月二十四日、典侍の勸修寺徳子、大乳人の押小路甫子などから、中山家の皇子養育の費用が膨大な額にのぼると推測されるのを理由に、皇子を宮中にむかえて傳育すべだとの意見が出た。

皇子世話上卿の東坊城聡長から忠能に実状が問われ、忠能は「少額とはもうせませぬ」と、控えめな表現でこたえた。

聡長はさらに実状を調査し、結果を関白の鷹司政通に呈して祐宮養育の場を移すべきか否かが朝議にかかることになったが、そうと知った中山續子から忠能に通知があり、忠能は聡長に言明した。

「賀茂祭がちがついております。皇子を宮中に帰還させよとの命令がくだっても、祭が終わるまでは、なおしばらく中山家におられるべしと存じます！」

忠能が「養育費用は少額とはもうせませぬ」と控えめにこたえたから、強硬姿勢が可能になった。

天皇が「サチノミヤに逢いたい」とのぞみ、医師が「誕生一年の九月が最適ですが、速やかに対面なさりたいとの勅意なれば昨今の対面は可、六月七月の炎暑は避けるべき」と答申したのをうけて、五月二十七日にサチノミヤが参内して拝謁、その日のうちに中山邸にもどった。

サチノミヤの二度目の参内から六日すぎた六月三日、アメリカの東洋艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻をひきいて浦賀湾に投錨した。

医師が案じたとおり、酷暑到来、中山邸の井戸も枯れた。忠能は皇子を健やかに養育するためにも新しい井戸を掘ると決意、陰陽助に諮ったところ、「旧井には手を触れてはならない、新井の開鑿は可」との勘案であった。

邸内、玄関前北寄りに新しい井戸ができた。深さ三丈あまり、湧泉八尺、すこぶる清冽な水が出る。八月二十五日に清拭の式をおこ

なつてサチノミヤ御用水とし、近隣のひとにも汲ませた。

中山家の新井開鑿を知つた天皇は、「井戸の名は祐井（サチのい）とせよ」と命じた。

十月二十三日、天皇は徳川家定を第13代征夷大將軍とし、内大臣に任じた。武家傳奏の三条実万と坊城俊明を江戸に派遣し、將軍に諭示させた。

「異国船の処置は神州の一大事である、衆心を堅固にし、国辱後患をのこさぬように致せ」

実方は老中の阿部正弘に對面し、関白鷹司政通の内意をつたえた。政通の内意とはアメリカ合衆国の処置の如何、宸襟を安んじるために幕府が取るべき策の如何、この二点である。正弘は「その件について未だ義は決していないが、かならずや聖旨に添うべく処置を講ずる」と誓約した。

だが、阿部老中の誓約は天皇を安心させられなかつた。年の瀬も迫つた十二月二十八日、天皇は外患を憂い、関白に勅して、「明年の月次（つきなみ）歌会は停止する」と諸臣諸司に告げさせた。

年が改まつて安政元年（1854）四月六日、後院北殿から出火して内裏にひろがり、内侍所（ないしどころ）をおびやかし、建春門や紫宸殿、清涼殿を焼いた。

天皇と祐宮はとりあえず下鴨神社へ避難し、それから聖護院に遷御した。内侍所は聖護院の護摩堂に安置し、天皇は北殿、准后（九条夙子）は小書院、皇子は書院にはいつた。淑子内親王、和宮（かずのみや）、新待賢門院（孝明天皇の生母）は青蓮院に移つた。

十五日に桂宮邸が仮御所とさだめられ、天皇は仮御所へ遷御した。内侍所も聖護院から仮御所に遷された。准后は生家の九条家へしりぞき、サチノミヤ皇子は中山邸にもどつた。

六月十五日、地震があつた。

余震のおそれがあり、狭い自邸では皇子が危険と案じた中山忠能

はサチノミヤを奉じて西隣の鷲尾邸の庭に避難した。両邸のあいだの築地の一部を壊して雨戸を敷き、雨戸のうえに畳をのせてサチノミヤの座とした。鷲尾邸の北が仮御所の桂宮邸である。サチノミヤは地震が気にならないらしく、安らかに乳を飲んだ。

二十一日に強い余震があり、サチノミヤの侍臣に天皇から指示があった。

一、強震のときには皇子殿と侍臣詰所のあいだの往来が困難になるから、勤務の者は庭を通って御殿の南庭にゆくべし。

夜間はもっぱら庭を通行すべし。

一、お輿などは表門から鷲尾家の玄関に回すべし。

一、事態の軽重に応じて臨機の処置をとるべきであるが、しばらくのあいだは鷲尾邸とのあいだの築地を通ってはならない。ただし、皇子が庭伝いに仮御所に参内するときには侍臣は表から直接に仮御所へ参るべし。

地震のまえ、皇子御世話上卿の坊城聡長は非常にそなえて一策を講じていた。非常のときの仮御所になる桂宮邸の東南隅と鷲尾邸の北の築地と、鷲尾邸の東、中山邸の西の築地に非常口をつくり、仮御所と皇子殿のあいだに小道をつくろうというものだ。こうしておけば、万一のときにも皇子は安全に参内できる。

計画ができてすぐに地震が起つたので、工事を急ぎ、まもなく竣工した。

二十三日、新待賢門院が仮御所に参内した。天皇と門院の希望によってサチノミヤは新しくできた非常時通路を通って仮御所に参内した。

十一月四日に強震があり、八日におさまった。坊城聡長は中山忠能と協議して皇子のための地震殿を建築することにした。鷲尾邸の庭に敷地を借り、四畳半、板を敷いて寝台として板で覆い、周囲に幕をめぐらせた粗末なものだが、重い建材が落ちないように配慮されている。

安政二年、皇子サチノミヤは四歳になった。

新しい内裏の竣工がちかい。

仮御所から新内裏に遷御する天皇を奉送するとき、祐宮は板輿に乗らねばならない。青蓮院の新待賢門院を訪問する予定もあり、これもまた板輿に乗る。板輿に慣れておく意味もあって、祐宮は十月二日、板輿で参内した。陪乗は中山綱子。

二十二日に新待賢門院を訪問した。こんども板輿に中山綱子を陪乗させての訪問である。使番の八人が先導し、御世話上卿の坊城聡長と中山忠能が扈從する。

鷲尾邸の地震殿と仮御所は隣りあっている。板輿に乗る正式な行啓ではあるが、あつというまに着く。だが、こんどの青蓮院行啓となると事情が違う。サチノミヤにとって、はじめての遠出だ。

鴨川を渡るのはおなじとしても、聖護院と青蓮院では訳が違います。

青蓮院は山を登ります、円山を。

円山は山というほどのものではない、いつならば丘ですよ。

しかし、マルオカとはもうしませぬ。マルヤマといいますがらな、山なのです。

さわぎを耳にして、サチノミヤは青蓮院行啓に格別の期待をかけたらしい。なにか、こう、気分がわくわくするもの、それが青蓮院行啓なのだ、そうでなければ、みなものがこれほどさわくはずはない。

さて、二十三日の午刻は二十一世紀なら午前十一時から午後一時まで、真昼、サチノミヤは板輿に乗って青蓮院に行啓した。

輿が公家町を出ると、ききなれぬざわめきが皇子の耳を刺激する。

——これだ！

サチノミヤは知った、先日来の地震のさわぎがおなじだ。

ざわめきは板輿の左右にきこえる。ざわめきの詳細はわからないが、サチノミヤには、自分をめぐってざわめきがおきているのがわかる。

——ざわめく人間の姿をみたいものだ！

だが、板輿の左右は白木板が張ってあり、前には簾が垂れている。サチノミヤには外の様子がみられない。

サチノミヤは、身をのりだして簾をおしあげ、外をみようとした。中山綱子はサチノミヤをおしとどめなければならぬ。皇子にそのようなことをさせないために綱子は陪乗している。

「ミコさま、なりませぬ」

声が外に漏れないように、小声でいう。小声だから威圧感がない、サチノミヤは綱子の手をふりはらって簾をあげようとする。

「なりませぬ。そのまま、しずかになされて……」

「外をみたい！」

「み輿のなかから外をご覧になるものではありません。ミコさまがそのようななされば、父上であらせられる主上のお恥となります」

「ハジ……？」

「このうえもない、恥」

綱子のいう「恥」の意味はわからないが、綱子の声と姿から、自分はいま、してはならぬことをしようとしているのに気づき、不満の表情ながら簾から身を引いた。

サチノミヤは綱子の曾孫だが、サチノミヤに陪乗しているいま現在では、綱子はサチノミヤの守り役にすぎない。守り役にすぎないのに皇子を諫めねばならなかった苦境を、のちになって綱子は歌に託す。

日の御子の御蔭をおおひ出る身は

立ち添う雲の心地こそすれ

青蓮院には天皇から大御乳人の押小路甫子が派遣されて、皇子祐宮の待遇をとりしきった。新待賢門院はもちろん、門院の世話上卿の広橋光成、門院の兄の正親町実徳、実徳の養子で中山忠能の子、つまり祐宮の伯父の正親町公董がそろって奉迎し、懇篤な応接がおこなわれた。

サチノミヤは始終上機嫌、青蓮院を出たのは日の暮れにちかかった。

サチノミヤは帰途の板腰のなかでは「外をみたい！」とはいわなかった。青蓮院で遊びまわった疲れで、眠かったのだらう。もはや日暮れ、皇子の板輿を拝見につめかける群衆もすくなかった。

その日はそれで済んだが、十一月六日、サチノミヤはにわか「参内したい！」と言い出した。

いかに皇子であるからといって、皇子の望みのままに参内できるものではない。皇子は参内の主人公ではない、参内拝謁をうける天皇が主人公なのだ。

とはいっても、四歳の皇子を相手にそんなむずかしい理屈は通らない。にわか参内は主上がお許しになりませぬと説明したが、サチノミヤは承知せず、ますます機嫌を悪くする。

おもいあまり、中山忠能が先に参内して天皇の許可をいただき、ようやくサチノミヤが望んだ参内が実現した。にわか参内、中山邸から至近の仮御所とあつて、皇子祐宮は歩いて参内した。

サチノミヤの叔父の忠光が顔を出し、祖母の綱子に、「ミコさまは板輿にお乗りになるのも、板輿に乗られての遠出もお嫌い。だから、板輿に乗らずにすむ仮御所へ参内したいとおっしゃった、さようではありませんかな？」

十一歳にしてはおとなびた様子で忠光がいったから、不審な表情たつぷりに綱子が言葉を返す。

「それほどまでに、お父上、いや、主上にお会いになりたいお気持ちはあるがたいことですが、板輿がどうの、ここのといったわけでは……」

「まさか……」

「まさか……？」

「われはいずれは鳳輦（ほうれん）に乗る身である、鳳輦に乗る身が板輿などに乗せられるのは……ミコさまはそんなお気持ちでは……」

網子の顔が凍結した。

母の表情の変化が伝染し、息子の忠能はあごを突き出した。凍結の段階をすぎて、もはや狼狽のレベルだ。とんでもないことになった、これはもう取り返しはつかんぞと呆然となった。

忠能の妻の愛子は声も出ない、顔色も変わらない。忠光の発言が中山家をどん底に突き落とした——かもしれない状況を最初に理解したのは愛子のようだ。

「忠光さま……」

母は子を「忠光さま」と「さま」づきで呼び、

「そのようなおそろしいことを、なんと、まア！」
なんと、まア、のあとが続かない。

当惑と恐怖の原因をつくった当の忠光はどうかというと、当惑している。自分の発言で一同が当惑、恐怖しているのは事実の経過としてはわかるが、ミコの立場に成り代わって「いずれは鳳輦に乗る身」といったのが一同の当惑と恐怖の原因となったのは、なぜか、わからないから当惑している。

事情が理解できない自分の立場をわかってもらおうとして、忠光は、

「ミコさまがいずれ鳳輦にお乗りになるのは……」

愛子がすっ飛んできて、忠光の口にてのひらで蓋をしたから、忠光がいうつもり「あたりまえではありませんか」はなんと無惨にも、意味と感情をつたえられない「ムグムグ」に変形させられた。

息子は抵抗しないと愛子が判断し、てのひらを離したが、母の頑強におそれた忠光、口をつぐんで沈黙の姿勢にはいった。

愛子は夫の顔に、「この子に教え諭してください」と視線で要求した。

「忠光よ。ミコさまの将来をおきめになるのは主上だけである。主上のほか、摂関といえども口に出してはならぬこと。口に出せば、こと次第によっては、われら一同の身が危うくなる」

そこで忠光が膝をなおし、なにかいおうと姿勢をあらためると、「口でもうさずとも、胸でわかつておる。それでよろしい、そうでなければならぬのじゃ、われらは」

綱子が快活に断をくだした。忠能も愛子も無言でウンウンとうなずき、綱子に同意を表明する。

「口でいわぬ、胸でわかる。口に出せば一同の身にかかわる」

忠光が復唱して、その場がおさまるかとおもったのは早計であった。

「われは、明日も参内する！」

ほがらかな声とともにサチノミヤ皇子が諸大夫の田中河内介に手をひかれて姿をあらわしたから、一同、啞然として顔を見あわす。

十一月の二十三日、天皇は仮御所から新造の内裏に遷幸した。内侍所はすでに建春門から渡御が済んでいる。

サチノミヤは中山忠能、忠愛、綱子、愛子をひきいて仮御所へゆき、鹵簿（ろぼ）の行列を奉送した。

天皇の鳳輦は内侍所よりすこし遅れて建春門をくぐり、准后は朔平門から内裏にむかった。

十二月十一日には年末恒例のススはきがおこなわれる。サチノミヤは皇子殿から中山邸に移ってススを避けた。

安政三年、皇子サチノミヤは三歳、中山邸での暮らしがつづく。

新造御所への遷幸行事の疲れが出たのか、正月のなかばに発熱、眠りが浅く、食事もすすまない。乳母の木村らいに背負われて、夜明けにすこしだけ眠る日がつづいたが、二十五日に回復のきざしが見え、医師は二十八日に宿直をやめた。

二月十六日、淑子（すみこ）内親王が参内することになった。内裏から中山家に、「内親王とともにサチノミヤに逢いたい」との勅意がたえられた。淑子内親王は孝明天皇の姉、生母は典侍の甘露

寺妍子。

サチノミヤの侍臣は協議し、平復までもないこととて外気に触れるのは避けるべきだと見解がまとまったが、医師に相談した結果、参内ときまった。だが、参内したあと、天皇の都合がわるくなって拝謁はできない。毛植の馬のおもちゃをいただいで皇子殿にもどるところになったが、

「板輿に乗るのはイヤだ！」

サチノミヤが宣言した。

去年の十月二十三日、板輿で新待賢門院をたずねた帰途、皇子は扉をあけて外をみようとし、そのたびに陪乗の綱子にたしなめられた。陪乗が綱子でなく、もうすこし穏やかにたしなめていれば、イヤな体験としては記憶されず、今日の板輿も拒否はしなかったかもしれないが、もはや手遅れ。

「らい、われを背負ってくれ！」

祐宮は乳母の名を知っていた。はっきりと指名して「背負ってくれ」というからには、皇子はらいをお好みである。すくなくとも、らいの背中が嫌いではない。

皇子の板輿拒否のいきさつを忠能からきいた忠光、反抗的な言い方で、

「狭くて堅苦しい輿の中よりは、らいの暖かい背中、ゆらゆらとゆくのが嬉しい、これは当然」

「ミコさまのと気持ちはそれとして、いずれは……ああっ……！」

忠能は自分がいかけた言葉に狼狽し、てのひらで口に蓋をした。ちかごろ、中山邸ではてのひらで口に蓋をするのがはやっていて。その忠能に息子の忠光は「大納言さま」と呼びかけた。かしこまった「大納言さま」には父に甘える嘲笑の気分がこめられている。

「大納言さまは、いま、『いずれは鳳輦に乗る身』とおっしゃるとなさった」

——先日、わたくし忠光もそういいかけて綱子さまと愛子さま、大納言さまに厳しく叱責されました、お忘れのはずはない。

「ミコさまの立場になったつもりで、はっきり口に出すほうがいいのですよ、ミコさまはいずれ、かならず鳳輦にお乗りになるお方である」と

「すると、どうなるのかな。口に出しているのと、口をつぐんでいないのと、どこが、どのように違ってくるのか？」

わが息子の忠光は父と意見を闘わずまで成長した、それが嬉しい大納言忠能だ。

「われらが、ことあるたびに『ミコさまは鳳輦にお乗りになるお方』と口にすれば、ミコさまはその気になられよう」

「その気になるも、ならぬも、ミコ祐宮さまがいずれ鳳輦にお乗りになるのは、きまったこと」

「さようではありますが、それゆえにこそ、ミコさまの心は揺れておられます」

「揺れている、ミコさまのお心が？」

「ミコさまは先日、主上が鳳輦に乗られて新造御所へ還御なされるのをご覧になりました。鳳輦にお乗りの主上のお姿をご覧になるのはじめてのこと、のはず。わたくし忠光も、はじめて拝見いたしました」

忠能は「あなたのことは」といつてから「おまえのことはどうでもかまわぬが」と言い替え、「ミコさまがはじめて鳳輦をご覧なされて、それがどうなる？」

「唯我独尊の誇りと、市の民の目にさらされる気恥ずかしさと、両方に揺れておいでです」

ミコの心が揺れている理由を忠光に説明され、忠能はじゅうぶんに納得した。

「気持ちが揺れる、さぞかし不安であられよう。われらには縁のない、ミコさまただひとりのこと」

「われらは、口に出す、出さぬの相違を問わず、ミコさまのお気持ちに添ってお仕えする。それこそがミコさまの唯我独尊のお気持ちを強くそだてる道なのです」

三月二十五日、サチノミヤは参内した。十六日に淑子内親王が参内、弟のサチノミヤにも逢いたいとの勅意が伝えられたので乳母に背負われて参内したが、天皇の気が変わって拜謁はできなかった。そこであらためて、というわけで二十五日の参内になったようだ。

皇子参内の噂はすぐにひろまる。公家の家族はともかく、町人には楽しい見物だ。

ところが、サチノミヤは参内の行列を群衆にみられるのが大嫌い、いや、恐ろしい。「ヒトが寄ってくる、ヒトにみられる、イヤじゃ、イヤじゃ」を連発して抵抗する。

御世話上卿の東坊城聡長、議奏で権中納言の万里小路正房と祖父の中山忠能が額を寄せて協議し、大典侍の續子とも連絡をとりながら協議した結果は、

「参内路の両側に幕を張りましょう」

「さようです。目立たない色の幕で……何色がよろしいか」

「こういう場合は何色がいい、悪いではなく、その色を選んだ姿勢、気持ちというものが大切です」

「色そのものよりも気持ち、姿勢が大切というなら、やはり浅葱(あさぎ)さぎ)でしょうな。ありふれている、控えめだから目立たない」

「木綿の浅葱なら、値は安い」

「値は問うものではない。われらはただ、皇子と民のあいだを遮断する幕の色として何色がふさわしいのかと」

中山續子を通じて、皇子参内路の両側に浅葱色の幕を立てる件が検討された。「前例がない、承認すべきではない」とする意見がないでもなかったが、「よろしい」となったのは父である天皇と、大典侍の中山續子の同意が強かったからだろう。

二十五日の午の刻(正午の前後)、中山家の皇子殿から朔平門の穴門まで、百三十歩の直線ルート(の両側に五尺ほどあいだを隔てて浅葱色の幕が立てられ、板輿ではなく、乳母に抱かれて祐宮は参内した。御所を辞去したのは夕方ちかいかい刻限だった。

「ミコさまのご機嫌は如何であつたか？」

問われた乳母は、

「このうえなくご機嫌よろしゅうございました」

自分の手柄のように、胸をはってこたえたが、そのあと、いかにも苦しい表情で付け足したのである。

「ミコさまがもつされますには……」

「なんと？」

「このつぎの参内でも、このように幕を張るべしと、なんじから、じじさまにいつてくれ、と」

乳母は祐宮から直接に「なんじから」と指名された、そこが苦しい。

そもそも乳母は、皇子から中身のある言葉をかけられるはずのない身分である。「もっと乳を呑みたい、呑ませろ」ぐらいはかまわないが、参内の路の両側に幕を立ててくれなど重大な案件は皇子から乳母にいうべきではない。

いうべきではない、という掟はかぞえて五歳のサチノミヤにはわかりにくいから、責任は乳母に転嫁される、「さようなことを承つてはならない」あるいは「わたくしになにを申されても無駄でございますよ」という顔つきをせよ、というように。

参内通路の両側に幕を張る——破天荒なことである。いかに皇子おんみずからのお望みといえども、無条件に承諾するわけにはいかぬと中山忠能はかんがえた。

皇子参内は皇子の側が主体となる行事のようにおもわれがちだが、これは考え違い、じつをいえば天皇の行事である。なぜなら、いくら皇子が参内を望んでも、天皇が許可しなければ参内は実現しないのだら。

——ともかく、大典侍さまに内々でお伺いを立ててからでなければ。

大典侍の中山續子のちからを借りようと忠能がかんがえたのは賢

明だ。

忠能の曾祖父は寛政の尊号問題で奮闘した愛親、その愛親の娘で大典侍の官にある續子が動いてくれれば皇子参内路の幕張りの件についての天皇の見解が内々でつたえられ、うまく解決されるはずだ。ところで、参内路の両側に幕を張る、なんていう前代未聞のプランについて忠能の意見はどうかというと、実現せずに済むなら、それに越したことはない である。

忠能はおそれている。

いつか、かならず、孫のサチノミヤは即位する。

晴れの姿を観たいのは祖父として当然だが、望みをあからさまにしすぎると公家の総体の反感を買うおそれがある。皇子（男子）はいまのところサチノミヤひとりだが、天皇はただいま二十六歳、サチノミヤの弟宮が生まれる可能性は高い。それもひとりではなく、ふたり、三人の弟宮が。

長男相続が原則ではないから、サチノミヤが外されるおそれがないとはいえない。慎重のうえにも慎重にして鳳輦に乗る立場がサチノミヤのほかの皇子のものにならぬよう、手を尽くさねばならない。中山邸から穴門まで祐宮参内のための特別な幕を張りたいと願えば、庶民に観られるのをおそれる、気の弱い皇子に天子の位はふさわしくない と噂を立てられ、噂を打ち消さぬうちに意外な展開になるかもしれない。だから、幕の件はあくまで慎重に、できることなら幕を張らずにすむようにもっていきたい。

中山邸がゴダゴタとしてきた。

ゴダゴタは良くない、整理すべきだ。

いちばんいいのはサチノミヤが「幕の参内」を撤回してくれることだ。サチノミヤが自分で撤回すれば満点だが、これはまずありえないとして、誰かがサチノミヤに入れ知恵する。

——市の民がおしかけるのは、ミコさまを拝見した聖なる恵みを家族や親戚にわけてやりたいからです。貧しい家には稼ぎが、病人

には健康が恵まれます。

五歳という年齢は、これくらいのごことは理解できるはずだ。

「忠光よ。まずはおまえが……」

忠光は父に指図されるのを予想していた。

「ハハツ」のひとつ返辞で皇子殿にかけつけ、すぐにもどってきた。

これはきつとうまくいったのだと一同は緊張を解いたが、真相は逆であった。

「『イヤである、民にみられるのはイヤじゃ』と三回、くりかえしてのお言葉でございます」

忠能は天ををあおいで嘆息した。

忠光がサチノミヤを説得する案は失敗した。

皇子がだめなら、つぎは天皇だ。中山家が天皇に提案し、天皇から皇子に「幕に隠れての参内は止めよ」と説得していただく——これはもう無礼失礼の典型、わるくすると中山家に厳罰がくだるおそれもあるが、いまはもう おそれがある なんて悠長に構えているときではない。

「主上へもうしあげるとなると、こんどもやはり大典侍さまに」

「お願いしなければ」

忠能から大典侍中山續子への提案、というよりは中山一門の命運を懸けた悲願表明にちかい提案、それ自体はむずかしいことではない。

「ミコさまが幕に隠れてご参内、それはなりません！」

事態の深刻を察した續子は唇を噛んで覚悟をしめたから、使者の忠光は安心して帰宅、「大典侍さまは『任せなさい』といった様子でした」と報告した。

これはうまくいくなとおもったのも束の間、天皇は「幕の参内、それもよろしかろう」とおっしゃり、中山家の苦悩をご存じなされぬと續子からつたえてきた。

——われは苦悩に追いまわされる宿命にある。

中山忠能は自分の存在をこのように規定した。突き詰めて整理したわけじゃないが、とりあえずの自己規定としては上出来であるのみずからを慰め、現在只今直面している苦悩に対処するにはどうすればいいのか、策を講じる構えをとった。

わが孫であり、主上のミコでもあるサチノミヤが、あるうことが、参内路の左右に幕を張りめぐらせ、幕のあいだに隠れてでなければ参内しないといって抵抗する。そのような仕掛けに隠れての参内は参内とはいえない、といって幕なし参内を強制すれば、ミコは暴れ、手がつけれぬ事態になる、まちがいない。

父であらせられる主上に相談したが、案に相違して、「幕の参内、かまわぬではないか」と、ミコ祐宮さまの無茶をお許しなさるご意向がしめされた。

幕に挟まれ、幕に隠れてスゴスゴと参内するのが正しいとは、いかに主上とて、おかんがえなさるはずはない。つまるところはミコさまに頻繁にお違いになりたい、だから参内の仕方など、どうであつても構わないわけなのだ。

ならば、と我を詰問なさるひともあるう、「なりませぬ！」と主上をお諫めいたすのが臣下の務めである、なぜお諫めいたさぬかとできるものなら、とつくに諫めておる。できぬから、こうして悩んでいる！

「ブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキ」

ええと、これは、なんだったかな？

「ブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキ」

「ああつ、猿ヶ辻のサルさん！」

「悩みを率直に表明してくれないから、わたしの出番が来ない。焦りましたよ、木ノ内民夫さん」

「あーあ、助かった。そうなんです、わたしは中山忠能の生涯を

追体験をしているのであって、ほんものの中山忠能ではない、それを忘れていた」

「われらはいよいよ難所にさしかかります。とつくりと打ち合わせをしなければなりません」

「いつものように、わたしがそちらへゆけばいいんですね」

「それが、ね、この猿ヶ辻は危険なので、大宮通今出川上ルへお出でください」

「大宮通今出川……それ、わたしの自宅のこと？」

「奥さまの愛子さん、ひとり息子の忠光さんがお待ちの木ノ内邸」

「わたしの家に、サルさんがくる？」

「お邪魔します。それがいちばん安全」

「じゃ、猿ヶ辻は？」

御幣をかつぐ木像のサルが猿ヶ辻の金網の奥にみえないと、それはそれで騒ぎになるんじゃないか？

「幸神社（さいのかみやしろ）から交代のサルがまいります。幸神社には修学院の赤山（せきざん）禅院から、赤山には比叡山から、比叡山にはサルの予備群がわんさといまいますから、バレル心配はない」

「心配はない……ははあ」

バレル心配はないとサルはいうが、われらの、なにが、だれにバレル恐れがあるというのか、そのあたりがボンヤリとしている。

忠能の先祖の中山愛親の追体験をしていたときの警戒の対象は徳川幕府、はつきりしていたが、こんどの忠能の追体験では敵の姿がボンヤリしていて、居心地が良くない。

大宮通今出川上ルの自宅で愛子と忠光にむかえられ、猿ヶ辻のサルはどんなふうに変装してやってくるのか、首をのばす気分で待っていたが、いつになってもサルの来訪の気配がない。

ソワソワする民夫に気がついたのか、忠光が、

「お父さん、まだ、わからないの？」

「なにが、わからない？」

「そろそろ気がついててもよさそうな時刻だけどねー」

愛子と忠光が民夫をからかっているのは、もう、まちがいない。

忠光の言葉の調子がつぜん変って、

「そろそろはじめましょうか、木ノ内さん」

「その声は……ああっ、そうか！」

目の前にいる忠光がじつは猿ヶ辻のサルである——とつくに気がついて当然のことに気がつかずにいた迂闊（うかつ）を民夫は恥じた。

「そうすると、わたしの息子の忠光は？」

「あなたが察しているとおりです」

木ノ内忠光は中山忠能の子の中山忠光になって忠光の生涯を追体験している。妻の愛子はどうなったのか、ちょっと気になったが、愛子はいかかわらずの笑顔で「わたしは木ノ内民夫の妻のままですよ」といい、「でも、中山忠能さんの奥さまの愛子さんになる日が絶対はないとはいえないんです」と付け足した。

皇子サチノミヤは、通路の両側に幕を張ってくれなければ参内せぬといっている、これをどうするか？

忠能はサチノミヤのいうとおりになって両側に幕を張った。それからしばらく、サチノミヤは幕に挟まれ、身を隠しての参内がつづいた——これが経過した事実である。

われらは、どうするか？

しずかだが、中身の濃い討議がつづいて、やがて沈黙に変わり、沈黙をやぶって忠光が口をひらいた。強い、宣言の口調である。

「幕は張りましょう！」

民夫も愛子もやわらかい笑顔になり、同意した。

つい先刻までは中山忠能の生涯の追体験者であった木ノ内民夫は、忠能の消極、逡巡が事態を混乱させたのだと鮮明に認識した。天皇の意向を気につけすぎ、孫のサチノミヤが可愛いあまりに却ってサチノミヤにふりまわされる愚を犯した。

サチノミヤの幕の参内が祐宮自身と中山家にたいする公家総体の

評価を高めるのか、どうか、判断の基準をこの一点においてかんがえれば、幕の参内を積極的にこなうのがただひとつ有効で強力な策であったのだ。

「自画自賛ですが、わたしは中山忠能の生涯を追体験す役目は果たしましたよと自分で自分に報告して、褒めてやりたい気分です！」

「そのとおり。木ノ内さんは成功されました。だが、わたしのほうはどうかというところ……」

「サルさんの役目……？」

「木ノ内さん、いちばん大切なことを忘れちゃ、イヤですよ！」

民夫は思い出した。

文久三年五月二十日、猿ヶ辻の下で姉小路公知が殺害された。

猿ヶ辻の金網のなかにいるサルは犯人をみたはずなのに、じつは、なにもみなかった。犯人確認はサルの任務ではないが、みえて当然のものがみえなかったのはおのれの恥だとかんがえたサルが事件を再現し、それによって犯人を確定して恥をそそぐ、これがこの物語の発端である。サルはそれを「いちばん大切なこと」といった。

「ごめんなさい。忘れていたが、もう二度と忘れない、誓います！」

「誓うなんて、そんな、おおげさな。木ノ内さんの協力がなければ、ここまでこられなかったのですよ。感謝しています、そうして、あと一步の協力をお願いします。ポンヤリですが、すこしずつ、みえてくるもののあるのが感じられるんです」

「よかったわねえ！」

しみみりと、妻の愛子。

猿ヶ辻のサルは猿ヶ辻に、木ノ内民夫は中山邸に、木ノ内忠光は大宮通今出川の木ノ内邸にもどった。後半戦のはじまりだ。

祐宮は頻繁に参内する。

明日は参内したいと希望を出すと、田中河内介が音頭をとって穴門と中山邸の門とのあいだに浅葱色の二枚の幕が張られ、

「おお、明日はミコさまのご参内だ」

「おまぢかねの天子さまはお悦び」

夜があけると、市の民が幕の左右に群れる。サチノミヤは乳母に背負われて幕のあいだを進むから姿は拝めないが、幕のあいだを皇子が参内する雰囲気は察せられ、群れた民は満足する。

日帰りの参内ときまっている場合、幕は張られたままだ。サチノミヤが中山邸にもどるのを合図に幕は撤収される。

宮中滞在が長期にわたるときまっているときには、サチノミヤが穴門をくぐったのを合図に幕は撤収され、帰宅の日の朝にあらためて幕が張られる。

幕が張られたあいだは公家や市民の通行に支障があるけれども、邪魔だから取り外せと不平の声が出ることはない。幕が張られているのは、もともと宮中にお住みになるべき皇子が宮中に滞在している聖なる時間のしるし、ありがたいしるしとしてうけとめる。

安政三年九月二十九日、皇子サチノミヤは正式に宮中に遷御することになった。これまでは中山邸に住み、ときどき参内して皇族の義務を果たしていたが、これからは宮中に住む。

遷御の日に幕は張られなかった。

中山邸での遷御の儀式が終わると、サチノミヤは東坊城聡長や中山忠能、綱子をしたがえて中山邸の門を出、徒歩で穴門から宮中にはいった。本来なら板輿に乗るべきだが、サチノミヤ本人が「板輿はイヤ」と強く抵抗するので、仕方なく略儀の徒歩遷御となった。

すでに、正式の皇子遷御であるのは知らされている。このさき、二度とふたたび、参内なさるミコさまのお姿は拝見できない。ミコさま自身がずーっと宮中にお住まいになられるのだから。

いつもより多くの群衆があつまった。多くの群衆の視線をあげ、サチノミヤは徒歩で中山邸から穴門にむかった。民の視線にさらされる恐怖よりも、板腰に閉じ込められて参内する恐怖がいちばん恐ろしかったようだ。

だが、サチノミヤが宮中にはいったただけでは遷御の儀式は終了し

ない。略儀はあくまで略儀である、皇子は乗っていないなくても、乗っているかのように板輿をしつらえて正式の還御を擬したあと、サチノミヤははじめて正式に宮中に還御したことになる。

御世話卿の聡長が中山邸におもむき、皇子を宮中にむかえる奉迎の意をつたえ、板輿を中山邸の皇子殿のきざはしの前に置き、守刀と護符のたぐいを輿におさめ、いかにも皇子が乗っているかのように装い、典侍の中山慶子が陪乗として輿に坐った。

皇子を乗せた——ことになっている——板輿は穴門をくぐらない。穴門は通用門なのである。中山邸の門から出た輿はまず西に、それから南にむかって清所門から内裏にはいり、奏者所に到着した。これで皇子が正式に還御したことになる。

中山綱子の皇子養育の責任はこの時点で果たされたわけだが、四年にわたって養育したミコを取り上げられる寂寥には耐えられない。たぶん、忠能から典侍の慶子に、慶子から大典侍の續子へ、綱子の心情を汲みとってもらえないかと陳情があり、天皇の承認が得られたようだ。綱子は孫娘の典侍慶子の局に同居してよろしいと許可が出た。

皇子サチノミヤが宮廷に還御して、中山忠能の日常の緊張が解けた。

すべての緊張が解けたわけではない。サチノミヤの膝下養育の任務が解けたかわりに、寛政のむかしに曾祖父愛親がうけた「武命により閉門」の屈辱、これをそそぐことに全力投入する日常がやってきたわけでもある。皇子養育と恥辱雪冤とは別のもではなく、前後につながっている。課題を処理する角度、方法が変わったというのが適切だろう。

それは、なにか？

政治である。政治の灼熱、灼熱の季節がちかづいていた。忠能は政治の灼熱の渦のなかに身を投じて恥辱雪冤を果たすことになった。忠能が、政治の灼熱の渦のなかにいる自分を知るのはいつか、い

まのところ、なんともいえない。

政治の季節はアメリカ大統領の特使、東インド艦隊指令長官ペリーの来航とともにやってきた。

ペリーは徳川幕府にたいして「開国、通商すべし」と提案する大統領の書簡を幕府につたえた。

老中首座の阿部正弘は諸大名の意見を徴し、おもむろに開国通商へ政策の舵を切ろうとした。朝廷にたいしても、おもむろに開国通商に向かう姿勢をつたえた。

孝明天皇の朝廷はどうであつたかという点、基本的には幕府の姿勢に同調するが、しかし国防の強化は図るべしとするものであつた。アメリカ（その他の列強）の強圧に負けぬように配慮しつつ、基本的には開国通商にむかえばいいという、現実妥当の路線だ。

だが、現実妥当の路線に異議を唱えた人物があらわれた。水戸の前藩主、徳川斉昭（なりあき）である。

水戸の前藩主の立場だけなら、あるいは斉昭は黙っていたかもしれないが、息子のひとりの慶喜（よしのぶ）が御三卿の一橋家の養子になっている。

一橋慶喜は聡明、そして覇気のある青年だ。その慶喜を十四代の徳川將軍にしようと思ひ立つた斉昭が、「開国通商には反対！」と声高に叫んだことから政治の灼熱の渦が巻き起こつた。

息子の慶喜を將軍にしたいのであれば、はっきり、そつえばいい。ところが斉昭は將軍のことよりも、まずは開国通商という国際政治の次元で発言した。

だから、ややこしい。

ややこしいから、灼熱だ。

サチノミヤは内裏にもどった。

そもそもサチノミヤは内裏に住むべきひとであり、生後数年、中山家に住んだのは異例、非常のことであった。

サチノミヤの祖父、権大納言中山忠能の寂寥は深刻だった。忠能の母の綱子、妻の愛子もサチノミヤを天皇にうばわれた心地、しばらくは何事にも手がつかなかったが、立ち直りは忠能よりは早かった。

サチノミヤの叔父で侍従の忠光はサチノミヤの在、不在に影響をうけた気配がない。ついさっきまでは父忠能の前でかしくまっていたかとおもつと、いつのまにか姿がみえない。少年から青年になりかかり、颯爽としたところが鮮やかになった。

忠光は鴨東田中の中山家の別邸ですごす時間が多い。田中の別邸には「我こそは尊皇攘夷の正義の志士！」と名を諸国の正義派があつまつて気焰をあげ、諸大夫の田中河内介もしばしば顔を出している。田中の別邸の屋根に槍をつきさせば、「尊皇攘夷！」の血がしぶきとなって吹きあがりそうだ。

河内介は川端通丸太町上ル東に住み、ここから鴨川を渡って中山家に出勤していた。純情で激しい尊攘家の頭領とみなされる梁川星巖の住まい、鴨沂小蔭（おうきしょういん）もちかい。

鴨川の対岸には頼山陽がたてた山紫水明処があり、いまは山陽の息子で激的な尊攘志士の三樹三郎が住んでいる。鴨川の西の内裏や公家町ではひとの目というものがあって自警が必要だが、川を渡ればすこしは事情が変わって、尊攘派の志士は動きやすい。

中山忠能のつぎの目標ははっきりしている。サチノミヤに健康にそだっていただき、一日も早く即位の英姿をみせてもらつ、そのほかのことではない。

目標の姿、格好ははっきりしているが、なにを、どうすればいい

かとなると溜息、また溜息である。

たとえば、中山家のだれかが、「一日もはやくご即位を！」と口に出し、中山家以外のだれかの耳にはいったとすると、たちまち「大逆！」と糾弾されるおそれがある。サチノミヤの一日も早い即位には孝明天皇の一日も早い譲位、または逝去が前提になるからだ。

動くに動けない状況である。しばらくは困惑の想いですが、アメリカの使節が開国通商をもとめて江戸の幕府と交渉をはじめ、おおかたはアメリカの希望のとおりになりつつあるが、反対する大名がゼロではない——この報知が京都につたわると、忠能はソワソワと腰が浮いた気分になった。

「生臭くなった、マツリゴトの幕があがるぞ！」

ちかごろの公家はマツリゴトなどには手を出さないものだが、じつのところは、手が出せないから出さないだけのはなし、出せるものなら手も足も出したい。

マツリゴトは面白い。公家はマツリゴトの面白さを知っている。武家がマツリゴトから撤退しないのもマツリゴトが面白いからだ。そもそも天皇を助けてマツリゴトをおこなうのは公家であって、いまのように武家がわが物顔でマツリゴトをおこなうのはまちがっている。

マツリゴトは面白い、一役買って出るのは面白いはずだと忠能は肚をきめた。

マツリゴトに手を出そうとこころにきめると、忠能をめぐる環境が輝いた。

だが、なにから手をつければいいのか、そこがわからない。マツリゴトに手を出して、どうなった、こうなったという経験が中山家の歴史から消えて長い時間がすぎた。中山家だけではない、ここ数百年のあいだ、たいていの公家にはマツリゴトの経験がない。

どうしたものかと首をひねっていると、諸大夫田中河内介の息子の嵯摩介（さまのすけ）が、ひめやかな様子で忠能の息子の忠光に

ちかづき、

「投げ文がございました」

一通の封書を渡す。

「投文……この屋敷の、どこに？」

「ご存じなさらぬほうが方々の安全と、父がもうしております」

「河内介が……さようか」

河内介は「これを大納言さまのお手元にとどけよ」と息子の磋摩介にもうしつけ、「出所はご存じなさらぬほうが安全ともうしあげよ」と付け足したのだろう。

投文は忠光から忠能にとどけられ、忠能の手で開封された。

「みとにごちゅうもく」

「まくのもの」

二行の平仮名、それだけが書いてある。

忠能は忠光にも読ませ、唇に指をあてて、なにかいおうとする忠光を封じた。封じること、忠能と忠光のあいだに無言の了解が成立する。

「まくのもの……幕のもの」——中山家にだけ通じる「味方」の

意味の合言葉だ。マツリゴトの芝居は「みと……水戸家」からはじまる。水戸家について、あれこれと調べることからはじめなさいと「幕のもの」は忠能につたえている。

——水戸、なるほどな！

水戸藩の徳川家は徳川御三家の一家だが、紀伊や尾張にくらべると格が低い。紀伊は紀伊一國、尾張は尾張一國を知行しているのに水戸は常陸国の一部の水戸だけしか知行していない。だから水戸徳川家は「一國一城のあるじ」ではない。

水戸の黄門さま——二代藩主光圀については虚実とりまぜて異様、奇ッ怪な言動が噂され、記録されてもいる。すべてが事実でないのはもちろんだが、すべてが虚偽でないのももちろんであり、光圀の異様、奇ッ怪な言動の理由の大半は「一國一城のあるじ」にして

くれなかつた神祖家康にたいする すね の感情にもとづいている。
すね の感情をあらわにするのは危険だから、光圀以後の歴代
藩主は京都の朝廷に親近することで不満を解消した。

光圀がはじめた『大日本史』の編纂は水戸の京都びいきに拍車を
かけ、京都としても悪い気はしないから、水戸と京都の心情の提携
は時とともに強くなった。

水戸と京都の提携は婚姻関係においてもっとも鮮明な姿になっ
ている。

三代の綱条は右大臣今出川公規の娘を、五代宗翰は准后一条兼香
の娘を、六代治保は准后一条道香の娘をそれぞれ妻にむかえた。四
代宗堯の養女は内大臣近衛内前に、宗堯の娘は左大臣二条治孝に、
もうひとりの娘は権大納言今出川実種に嫁いだ。

当主（九代）の斉昭（なりあき）は藩内の勢力抗争をうまく処理
できず、幕府によって引退に追いこまれ、息子の慶篤に代わったが、
実権は斉昭がにぎっている。

その斉昭と朝廷とは密接な婚姻関係でむすばれた。斉昭の母は権
大納言烏丸光祖の次男の資補の娘、斉昭の夫人は有栖川織仁（たる
ひと）親王の王女の登美宮、斉昭の姉は左大臣二条斉信、もうひと
りの姉は関白の鷹司政通に嫁いだ。

鷹司政通は文政六年に関白になり、太政大臣を兼ね、孝明天皇の
摂政となって長い時間がすぎている。

義兄の政通が宮廷を牛耳っている。これは斉昭にとって 好きな
ようにやれる 環境が京都に出現したのを意味するから、江戸の斉
昭、いよいよ熱い視線を京都におくる。

大名のうち、水戸だけは参勤交代がなく、当主は江戸常駐を命じ
られている。そこで世間は「水戸さまは天下の副將軍！」といって
持て囃し、持て囃されているのを水戸家も否定しない。「水戸家は
天下の副將軍」が真相をいいあてているかもしれないからだ。

忠能は河内守を呼んだ。

「畏れ多いことながら、われはマツリゴトに手を出すと決意した。主上のマツリゴトに手を出し、正しいマツリゴトにあらためてのちに、いずれは到来する……」

ここで内裏の方角にむかい、うやうやしく敬礼し、からだを起し、「サチノミヤさまの即位の日に、マツリゴトを御手にお渡しする、と」

「至極のご忠誠と存じます」

河内介の声の調子、両手を突いて返答してから顔をまっすぐに忠能にむけた姿勢には、忠誠のほかのなにももない。

河内介の慇懃をうけて性急な様子に変わった忠能は、グイッと膝をのりだし、

「おしえてくれ、武家の手にあるマツリゴトはいま、どのようなになっているのか。マツリゴトを、武家の手から正当な臣下である我らの手にとりもどすには、どのような手があるのか」

「水戸の斉昭さまがおおきな一步を踏み出され、斉昭さまと行動を共にしようとなさる大名が、ひとり、またひとりと……」

「水戸がやる気になった、それは存じている。水戸に味方する大名は増えているのか？」

「まさしく」

「心強い！」

徳川斉昭はペリーがやってくるまえから、「外国船の接近に警戒せよ！」とさけぶ強硬な海防論者だった。領地のなかに長い海岸線があるのが海防論にめざめた動機だ。

幕府は斉昭を海防担当参与の役に任じて機嫌をとった。ふるくから攘夷主義を唱えていた斉昭は上機嫌になったが、アメリカとの交渉がはじまると、斉昭は不機嫌になった。

斉昭は交渉を長引かせて時間をかせぎ、そのあいだに自分の海防論を採用して海軍増強をはかるべしとの論を持論としているのに、幕府は海防強化に目をつぶったまま、交渉早期妥結の道に走ったか

らだ。

斉昭は幕政参与を辞任し、自分の子で、徳川御三卿のひとつ、一橋家の主となっている慶喜（よしのぶ）を十四代将軍にしようとする運動をはじめた。

十三代の家定は心身に障害があり、子も生まれぬ。難題山積の時代の指導者にふさわしい能力はないと評されていた。

一橋慶喜は聡明で英才、健康で精力的、人物の器量を基準にして比較するならば、新しい時代の指導者として慶喜が断然優位である。

斉昭が「安易な開国通商には反対」と「將軍嗣子には一橋慶喜」の二本柱を政策にかかけると、薩摩の島津斉彬（なりあきら）、越前の松平慶永（よしなが）、宇和島の伊達宗城（むねき）、土佐の山内豊信（とよしげ）など、西南雄藩の大名が賛意を表明、連帯して動き出した。

幕府はアメリカをはじめとする諸外国と交渉をつづけていた。詳細な点では支障があるものの、大筋では開国通商の方向にむかっていたが、徳川斉昭や松平慶永などが次期将軍に一橋慶喜の名をもちだしたことで、譜代大名のあいだに衝撃が走った。

かれらは一橋慶喜の対抗馬として紀州藩主の徳川慶福（よしとみ）をかっさだし、慣例のシステムにもとづいて慶福を次期将軍に擁立しようとした。

慶福は慶喜よりは年少、人物の器量は慶喜に劣るとみられていたが、家柄を比較すれば紀州家と一橋家では優劣の差は歴然としている。譜代大名の多くも慶福支持の姿勢を表明した。譜代大名は保守的であり、それぞれの特権を維持するためには変化を嫌う。

斉昭は孝明天皇の権威に頼って慶喜優勢の状況をつくろうとした。征夷大將軍の任命は、本来ならば天皇の専権事項なのだ。

斉昭の重臣が京都にのりこみ、あの手、この手の宮廷工作を展開した。慶喜を十四代将軍にする、開国通商交渉は即時停止、この二本立て作戦である。

斉昭や、斉昭の学問顧問の藤田東湖（とうこ）の思想に影響をう

けた尊皇攘夷の志士たちが大挙して京都にのりこみ、激しい言論作戦によって名をひろめる。

幕府は朝廷にたいし、アメリカその他の各国と開国通商交渉をつづけている事実を隠そうとはしなかった。孝明天皇が開国を承認しない態度であるのは知っていたが、強く押せば引き下がると、状況をあまくみている。

だが、斉昭の京都工作がすすむにつれて、交渉に強く反対する廷臣があらわれた。関白の鷹司政通ははじめは開国賛成の姿勢をとっていたが、やがて開国反対、攘夷主義に見解を変えた。斉昭の姉が政通の妻である関係も効いていた。

幕府は鷹司に焦点をしばって批判したので、政通は関白を辞職、九条尚忠が関白になった。

だが政通は退官後に、義弟の斉昭から教えられた外国の事情を内大臣の三条実万（さねつむ）に知らせ、天皇には書面で報告した。

あとからかんがえると、政通は言動の自由を得るために関白を辞職したのかとも推測される。考えすぎかもしれないが。

鷹司政通の関白辞職は安政三年だが、この年、薩摩の島津斉彬（なりあきら）の養女の篤姫が近衛忠熙の養女となり、近衛家から十三代將軍家定の夫人として嫁いだ。

徳川將軍家と島津氏の婚姻はこれが最初のことではないが、開国の是非と將軍嗣子の問題をめぐって深刻な政争が予想されるなか、養女を將軍の妻とした斉彬の声名は急上昇した。

この斉彬が水戸の斉昭と提携して、一橋慶喜を次期將軍に擁立する運動の一翼をになうことになった。幕府にとっては強敵の出現といておおげさではない。

安政四年五月三日、斉彬は江戸を出て鹿児島にお国入りした。

途中、伏見の薩摩屋敷で休憩した。

西国のほとんどの大名が伏見に屋敷をかまえ、参観交代の往復に伏見屋敷で休憩してから国にむかうのがふつうだ。

だが、島津斉彬はふつうのルートをとらない。島津家はふるくから近衛家と親しく、藩主は参観交代の途中で伏見から京都にはいり、近衛の当主と会見するしきたりがあった。ふつうの大名には到底ゆるされない、島津だけにゆるされた特権といつていい。

——ブンセイロク、ミズノトヒツジ、ムツキ！

安政四年四月十三日の夜、猿ヶ辻から中山家へ秘密の合言葉がとどいた。

「ああ、サルさん、わたしはいま、マツリゴトに手を出しておおいにやろうと決意したばかり。もうしわけないが、あなたと秘密の協議をしている暇はないのですよ！」

「ですから、あなたのも、その、おおいにやる決意 について至急に相談しなければならなかったのです」

「至急に？」

「ですが、ここに来ていただくのは危険、警戒が厳しくなりましたからね。お屋敷の門の内側で爪先立ちして朔平門をみやりつつ、ああ、しばらくミコさまのお顔を拝していない。お元気でいらっしゃるにちがいないが、お顔を拝見できないのは辛い、悲しい！ といった思い入れいれたつぶりの表情をつくってください。われらをめぐる状況はすこぶる険悪なのです、照れくさい なんて上品ぶつてる場合ではない」

サルの深刻、悲痛は半端ではない。だから、 「安政の大納言忠能」＋「平成の年金生活者木ノ内民夫」＋「2」 はサルにいわれたとおり、屋敷の門の内側に爪先立ち、人目のないのを確認し、うんと小声で、

「コレ デイ イ デスカ？」

「イ イ デ ス ヨ ジ ヨ ウ デ キ デース」

「至急に相談しなければならぬこと、とは？」

「あの、ですねえ……」

サルの声の音波ではない。なんていえばいいのか、意志の波長と

でもいえばよさそうなものが民夫の脳髓にかなり鮮明につたわってくる。

「近衛邸の門前が異常に賑やかです。おめでたいことが重なって祝いのひとが詰めかけている、なんていう賑わいとはちがひ、頻繁な出入り、興奮度が高い」

「かれらは、なにか、おなじことを喋ってはいませんか。特定のどれかの名前が頻繁に出てくる、とか？」

「それだ、それなんですよ、中山さん！」

「あのねエ、サルさん。わたしはもうさつきから木ノ内民夫にもどっているんですよ！」

「そうだった。心配かけて、もうしわけないが、つまり、それくらいの大事件なのだと肚をくくってくださいよ」

「頻繁に出てくる、その名前とは？」

「信じてもらえないかもしれないが、近衛邸のまえを通るひとは口々に 薩摩守、そうでなければ 島津さま といっているんです」^{1 2 8}

「 薩摩守 または 島津さま、それならズバリ薩摩藩主の島津 齊彬じゃないですか」

「そりゃ、そうなんです。 薩摩守 または 島津さま とくれば、まぎれもなく島津齊彬なんです、その齊彬の名が、どうしていま、内裏の北の近衛邸の門前でこんなに頻繁に出てくるのか、わけがわからない。島津家の当主が参観交代の行き帰りに入京して近衛家を訪問するのが黙認されているのは知っている、それはかまわないんだが、島津の近衛家訪問、いつもは静かなんです。今年にかぎって異常ににぎやか、興奮している、それがおしい。これは騒動だといっしかないんです、だから プンセイロク……の合言葉で木ノ内さんに緊急連絡をいたした次第！」

木ノ内はちよつと首をかしげ、すぐに立て直し、

「サルさん、あなたが自分で近衛邸のあたりに行けば、すぐにわかるんじゃないですか、騒動の原因とか性質とか……」

「あのねエ、木ノ内さん、わたしは猿ヶ辻を担当しているサルなんですよ。猿ヶ辻の金網の外へは出られない我が宿命、それをお忘れとは情けない」

「あなたの宿命はわかってるんですが、あんた自身が宿命を忘れるっていう手はないんでしょうかね？ 宿命を忘れれば、宿命は消えるというか、存在できないというか……」

パチツ――

「おおっ。サルさん、いま指を鳴らしたでしょう、パチツときこえましたよ！」

「鳴らしましたとも！ 木ノ内さんの猛烈真理発見、指鳴らしぐらいじゃ物足りないbravo^{ブラヴォー}だけど」

忘れられた宿命は存在しない――ピンポン玉ぐらいの軽い目方のコロンブスの卵だが、サルに称賛されて民夫は事態がおおきく前身する兆候を認識した。

猿ヶ辻のサルは 金網から抜けられないおのれの宿命 を忘れ、その結果として得られた自由を利用して金網から抜けて近衛邸のちくかにゆき、騒ぎの実態、性質を調べて分析し、来るべき事態にそなえる。

「抜けるのは夜ですね、昼は危険です。だれが、どこから警戒監視しているか、わかったものじゃない」

「夜でも危険がないわけじゃない、サルは人間よりも人目につきやすいから」

「人間の目につきにくい名案を工夫しましょう」

おかませしますよと木ノ内民夫はいつてサルとの会見を終り、からだを半回転したときにはもう大納言中山忠能にもどっている。

人間の目につきにくい名案を工夫しようといったとき、じつは、サルはもう名案を編みだしていた。

夜を待って、サルは身を細く、長く、紐のようにして金網から抜けだし、地面に降りた。

サルは片手に、かなり大型の浅葱色の布の包みを持っていた。包みをクルクルツとほどくと、サルの背よりはすこし高い、細長い筒になった。

筒を巻いて降ろして、はじめに右足、つぎに左足を筒に入れ、腰から肩、頭の上まで引き上げるとサルの姿は消えて、浅葱色の長い筒が一本、スルスルツと内裏の東の塀に沿って南へ動き、御所の正門の建礼門にちかづいた。浅葱色が夜の闇に吸いこまれ、筒はみえない。いや、全然みえないっていうほどではないが、それと知ってみるのでなければ、みえない。

建礼門のまえに武士の集団、中心人物とおぼしき武士がひとり、敷物も敷かずにはざまずき、両手を地について黙拝している。

——これが島津斉彬なんだ、薩摩守斉彬。なにか、どえらいことをやろうとしている！

島津斉彬は御所の表門の建礼門のまえにひざまずき、門を突き抜けて天皇の耳にとどいてほしいとの願いをこめて、なにごとかを、いや、なにごとかなんて曖昧な言い方に逃げるべきではない、斉彬が御所のなかの天皇の耳にとどけようとしているのは、なんであるか？

ふつうの人間にはわからないが——なにしろ斉彬は言葉ではなくて、こころの振動で天皇に願っている——サルにはわかる。

——天子よ、つぎの將軍には一橋慶喜がふさわしいと宣告していただきたい！

もうひとつ、

——幕府は外国に威圧されて開国通商の条約に調印しようと企んでおります。ちかいうちに、「調印に勅許をいただきたい」と願ってくるはず。そのときは、天子よ、「調印は許可せぬ」と突き放していただきたい！

サルは、島津斉彬の請願の中身はおよそこのようなものだろうと解釈し、それから、近衛邸のさわぎを知ろうとして御所の西の塀づ

たいに北へ、近衛邸にむかった。

建礼門から近衛邸にゆく途中で、中山忠能に通信をする。忙しくなったものだ。

「安政年間の中山忠能の内部の平成年間の木ノ内民夫さんへ、猿ヶ辻のサルから秘密の通信、つたわっていますか、感度は如何？」

「こちら平成の木ノ内、感度良好。お待ちしていましたよ、通信をどうぞ」

——島津斉彬は建礼門のまえでひざまずき、一心に願ったあと、近衛邸にむかった。斉彬は、なにか重大な案件について近衛家と協議するにちがいない。それが双方の臣下につたわっているので、邸のあたりに騒ぎが起こっている。

「島津篤姫がまず近衛の養女になり、それから江戸に下がって家定夫人になったのは去年のこと。島津―近衛―徳川は姻戚になったから、斉彬が門前拝礼をしたからといって、徳川としても、やみくもに叱責はできない」

「斉彬はやくから今夜の入京を計画しており、叱責を避けるための篤姫の嫁入りであった、そういえないわけでもない」

「で、斉彬は近衛邸で、なにを？」

「近衛邸ではほんのわずかの休憩、それから北へ抜けて、二本松へ」

「二本松といえば相国寺（しょうこくじ）、斉彬が相国寺に、なんの用事があるんだろう？」

「土地を買収して薩摩屋敷を建てる」

「二本松に薩摩屋敷を……途方もない！」

薩摩藩の京屋敷は錦小路通高倉西にあるが、斉彬は相国寺門前の二本松と通称される広大な土地を買収し、新たに京屋敷をつくるときめた。近衛邸の北に接する土地だから、近衛邸と薩摩藩の二本松屋敷は隣接することになる。

斉彬が近衛邸をおとすれたのは お隣さん になる挨拶の意味合いであったろう。もちろん、そんなことは京都留守居役がすれば

すむこと、斉彬がわざわざ出向くまでもない。斉彬の登場は生臭いマツリゴトの仕掛けなのだ。

近衛邸の南が内裏である、ということとは、

「内裏の背中に島津斉彬の屋敷ができる！」

「まさに、途方もない！」

薩摩藩屋敷は、まず近衛邸を、そのつぎに内裏を威圧する位置に建てられる。幕府の京都所司代でさえ、内裏からはかなり遠い二条城の北に接していて、内裏を敬遠する姿勢さえうかがわれるのに、薩摩の京屋敷はそんなことを頭から無視するかのように近衛邸と内裏に覆いかぶさる建物になる。

「位置も位置、広さも広さ！」

錦小路の屋敷は、京都随一の商業地であるのも関係して、狭かった。新しい屋敷の面積は錦小路とは比較にならぬほど広い。

「木ノ内さんッ、ことによると薩摩は……」

「じつは、わたしも……木ノ内民夫から中山忠能へ、忠能から木ノ内へ、行ったり来たりするわたしも……」

サルも木ノ内も口には出さないが、おなじことをかんがえている。

——島津斉彬は薩摩の軍隊を京都に入れようと画策しているのではあるまいか？

家門、譜代、外様の別にかかわりなく、大名が軍隊を京都に入れるのはタブーのなかのタブー、すぐさま反乱とみなされて追討軍が向けられるはずだ。

斉彬がそれを知らぬはずはない。知らぬはずがない斉彬が内裏の背中の二本松に広い敷地をもとめて屋敷をたてるのは、近い将来の軍隊の京都駐留をくわだてているからではないか？

「サルさん、わたしはもう、こうしてはいられない、ゆきます！」

「どちらへ、お出かけ？」

「薩摩守に逢いたい！」

「ああ、斉彬はいま、桜木町の近衛別邸に移り、左大臣近衛忠熙、権大納言三条実万と会談の真っ最中」

「三条実万も……わたしも桜木町へ……遅れてはならん！」

「充分に警戒して……」

「あなたの真似をします、安全ですよ」

「わたしの、真似？」

しばらくして、浅葱の布の筒が一個、中山邸の門から出て、あたりを警戒するふうに北へすすみ、二条家の北裏、近衛別邸にはいった。

浅葱の筒が近衛別邸に招き入れられるのを確認して、サルはつぶやく。

「中山忠能は『あなたの真似をする』といったが、浅葱の筒が猿ヶ辻のわたしの発案だとも、おもっているのかな？」

浅葱の筒はサルの発明とっていいが、筒の、そもそもは安政三年三月二十五日、中山邸から朔平門の穴門までの祐宮の参内路の両側に浅葱の幕が張りめぐらされ、サチノミヤが浅葱の幕に隠れて参内したのが原型だ。サルの浅葱の筒は浅葱の幕の変形、または応用なのだ。

そんなことは、まあ、どうでもいいんだがとつぶやきをくりかえして、サルは、

「浅葱の筒のなかに身を潜め、筒をズルズルとひきずって動くのは平成の年金生活者木ノ内民夫さんといえいいのか、安政の大納言の中山忠能なのか……まさかミコさまの悪ふざけであるはずはないが、あーあ、両者の区別がますます難しくなってきたア！」

桜木町の近衛別邸での会談のあと、中山忠能はただものではなくなった。

中山忠能がただものではなくって、なにになるのかというと、尊皇攘夷のお公家さんになった。このさき、尊皇攘夷のお公家さんはどんどんふえて、数えきれなくなるが、まっさきに、公然と、「尊皇攘夷！」と叫んだのは中山忠能である。

忠能と同期に尊攘公家として声をあげたのは権大納言の三条実万、かれは早くも安政元年に水戸の斉昭に書簡を発して、「京都守衛の任にあたるべし」と説諭した経歴があるから、忠能の先輩ともいえる。実万が忠能より七年年長。近衛別邸の会談のあと、実万は権大納言から内大臣に昇格した。

関白九条尚忠を首班とする朝廷がオーソドックスの政権だが、その尚忠は水戸の斉昭による徳川慶喜次期將軍擁立派の対抗馬と目されている。九条政権が紀州の慶福優位の政治状況をつくるのを妨害する目的で、鷹司政通が近衛忠熙や三条実万や中山忠能、徳川斉昭、島津斉彬、などを抱きこんで公家と大名の慶喜擁立派を結成した。

——紀州派と慶喜派、なまぐさい政争のはじまりだ！

金網の奥で、サルが小声の、しかし快哉の調子でつぶやいた。空も破れよとばかりの大声で叫びたいところだが、自戒しなければならぬ。

——忠能さん、がんばってくださいよ。木ノ内さんを通じて猿ヶ辻から応援しますから、ね！

駐日アメリカ総領事ハリスと幕府の交渉は調印を約束するまでに煮詰まったが、調印をまえにして幕府は「調印には天皇の勅許が必要」と言い出し、六十日の延期をハリスに通告して、老中堀田正睦を上京させた。

堀田正睦は安政五年の二月五日に入京し、参内は九日ときまった。

——堀田老中は黄金をたっぶり、ふところにおさめているらしい。貧乏なお公家さんは、ここを先途と賄賂をむさばるにきまっている。

——いちばん多額の賄賂を取るのは、だれだろう？

——だれだろう、なんて、いわなくてもわかつているじゃないか。

二月九日に参内した堀田正睦は通商条約の草案を呈上し、調印勅許をもとめて廷臣のあいだを奔走してまわった。

そしてまた、堀田正睦から朝廷にたいし、次期將軍候補として名

があがっている紀州の慶福と一橋慶喜のうち、どちらが勅意にかなっているかを示していただきたくいと奏請された。

二月二十三日、天皇の内意が堀田につたえられた。

「条約調印については、もういちど三家以下の諸大名の意見を徴し、あらためて勅許を願うべし」

味も素っ気もない勅詔である。

呆氣にとられた堀田は勅詔を変更させる攻撃をかけた。彦根藩主井伊直弼の腹心の長野主膳は九条閑白と九条の家来の島田左近にとりいり、賄賂を武器として勅詔変更をめざした。

中山忠能はマツリゴトに手を出した瞬間、頼みとする天皇の、おもしろいほかの弱腰に直面した。九条閑白が堀田と提携するかのようになり幕府寄りの姿勢をかためたにもかかわらず、九条を叱責しようともしない。天皇を輔佐することでマツリゴトをやるうとする忠能にとって、天皇の弱腰は齒がゆい、じれったい、困惑の素だ。

——主上がこのように弱腰では、サチノミヤさまの将来がおもしろいやられる！

そうかといって、いま、なにを、どうすればいいのか、智恵がまわらない。

権大納言といえば高位の官職ではあるが、権大納言の政務としてなにがあるかといえば、なにもない。朝議に列し、左右を見回して賛成、そうでなければ反対を表明するしか、能がないのだ。

困惑しているところへ、

——そうか、これがあったのか！

おもわぬ発見があった、議奏の久我建通（たけみち）が辞表を提出したのである。

朝廷で実質的な官職といえば、まず、武家に関係するいつさいを協議、処置する武家傳奏であり、つぎには武家関係のほかのすべてを協議、処置する議奏の両職で、あわせて議傳（ぎでん）両卿といった。朝廷の日常の政務執行の両翼である。

ほかの職ならともかく、義傳両卿が辞意を表明すると関白や摂政は動揺する。両卿の助言がなければ、いかに関白といえども、日常の政務をどう処理すればいいのか、困惑するしかない。

久我建通が議奏辞表を提出すると、忠能は——たぶん中山續子を通じて——議奏加勢の一員として名をつらねる工作をおこなって成功した。

議奏になろうとするものは、まず議奏加勢になってから議奏への昇進をめざすが、議奏加勢から議奏への昇進は容易ではない。忠能がはじめて議奏加勢になったのは嘉永二年、四十一歳のとき、サチノミヤはまだ生まれていなかった。

議奏加勢に補任と解任をなんどくりかえし、すこしずつ議奏にちかづいてはいる。久我建通の議奏辞職表明をチャンスとみて議奏加勢になったものの、これまでどおり、短期で解任されるおそれがないわけではない。

久我建通の議奏辞表提出は三月三日、三月七日に忠能が議奏加勢になり、十六日には建通が辞表を撤回して議奏の職にとどまった。建通が辞職を表明しなければ、忠能の議奏加勢補任はなかったかもしれない。結果からかんがえると、忠能が議奏加勢に任じられる途をひらくための建通の辞表提出であったかもしれない。政局の闇は、いまもむかしもおなじ。

三月十四日、正式な通商条約調印勅許ではないが、「外交については従来どおり幕府に一任」と明記した勅答が堀田にあたえられた。堀田にとっては金言ともいえる勅答である。

——堀田老中は胸を張って江戸に凱旋するわけだなあ！

猿ヶ辻のサルは敗北感に打ちのめされ、木ノ内民夫と中山忠能の存在を忘れるほどであった。

じつは——と前置きするのが、この場合、もっともふさわしい文

章テクニツクのはずだ。

じつは、十一日の夜、孝明天皇は近侍の富小路敬直を召して、「これを」と宸翰をしめし、議奏の久我建通に手渡すように命じた。「外交は幕府に一任」の勅答が発せられる二日まえである。

このようになるまでのいきさつの詳細をいえば、勅答内容は「外交幕府一任」ときまつたが、天皇自身は大いに不満である、「なんとかならぬか」の苦悩の想いが宸翰作製、富小路呼び寄せとなった。宸翰を送られた久我建通は議奏、朝廷の審議を実質的に運営する官職だ。

建通は病気で臥せていたが、宸翰に接してすぐに起き上がり、

「中山忠能を……」

「正親町三条実愛を……」

「大原重徳を……」

「岩倉具視（ともみ）を……」

つぎつぎと呼集を指示し、久我邸で深夜の協議がはじまった。近衛邸の西に舟橋・久我・堀川・伏原の四家の屋敷が接している。

「関白の味方に気づかれぬように……」

「隠れて……」

「そうとはわかっているが、手が足りない！」

「だが、事は早急を要する」

中山忠能は頭を垂れ、沈黙していたが、意を決して口をひらき、

「敵方に気づかれずに諸家に招集の使者を送る名案があります。任せていただきましょう！」

決然と宣言した。

忠能が宣言してまもなく、公家町一帯に展開された光景はとてこの世のこととはおもわれない奇妙で滑稽、しかし、関係者のほとんどはまなじりを決し、

「つぎは今城定章……」

「今城家からそのまま柳原家へ……」

「六条家には、だれから？」

「飛鳥井家から」

「飛鳥井家、よろしい。そのつきは、ええと……」

雑踏し、混乱しているのはたしかだか、大筋としては事態が目標にむかつて進行しているのはあきらかだ。

数えきれないほど多数の浅葱の筒が久我家の屋敷から出てゆき、もどつたかとおもうと、また出てゆく。

春の夜の公家町、屋敷の隅から出た筒が春のおぼろ月に照らされ、トヨトヨと動いて別の小路に消え、するとそのあとを、また一個の筒がスルスルツと動いて、消える。おぼろ月の明かりが浅葱の色を吸い取ってしまい、すこしでも離れば、筒そのものがみえなくなる。

浅葱の筒が門をくぐってはいり、しばらくして出たあとの屋敷では、どこも同じように緊張の空気が満ちる。明かりが灯り、性急で敵しい調子の言葉がきこえる。

「夜具を上げよ！」

「はあーっ？」

「われはもう、夜具は要らぬ。このまま、夜明けを待つのじゃ！」

「ははーっ。お明かりは……？」

「明かりは、消せ」

夜があけて十二日の正午、内裏の清所門をくぐって、中山忠能をはじめとする八十八人の公家が参内した。

「外交は幕府一任」とした勅諭案の修正をもとめる要請書が久我邸で昨夜のうちに作製され、八十八人が署名した。かれらは要請書を九条関白に呈上するために参内した。

九条関白はすでに事情を知らされたらしく、いつになっても参内しない。日暮れちかくなっても九条の姿があらわれないので、一同退出し、九条邸におしかけ、諸大夫の島田左近を通じて八十八人の

総意を陳述した。

つぎの十三日、有栖川宮熾仁（たるひと）親王が外交拒絶の意見を奏上した。

十三日と十四日にかけて非蔵人五十人あまりが有栖川宮と同意見を奏上した。

十七日、昇殿をゆるされない地下（じげ）の官人九十七人が外交拒絶の意見を奏上した。

三月二十日、堀田正睦にたいし、修正された勅諭が出された。

「外交については、三家以下諸大名の意見を徴したうえで、あらためて願ひ出る事」

あらためて、との文言ではあるが、実質的には却下である。調印を勅許するとも、せめともいわず、勅許申請そのものを却下したのだ。

三月二十二日、將軍継嗣問題にかんする天皇の沙汰書がくだった。

「国事多端のおり、すみやかに將軍の養子をきめるのがよしい」

たった、これだけの沙汰書である。つまりは「將軍継嗣は徳川家のこと、朝廷の知ったことではない」というわけだ。

条約調印への勅許は却下され、將軍嗣子問題は相手にされず、堀田正睦は悄然と江戸にもどった。

猿ヶ辻から合図があり、木ノ内民夫は門扉の内側に爪先立ちして、サルと会話した。サルから民夫に「至急お話ししたい」と連絡があったのだ。

「堀田正睦は情けない姿で江戸にもどったが、幕府がこのままのほずはない、かならず反撃に出てくる。それも必死の反撃を」

「そこで、わたくし木ノ内民夫、いや、中山忠能、どうすればよしいのか、いや、打つべき手として、なにが可能であるか？」

「いまは、わからない。わかっているのは、あなた、つまり木ノ内民夫、または中山忠能はあくまで主上と想いを共にすること。そうでなければサチノミヤさまの安危にかかわる事態が生じたとき、と

「つさに反応できない」

「主上と共に……了解」

中山忠能は安政五年五月十日に議奏加勢から議奏に昇格した。八十八人の中・下級公家をあつめて九条閑白を強圧し、天皇の勅諭の内容を変更させた功績にたいする褒賞の昇進だ。忠能はマツリゴトの第一線に踊り出た。

「木ノ内さん、忠能は議奏昇進について、なにか感想らしきものを口に出していますか？」

「あれを評して、満面に笑みをたたえてなんていうのでしょうか。『あのとき、躊躇せず、おもいきって踏み出したのが良かったのだ』と、なんどもなんども」

「嬉しいのはわかるが、表立って悦びすぎると、警戒しなければならぬ方面を刺激するおそれがある。そのあたり、釘をさしてくださいよ」

「若くはない忠能です、慎重にやらねばならぬと、こころに命じているようですよ」

「それで安心！」

江戸では――

彦根藩主の井伊直弼（なおすけ）が幕府の大老となった。

大老は幕府の最高最強の職ではあるが、朝廷の太政大臣とおなじく、幕府の常置の職ではない。老中の権限では処置できぬ重大事件が起ったとき、臨時に任命されるのが大老だ。幕府首脳は、京都で起った事態は大老職を設置して対応しなければならぬほど重大だと判断したわけだ。

井伊はすばやく動いた。

將軍嗣子は紀州の慶福にきめた。

慶福は名を家茂（いえもち）とあらためた。先代の家定の養子と

して十四代になったのを感謝する姿勢、それが家茂の名にしめされている。

アメリカ総領事のタウンゼント・ハリスは他国が介入するとの噂を背景に調印をいそがせ、安政五年六月十九日、アメリカ軍艦ポーハタン号の艦上で日米通商条約が調印された。

六月十二日、関白九条尚忠の娘の准后夙子が皇女を産み、幼名を富貴宮と名づけられた。尚忠は富貴宮の傳育を命じられ、やがて富貴宮は九条邸に移って養育される。

六月十七日、伊勢神宮に奉幣使の徳大寺公純が派遣され、宸筆の宣命が公純によって奉納された。宣命は、外国による侵略の危機を訴え、幕府が外国の威圧に反抗しえない実状をのべ、外国軍が攻撃するならば蒙古来襲のときのように神風を吹かせて敵船を沈没させていただきたいと神に祈っている。

徳大寺公純は二十五日に帰京したが、天皇は東庭で伊勢神宮の遥拝と宮中賢所拝礼を一日も欠かさず、皇子サチノミヤは庭上で天皇に侍した。

石清水八幡社には中山忠能、賀茂社には正親町三条実愛が派遣されて外患排除を祈願し、墨夷掃禊・四海静謐・公武和熟を祈願させた。

幕府が「紀州の家茂が將軍継嗣にきまつた」と発表するのは六月二十五日と予定された。

その前日、越前の松平慶永は櫻田門の井伊屋敷におしかけ、井伊直弼への面談を強要し、条約調印は違勅であると糾弾した。慶永の狙いは違勅調印を攻撃することによって井伊を窮地においこみ、將軍継嗣問題を一橋慶喜有利に転換させようとするにあった。

井伊は登城の時刻が迫っていると回答を避けたが、慶永はならば共に登城して論議をつづけよう」と迫った。

「オヤ、今日は越前殿の登城の例日ではないはずだが……？」

「国家の重大事である、登城の例日など、どうでもかまわぬ。なおまた、將軍嗣子のこともある」

慶永は井伊の袖をにぎって登城を阻止しようとしたが、井伊は慶永をふりきって登城を強行した。

慶永は井伊のあとを追って登城、慶永のあとを水戸の斉昭と慶篤、尾張の慶勝がつづいて登城し、しばらく問答をつづけたが、井伊と老中たちに矛先を交わされた。慶永は家の格がちがうとあって、城内では問答に同席できなかった。

この日は御三卿の定例登城日だから、一橋慶喜も斉昭や慶篤、慶勝と同席して井伊を論難したが、有力大名がズラリと顔をならべて論戦を挑んでも、狷介な井伊直弼を論破できなかった。

六月二十五日、幕府は諸大名を江戸城に招集し、家定の継嗣に徳川家茂がきまつたと正式に告げた。

井伊直弼は一橋派の大名を「不時登城」を罪として厳罰に処した。尾張の慶勝は隠居・慎（つつしみ）、水戸の斉昭は慎、慶篤は登城禁止、一橋慶喜は登城禁止、松平慶永は隠居・慎である。

一橋慶喜は御三卿の定例登城日に登城したのだから罪に問われなはずだが、「不時登城」の面々に味方したと判定され、罰せられた。

幕府が朝廷に「条約に調印いたしました」と報告したのは六月の末であった。然るべき大名や幕臣が上京して報告したのではなく、特別の使者を上京させることもなく、老中連署の奉書を宿継（しゅくつき）で送って、これで終り、とした。

孝明天皇は激怒した。

「退位する！ 有栖川宮か伏見宮に讓位する」

九条関白は狼狽した。

天皇の退位の意を諫めておさえ、幕府にたいして、大老か三家の

うちの一家を上京させよと命じた。

井伊大老は「多忙」を理由に上京拒否、三家は処罰されているから上京不可能とし、老中の間部詮勝（まなべあきかつ）を上京させるときめた。

京都では一橋慶喜擁立運動の灯が消えてはいない。慶喜擁立と開国反対はもともとは別の政策だったが、幕府が通商条約調印を強行したことで、「慶喜擁立派イコール開国反対派」の状況ができあがった。この状況をささえたのが尊皇攘夷の意識である。

尊攘派は激しい宮廷工作を展開した。

権大納言で議奏加勢の中山忠能、正月に侍従になったばかりの中山忠光、中山家の諸大夫田中河内介は宮廷の内外の尊攘派をつなくたい綱の存在である。

尊攘派は、天皇から水戸藩と幕府に勅諭を下すことに成功した。九条閑白は天皇から大名に直接勅諭を下す前例はないのを理由に勅諭降下に反対したが、尊攘派は「天皇の意志である」としておしきり、勅諭は降下された。

水戸藩あてと幕府あてと、勅諭の内容はおなじである。幕府の条約調印と三家処分を叱責し、幕府は三家以下諸大名と熟議して国内治平、公武合体、内を整え、外国の侮りをうけぬように務めよと戒めるものであった。

水戸藩あての勅諭には添状があり、三家・三卿・家門の大名に、隠居者もふくめて、勅諭を傳達せよと命じていた。家康のあとの時代に分家した徳川の分家を家門といい、松平を姓とする。会津や越前、津山や松江などが家門大名である。要するに添状は「徳川の一門がそろって本家の失政を糾弾し、正しい道にもどせ」と命じたのだ。

水戸藩の京都留守居役、鵜飼吉左衛門の子の幸吉が勅諭をもって江戸にゆき、水戸藩邸にとどけた。

攘夷派に押されて後退した九条閑白は閑白と内覧の辞職を声明し

た。報告をうけた井伊大老は事態の深刻さに驚愕、九条に辞職を思い止まらせ、新任の京都所司代酒井忠義（小浜藩主）の赴任を急がせ、老中の間部詮勝を上京させた。

九条は関白、内覧の辞職を撤回した。

間部と酒井は尊攘派の処分、逮捕を開始した。安政戊午（ぼうご

・五年）の大獄である。

（第7章・終）

第8章 「和宮は江戸へ降嫁する」

安政大獄——陰惨な政治芝居。

幕府の独裁を嫌う公家や大名、尊皇攘夷の志士が逮捕され、官職を奪われ、死刑になった。

安政大獄にいたる過程を要約すると、つぎのとおり。

幕府が朝廷に「通商条約調印に天皇の勅許がほしい」と奏請した。はじめのうちは「あ、そう。いいよ」ぐらいの軽い調子で勅許が出そうな気配だったが、八十八人の公家が「勅許すべきではない」と反対の意見を表明、一同列参して関白の九条尚忠に面会を強要した。

幕府に媚びるかたちで朝議を勅許賛成にみちびこうとしていたのが九条関白であった。

九条が参内しないとわかると、八十八卿は九条邸にまでおしかけて「勅許反対」を唱えた。

調印は勅許されなかった。

つぎの将軍として一橋慶喜と徳川慶福のうち、いずれがよろしいか、勅裁してほしいとの幕府の奏請も、「三家に相談のうえ、江戸できめればよろしい」と却下同様のあつかいでおわった。「三家に相談のうえ」とは、「水戸を忘れてはならんぞ」の意味でもある。

幕府の調印勅許奏請に火がつけられて火の玉となり、火の玉は京都から江戸へ飛んだ。

あとは幕府の醜態々々、また醜態。

江戸の井伊大老が反撃に出て、ケシカラン尊攘派と水戸派の面々をつぎつぎに逮捕、牢屋におくりこみ、これと目をつけた政治家と志士の身分と地位と命を奪った。

幕府を窮地に追いこんだのが八十八卿列参、列参を主導したのが権大納言で議奏加勢の中山忠能だった。天皇が中山の動きをどれほ

ど高く評価したかは、幕府の失態があきらかになったあと、議奏加勢から議奏に昇進したことでわかる。

八十八卿列参がなければ条約調印への勅許降下は実現された可能性が高い。

井伊大老は中山忠能を憎んだ。大獄の犠牲者として中山の名も名簿に記された。議奏辞職を願わせたうえで、「五十日の愼」とする処分案がきまったが、孝明天皇によって大幅にゆるめられ、議奏の進退伺いは却下され、議奏としての出仕が命じられた。中山忠能は安政大獄をほとんど無傷でぐりぬけたのだ。

猿ヶ辻のサルと木ノ内民夫のあいだで、中山忠能の、ちかごろの態度というか、顔色というか、それが深刻な議題になった。

「大獄を無傷でやりすごした。悦んでいいはずなのに、嬉しそうにはみえない。なぜか？」

サルが木ノ内に問いかけ、

「そういえば……」

木ノ内が同調して、深刻な討議になる。

サルと木ノ内は提携している。

提携のテーマはなにかというと、被疑者の逮捕がはじまった安政五年から四年目の文久三年五月二十日、姉小路公知（きんとも）が猿ヶ辻で暗殺された事件の真相を探ること。

姉小路暗殺の犯人は公的には「不明」のまま処理されたが、それはそれ、猿ヶ辻の警戒を自任しているサルには犯人の姿がみえただけなのに、どういうわけであるのか、みえなかった。

犯人の姿をみなかったのを、サルは大いなる恥としている。サルは、姉小路がほかのだからとまちがって殺されたのではないかと推測している。

ほかのだから、それは猿ヶ辻のすぐまえに屋敷がある中山忠能ではなからうかとサルは見当をつけた。

平成の世に生きる人間に、安政の世に生きた中山忠能の生涯を追体験してもらえば中山にまちがえられて姉小路が殺されたいきさつを解明できるはずだとかんがえ、太田黒俊一に「中山忠能の生涯の追体験、やってくれませんか」と頼んで、快諾を得た。

快諾を得たのはよかったが、太田黒が急死した。先斗町の酒場の竹澤でなんか顔を合わせた木ノ内民夫に太田黒の後任になってもらい、今日まであれこれとやってきた。

孫の祐宮の養育に励み、祐宮の即位によって天皇の外戚の地位を得るまでの中山忠能の生涯を木ノ内民夫が追体験できれば姉小路殺害事件の真相は解明できるはずだが、肝腎の中山忠能、安政大獄の地獄を無傷にやりすごして歓喜の日々を送っているはずなのに、なんとなく元気がない、澁刺としない。

歓喜の日々を送っていて当然の中山忠能が、元氣澁刺としないのは事実か、どうか、あらためて確認する役割を木ノ内が買って出た。¹⁴⁷
平成の世に生きる木ノ内が安政の世の中山忠能のからだに潜入し、

——われは、なぜ、元氣澁刺としないのか？

自問すれば、反応が出る。

反応の記憶がおとろえないうちに忠能から木ノ内にもどって猿ヶ辻に合図を送ると、サルから「通信開始オーケー」のサインがあった。

「大獄を無傷同然にやりすごした嬉しさを率直に表現すると、近い公家の 仲間はずし の対象になるのではないか、それを恐れる気分が嬉しさよりも勝っている」

「ならば、自分は恐ろしい、世間の悪評をうけるのが怖くてたまらないと率直に表明すればいいのじゃないかなア。そうすれば、お公家さんの同情があつまり、好意的に対してくれるんじゃないか」

「それが、そうはいかない事情がある」

「新しい事情が発生といったような……？」

木ノ内は「さよう、新しい事情」と口ごもっていい、「和宮（か

ずのみや)さまが絡んでいるんだ!」と、これはもう、ヤケッぱちの調子でいった。

「和宮……あの和宮さま?」

「あの和宮さま」

その和宮と中山忠能が、どこで、どういつふうに関係するのか? 困惑のあまりに沈黙したサルに、木ノ内民夫が嵐のような言葉を浴びせた。

「和宮さまが徳川家茂に嫁ぐ!」

和宮は先帝の仁孝天皇の皇女、当今の孝明天皇の妹。生母は権大納言橋本実久の娘で典侍の経子、和宮を産んだあとに剃髪、尼となり、法名を観行院覚影とした。

和宮が六歳の年に有栖川宮熾仁親王と結婚の内約がむすばれ、入輿がちかづくとき橋本邸から桂宮邸に引越した。中山邸の西北、かつてはサチノミヤの皇子御殿でもあった、あの桂宮邸である。

— 148 —

「和宮が桂宮邸に移ったのは知っていたが、理由は知らなかった。

そうかア、熾仁親王に……いや、しかし、待ってくださいよ、和宮が嫁ぐのは熾仁親王ではなくて徳川家茂だと、あんた、たったいま言明したではありませんか」

「はじめは熾仁親王、つぎに徳川家茂」

「嫁ぎ先が変更になったのか。ややっこしいなア」

和宮が徳川家茂に嫁ぐ案は大老井伊直弼の腹心の長野主膳と関白九条尚忠の諸大夫島田左近とのあいだにもちあがった。井伊直弼の大老就任、和宮の江戸降嫁案、そして安政大獄はほとんど同時にスタートした政治のドラマだ。

長野主膳と島田左近、井伊家の公用人の宇津木六之丞のあいだで交わされた文書には「ちかごろの朝廷は乱れている」「不如法の法親王……これは青蓮院宮尊融(そんゆう)法親王をさしている……

が主上の御座ちかくに席を占め、非職無役の堂上方が天下の政事をかきまわしているから朝廷に惑乱が生じている」などと朝廷を非難する言葉が満ちている。そして、「このようなケシカラン朝廷政事を改革するには皇女の降嫁が必要、かつ有効である」と結論づけられていた。將軍夫人の名目で皇女を人質同様にあつかい、朝廷をひきつけるのが主膳や左近の狙いなのはあきらかであった。

関白の九条尚忠、大老の井伊直弼にとってはまさに名案、実行にとりかかったところで井伊直弼は安政六年三月三日、江戸城桜田門で殺された。

井伊が殺されても、和宮降嫁の件はたちぎえにならない。

井伊のあとを継いだ安藤信正と久世広周の政権は朝廷との融和政策の基本とし、「公武合体」の合言葉をつくった。「公武合体」の幕をあけるのに最も有効で必要な策として、和宮降嫁はまえにも増して重大政策の意味をもってきた。

— 149 —

はじめ、家茂夫人として候補にあがったのは和宮ではなく、孝明天皇の皇女でサチノミヤの妹の富貴宮であつたらしい。

このころの皇室には三人の皇女がいた。先帝仁孝天皇の皇女の敏宮（ときのみや）と和宮、当今孝明天皇の皇女の富貴宮だ。敏宮は三十歳、十三歳の家茂の夫人にはふさわしくない。和宮は家茂とおなじ十三歳、年齢はふさわしいが、すでに熾仁親王との婚約がきまっている。

富貴宮は安政五年六月に生まれたばかり、年齢を問題にすれば家茂夫人にふさわしくはないが、当今の皇女であるうえに、生母は関白九条尚忠の娘で准后という高い地位を占めている夙子である。

九条、井伊、長野、島田の内談の段階では江戸へ降嫁する皇女は富貴宮と予定されていた。

ところが――

「ところが、なんて、木ノ内さん、事態はますます昏迷の度を深めるんじゃないの？」

「そうなんだ。二本の糸がこんがらがって、区別がつかなくなる」

「糸が二本なんて、だめだよ、それ！」

「わたしも同感だが、わたしがきめたわけじゃない。こういう具合になっちゃった」

おなじ安政五年の十月、長野主膳や島田左近とは別の面々が、皇女を徳川家茂に嫁がせる策を練っていた。左大臣の近衛忠熙が前内大臣の三条実万、新任の京都所司代酒井忠義をまねいて政局收拾策を討議するなかで登場した案である。

近衛が「先日、加納繁三郎が述べたことだが」と重々しく前置きして、今日の会談のテーマを提示した。加納繁三郎は京都西町奉行所の与力である。

加納は近衛に、こう述べたそうだと。

「和宮さまが將軍に降嫁なされば、幕府は公武合体の実を天下に示すことになります。政局を通商条約破棄の方向にむかわせるのもあながち不可能ではありません」

西町奉行の小笠原長常本人ではなく、奉行の次官相当職にすぎない与力がこれほど重要な案件を左大臣の面前で直接に陳述できるのか、どうか、疑えばきりはない。だが、それはともかく、とすれば、加納の陳述は重要きわまりない。

まず、敏宮ではなくて和宮の名をはっきりとあげている。

つぎに、孝明天皇の秘策というか、悲願というか、それが開国不可、通商条約破棄であることを強く認識したうえで、「条約を破棄なさりたいのであれば、それ相当の負担はしていただかねば」と政局混乱の凶星を衝いている。「負担」が和宮の降嫁である。

加納の陳述に、近衛忠熙はなんと応じたか？

「熾仁親王との婚約がなければ、和宮さまのご降嫁がありえないわけではない」

忠熙のいうのをきいた酒井忠義は、ウンウンと何度も頭をふり、ふかくうなずいた。

近衛忠熙は「熾仁親王との婚約があるから和宮さまの降嫁は不可能」と断定したのではない。「婚約があるから不可能、婚約がなければ可能」と、熾仁親王との婚約破棄による江戸降嫁実現の可能性を示唆したのだ。酒井忠義はふかくうなずくことで近衛の示唆を了解したしるしとした。

近衛忠熙と三条実方は尊皇攘夷を旗印にし、將軍継嗣問題ではもちろん一橋慶喜をかついだ。紀州派として活躍した九条尚忠の反対派の中心的存在である。

忠熙は左大臣であって内覧を兼ねている。摂政や関白、または特別に宣旨をうけた大臣が、太政官から天皇に上奏する公文書を内見して政務を代行することを内覧と呼んでいた。摂政や関白、主要大臣の職掌のひとつが内覧であったが、いつのまにか、摂関と同等の官職のように固定された。

近衛忠熙は関白の地位を狙っている。関白になるには九条尚忠をひきずりおろさなければならぬが、幕府は九条を味方につけて大獄の嵐を吹かせている。忠熙の関白昇進どころか、左大臣の地位さえ保持しがたくなっていた。

忠熙が「熾仁親王との婚約が破棄されれば和宮さまの降嫁は不可能ではない」と酒井忠義に示唆したのは、とりあえず左大臣の地位を維持し、あわよくば九条をひきずりおろして自分が関白になるための対幕府工作であった。

万延元年（1860）二月、和宮の降嫁を奏請する幕府の宮廷工作がはじまった。その一ヶ月後、三月三日に井伊直弼が殺され、和宮降嫁はなおいつそう重要度を増した。

四月一日の老中連署の奉書上程が正式な降嫁奏請の開始である。奉書は「靈元天皇皇女の八十宮が七代將軍家継と婚約した先例があ

る」として、皇女の將軍降嫁は倫理のうえの汚点にはならないと強調しているが、じつをいうと、婚約成立後に家継が死んで、降嫁は実現しなかった。実現しなかった先例をもちだすところに幕府の苦しき、降嫁に懸ける期待の高さがわかる。

「なにせ、宮廷です。やること、なすこと、例によってダラダラゴタゴタの連続、一步すすんで右回り、しばらくお休み、お休みが終わったら役者交代でお稽古のやりなおし……」

木ノ内民夫が呆れ顔でいうのかぶせて、猿ヶ辻のサルは、

「あなたと中山家のつきあいは、はじめが寛政の愛親、そのつぎが安政の忠能、ふたりを相手に長い時間が経過している。いいかげんに慣れてもらわないと、こちらとしても困るんだけどなア」

「慣れたつもりではあるんだが、ドタバタ事件がすべて異なる顔をしているから、慣れより戸惑いが先行して……」

和宮の降嫁問題はとうなったとサルにうながされ、木ノ内は、

「天皇はもちろん賛成しないが、幕府が掲げる 公武合体 の名目に表立って反対はできないから、議奏傳奏に諮問した」

「まずは順当」

「議傳の結論は 内願謝絶 と……」

「ゴタゴタのはじまり、待ってました！ と歓迎する立場じゃないけどね…… 同意しない理由は、なんと？」

「熾仁親王との婚約、和宮は先帝の皇女で当今には異母妹にあたり当今の思し召しのとおりにはなし難い、和宮は異国人が居住する関東に住むのを恐怖している、の三点」

「妥当」

所司代酒井忠義は天皇の再考をもとめたが、却下された。

「そのままで済むはずはない、ね」

「済まない。幕府は天皇周辺に妨害者がいると見込みをつけて捜査にかかり、和宮の生母の勸行院と伯父の橋本実麗に白羽の矢を立てた」

「橋本家に脅しをかける。汚いやり方だが、それだけに効き目はある」

勸行院と実麗の叔母が十二代將軍家慶の上臈姉小路として江戸城の大徳につとめ、家慶の死後は勝光院と称していた。勝光院は実麗に書をおくり、「このままでは、あなたに傷が付きまますよ」と説得につとめた。

実麗は議奏の久我建通を通じて「降嫁の件は主上の思し召しに従う」と言上し、反抗しない姿勢をしめした。

幕府はまた、議奏の徳大寺公純を辞職させ、降嫁に反対する公家を恐怖に追いこむ強硬姿勢をみせた。

「主上は、ちよつと甘かったのでは……？」

「九条閨白が情報操作をしていますから、主上が得られる情報は少ない」

「主上は、まったく打つ手がない？」

「それが、そうでもない。主上は岩倉具視（ともみ）に相談したのです、朕（ちん）はどうすればよかろうかと」

「その岩倉具視って、なにもの？」

猿ヶ辻のサルが岩倉具視を知らないはずはないが、熟知というほどには知っていない。猿ヶ辻のサルだからこそ岩倉具視を熟知していないともいえる。なぜかという点、岩倉家の屋敷は公家町の東南の隅にあり、猿ヶ辻の背後だから、サルには岩倉具視の日常がぜんぜんみえない。

サルが「岩倉具視って、なにもの？」と木ノ内にたずねたのは、この政局に登場するほどネームヴァリユーのある公家なのか、といった意味である。

岩倉具視は堀河家に生まれ、岩倉具慶の養子になった。右近衛権少将だから官は低いが、公家社会の底辺を這いまわって独自の人脈をきずいている。

「そのうえに……」

「うえに？」

「姉の堀河紀子は女官でナイシノジヨウ、字に書けば掌侍、当今の寵愛をうけ、皇女寿万宮（すまのみや）を産んだばかり」

サルは指を折って、

「当今の第一皇女は准后が産んだ順子内親王だが、これはサチノミヤ皇子の誕生のまえに亡くなった。第二皇女がおなじく准後の御子の富貴宮、第三皇女が堀河紀子の子の寿万宮」

寵姫の弟、皇女の叔父の岩倉具視に和宮の降嫁について相談をもちかけるとは、岩倉にたいする天皇の信頼の異常な高さがしめされている。

「岩倉は主上に、なんとお答えしたのかな？」

「幕府に条約破棄を誓約させ、そのうえで和宮の降嫁をゆるすべきである、と」

「朝廷よりは幕府のために、所司代の意をうけて主上を説得しようというのではないかな、岩倉は？」

「即断はできないが、朝廷の権威を幕府の上におしあげるには和宮降嫁が有効な手段と計算しているようだ。岩倉の奏上には『武力で幕府を凌駕なせることをかんがえてはなりません』といった意味の文言がある、後鳥羽上皇の鎌倉幕府打倒の失敗、後醍醐天皇の室町幕府打倒失敗の前例を主上に思い出していただこうというわけだろ
う」

「歴史にまなぶ……か」

「酒井忠義の家来が橋本家をたずねたとき、岩倉が同席していたうわさがある」

「うわさ……か」

「岩倉についてのうわさはほとんど真実に近いとかんがえたほうがいい」

「岩倉はつまり、策士……？」

「地位の低い公家が頭をもたげるには策士の途をすすむしかない」

「で、主上は？」

「和宮降嫁は幕府の威勢をくじく効果があるとおかんがえになったらしい」

「それほど和宮が欲しければ、そちらが条約を破棄すればいい、ことは簡単ではないかと」

幕府は「天子のお望みに添うべく、条約破棄の方向にふみきりますから、はやくご降嫁を……」と請け負ったが、条約破棄の具体策は示さない。本気で条約を破棄するつもりではないから。

ゴタゴタがくりかえされ、ようやく天皇が降嫁勅許を表明、これで一件落着かとおもわれたのも束の間、和宮が拒絶を表明、コトは振り出しにもどった。同母ならともかく、異母の妹であってみれば天皇としても無理強いはいできない。

議奏筆頭格の久我建通は、あきらめない。寿万宮を和宮の代役とする案をたてたうえで、天皇にたいし、「寿万宮を代役にたてる案があるが、それでもなお、あなたは江戸への降嫁を承知しないのか」と、和宮に最後の説得をこころみるべきですと上奏した。

「上奏というが、おそれおおくも、それは脅迫ではないか……だが、こうまでいわれて、和宮さまはイヤとはいえないところに追いこまれたな」

八月十五日、和宮は天皇にたいし、きびしい条件をつけたうえで江戸降嫁を承知した。

① 明後年、先帝（和宮の父、仁孝天皇）の十七回忌法要をすませてから江戸に下向する。なおまた、今後の先帝の法要のたびに天皇のご機嫌うかがいを兼ねて帰京する。

② 江戸城大奥における日常の身边は御所の風儀をまもる。

③ 御所の女官を一名、御側付下級の女官を三名随従させる。

④ 御用のさいは橋本実麗を江戸に下向させる。

⑤ 御用のさいは上臈または年寄を江戸に下向させる。

「明後年といえば千日も先、幕府が承知するかな？」

「するはずがない。だから、また、もめる」

「仕方がないから、ナカをとって……」

「ナカって、なに？」

「いますぐと、明後年とを足して、二で割る」

「アホな！」

「アホだが、現実的ではある」

来年の三月に入興ときまり、所司代酒井忠義、高家横瀬貞固が桂宮邸に参殿して納采の礼をおこなった。

「しばらく中山忠能の名が出ないが、この時点で、かれの境遇および心境はどういう具合になっている？」

「忠能は御縁組御用掛になった。同役は橋本実麗、野宮定功など。

そして忠能・実麗・広橋光成・坊城俊克・岩倉具視・千種有文などは関東入興扈從を命じられた。実麗は和宮の伯父だから別格として、扈從の筆頭格は忠能ということになる」

「忠能が江戸へゆく！」

「わたくし木ノ内民夫は、というべきか、かれ中山忠能は、というべきか、緊張と興奮で唇をキリリとひきしめた。次男の正親町公董に書をおくり、留守のあいだの中山家の家事をとりしまってくれと依頼した」

「家族の安全をよろしく頼む、というわけだな」

「家族のうちで存在が最も重いのは……」

木ノ内とサル、声をあわせて、

「皇子サチノミヤさま！」

そして木ノ内は「盗み読みされるおそれがある、忠能はサチノミヤさまの名は書かなかったよ」と付け足した。

——江戸ゆきにはわれの安危がかかっている。

トラブルに巻きこまれて罰をうけるか、わるくすると暗殺される

かもしれないとさえ、忠能はかんがえている。

そうなるのが恐ろしければ、御縁組御用掛も降嫁下向扈從役も、辞退すればよかった。辞退が不可能ではなかったが、忠能は敢えて、うけた。

なぜか？

——こうしなければ、われは愛親さまに肩をならべられない。

寛政の典仁親王尊号一件で、先祖の中山愛親が奮戦、しかし敗北し、江戸に呼ばれて閉門の罰をうけた。天皇の名で処罰されるならともかく、公家の中山愛親が武家の頭領の命令で処罰された屈辱、不名誉はとりかえしがつかない。

愛親の代にはとりかえしがつかなかったから、末裔の自分が奮闘して先祖の不名誉をそそがねばならない。

そのために、なにが必要かというところ、とりあえずは愛親と同等の地位にのぼるか、同等の役目をあたえられるか、ふたつにひとつしかない。だから、御縁組世話掛も江戸下向扈從の役も恐怖のこころを抑えておうけした。

先祖の不名誉をそそぐチャンスを得たのはまちがいないが、敵の巢窟の江戸に、中山忠能は裸の姿をさらすことになった。

「嬉しいが、嬉しいこころを公家の仲間にもせるには躊躇するものがある。だから忠能は……」

「嬉しいけれど、嬉しくない様子してみせなければならぬ……」

「アア、アア、お公家さまというものは手間がかかるものだなア！」

「和宮さまは皇妹だが、名目は皇女……」

いつもとはちがう木ノ内の早口が、サルには咄嗟にはきこえない。

「ええッ……？」

「和宮さまの正体は皇妹だが、江戸降嫁の名目は皇女……つまり忠能は和宮の父親代わりということになる」

「ふーん。そうではないとはいきれないが、言い過ぎでないとも
いえない」

いったあと、サルはわれながら自信がないといった顔で、
「忠能はサチノミヤの外祖父であって、そのうえに、和宮さまの父
親代わりでもある、そのところを強調したいんでしょう、木ノ内
さん？」

自分で言い足りないところを、よくもまあ分かりやすい言葉でお
ぎなってくれたものだ、木ノ内は称賛と感謝の表情をサルに返し
た。

「もうすこしいえば……」

木ノ内は調子に乗って、

「もはや自分は曾祖父の愛親と対等、いや、一段上の地位に登った、
これが忠能の現時点での自己評価であるといいたかった」

「同感！」

サルの言葉には 戦闘開始！、挑戦！ の気分がこめられて
いる。

- 158 -

サチノミヤは順調に齢をかさねている。

祖父で御世話卿の中山忠能が御殿にうかがったときに直筆の書を
賜った。古歌一首が書かれていたが、ひとつの誤記もない。書面の
あちこちに「中山」の二字が書きちらしてあったのを忘れてならん
とおもい、帰宅してすぐに日記に記した。

「お誕生から五年あまり、専心一意、傳育に奉仕してまいった微衷
はおのずから御心に感通するものがあつたのか。今日の感動、忘れ
るものか！」

皇子の生母の典侍中山慶子はこのところ病いの気味がつづき、辞
職を願い、ゆるされてサチノミヤづきの上臈格、新宰相の名と百二
十石の知行蔵米をうけることとなった。

八月にはいつて二日、准后が産んだ皇女の富貴宮が亡くなった、

わずかに二歳。サチノミヤは新宰相中山慶子を同乗させて御世話卿中山忠能の邸にうつり、四日に宮中にもどった。

万延元年七月十日、サチノミヤは儲君、つまり皇太子に、そして准后夙子の実子とさだまり、この日から准后御殿に起伏する、宮中席次は准後の次ときまった。

九月二十八日、サチノミヤに親王宣下があり、天皇から「睦仁（むつひと）」の諱が贈られた。今日からはサチノミヤ睦仁親王である。

猿ヶ辻のサルは不審顔で、

「九条関白ひとりが大いに得をしたような状況だが……」

「得？」

「睦仁親王が准后夙子の実子なら、九条は親王の実の祖父ということになるじゃないか」

サルの追究に木ノ内民夫はタジタジとなるが、辛うじて精神の立て直しをはかり、

「准後は皇族だが、関白は皇族ではない、あくまでも臣下の身分。」

親王が娘の実子になったからといって、皇族ではない関白まで関係は及ばない……のだらうな。富貴宮を失った准後は宮中における立場が弱くなった、それを補う処置として睦仁親王を実子にしたとみれば、あんたのいうのとは反対に、天皇と中山忠能は九条関白に恩を売ったことになりはしないか」

それが理屈かと、猿ヶ辻のサルは納得顔。

「大変です！」

「木ノ内さんが大変というからには、大変の中身がなんであるか、予想するのは簡単」

「まさか？」

「和宮の降嫁について、またまた故障が生じたとか、そんなことでしょうか？」

緊張が解かれ、ガックリと肩をおとす木ノ内民夫の姿が中山邸の

門扉の内側にみえる。

納采の礼がおこなわれてまもなく、孝明天皇は和宮の降嫁を破談にする固い決意を表明した。幕府がプロシヤ、スイス、ベルギーの三国と新しく通商条約を締結したと上奏し、天皇を激怒させたからだ。

すでにアメリカ、フランス、イギリス、オランダ、ロシアの五カ国と通商条約をむすんだ以上、プロシヤなど三カ国との条約締結を拒否する理由はない——これが幕府の言い分だが、アメリカなど五カ国との条約締結を破棄するとの誓約を信じて——信じたことにして——和宮の降嫁を承知した天皇としては幕府にあざむかれた結果になった。

所司代の酒井忠義は、天皇の怒りに油をそそぐ答弁を展開した。和宮降嫁がきまり、公武の融和が実現したいまとなって条約のことを云々なさるのであれば諸外国の怒りをまねき、戦争になるのは必定、そうならぬように是非とも和宮降嫁を実施なさるべきです、と。

「御縁組世話掛の中山忠能は、どうした？」

「降嫁を実施すべきですと天皇をなだめ、説得する態度をとった」

「ほかの議奏は？」

「久我建通や正親町三条実愛は曖昧ではあったが、中山に反対することはなかった」

「中山が議奏一同を牛耳った、こういっていいわけですか？」

「そのとおりです」

天皇は幕府の望みのとおり、和宮の降嫁を実施するときめた。

万延二年二月十九日に改元され、万延二年は文久元年となった。

四月十九日、和宮に内親王の宣下があり、名を親子（ちかこ）とした。前年九月にはサチノミヤが親王睦仁になり、こんどは和宮が内親王親子になった。

中山忠能は親子内親王の勅別当に任命された。すでに忠能は関東

御縁組世話掛の筆頭に任命されている、内親王宣下にともなつて勅別当になつたのは順送りの人事、おおげさにいうべきことでもないが、忠能が宮中の深いところに一步、また一步と歩をすすめているのはまちがいない。

和宮の内親王宣下から半月あとの五月一日、堀河紀子が産んだ寿万宮がわずか三歳で亡くなった。

それから五ヶ月後、十月八日に堀河紀子が皇女を産んだ。皇女の幼名は理宮（ただのみや）ときまつた。

「なんというか、その理宮皇女の前途にも暗い雲がたちこめているような……」

「因縁、ですか」

サルが案じたように、文久二年八月、理宮は一年にも満たずに生涯を閉じてしまう。

「結局、睦仁親王は当今のただひとりの皇子ということに……」

「この先、皇子皇女が誕生なさらぬときまつたわけではないが」

「これもなにかの因縁」

親子内親王は江戸にゆき、將軍家茂の夫人になった。

親子内親王供奉役の筆頭、中山忠能は無事に帰京し、木ノ内民夫になつて中山邸の門扉の内側に爪先立ち、猿ヶ辻のサルと三月ぶりの交信を交わす。

「わたくし中山忠能が、いや、木ノ内民夫といったほうが正しいのかな、文久元年十月二十日、親子内親王を奉じて降嫁下向の途にのぼつたのは……」

「晴れ姿、観ていましたよ。猿ヶ辻の金網のいちばん西の端に身をよせて……いささか窮屈なんですが……ななめ下をみると、桂宮御所をお出になつた親子内親王のお輿がみえました。供奉役筆頭のあなたのほかには今出川実順、千種有文、岩倉具視……ああ、そうだ、岩倉は去年の暮れに侍従兼近習から右近衛権少将に昇進したのでした」

「途方もない、とまではいえませんが、異例の昇格人事ではありましたが」

「あのときの中山忠能、怒り心頭に発す、の状態でしたか？」

「人事のことは主上の思いのままとされています。臣下が怒ってもどうにもならない、これが忠能の心境でありましたよ」

「忠能もあなたも、いやに達観されていたのですな」

「他人の異例の昇格を否定すれば、いざ自分がチャンスがまわってきたときに……」

「そうかッ！ せっかく自分にちかづいたチャンスを自分で遠ざける結果になるかもしれない」

人事問題にかんするかぎり、公家は相身互い は真理なのである。

サルがつづける。

「あなたが桂御所をお出になったとき、睦仁親王が猿ヶ辻の穴門（あなもん）の御覽所にお立ちになり、見送られていたのをご存じでしたかな？」

「エエツ、親王さまが、穴門で？」

「わたしの足元だからほとんどみえないが、ザワザワとした雰囲気、これは親王さまがお見送りだとわかったのです」

「とんでもない無礼をしたものだ、わたくしとしたことが。知らずに江戸まで行ってしまったとは！」

「そこで木ノ内さん」

「はあ？」

サルに意表を衝かれ、木ノ内は当惑顔。

「穴門御覽所における親王のお見送りを、中山忠能が気づかなかつたのはなぜか、木ノ内民夫として疑問におもったことはありませんか？」

御所の塀を削りぬいてつくった小門、これが穴門。いわば通用門だから屋根も柱もなく、ヒトの背丈よりちょっとだけ高い、要するに穴みたいな門。朔平門とか建礼門といった固有の名もついていな

い。

天皇が穴門から出入りすることはないが、皇族の非公式の出入りには穴門を出入りするものがふつうだ。御霊神社の御輿が公家町に練りこんで穴門の外を通過するときに、皇族が穴門の内側の御覽所に立って御輿に敬礼をささげることもあった。サチノミヤも穴門で何度か、御霊神社の御輿を観たことがある。

親子内親王は四月十五日に参内し、天皇主催の送別の宴の客となった。睦仁親王は十五日の内裏の宴に出席し、なおまた二十日には猿ヶ辻ちかくの穴門の御覽所に立って親子内親王の江戸下向行列を見送った。十五日は皇族の一員として、二十日には儲君として独立の立場で親子内親王を見送った。

ごくごくふつうの常識だから、中山忠能が知らないはずはない。それなのに、忠能本人は「知らなかった」と木ノ内民夫を通じてサルに告白した。

「ねえ、木ノ内さん、なぜだとおもいます？」

「うーん。ちょっと待ってください」

そういつて木ノ内は目をつぶり、木ノ内民夫から中山忠能へ意識主体の移動をやっている。

「わかった！」

「太田黒俊一さんが このヒト と見込んだ木ノ内さん、わからんはずがない。さすが！」

即座の回答は自分の威厳を落とすとても計算したのか、一瞬おいて木ノ内民夫、中山邸の空にむかい、

「曾祖父中山愛親よ、あなたの曾孫の忠能は、いまぞこれから武蔵の江戸に乗りこみますぞ、御覽あれ！」

「できた！」

サルは猿ヶ辻の金網の奥で、御幣を揮って木ノ内を称賛した。

(第8章・終)

第9章 「今宵も浅葱の幕の筒」

親子内親王は江戸へ嫁いだ。

中山忠能は降嫁世話掛筆頭として江戸へゆき、しばらくは江戸に滞在する。

木ノ内民夫は中山忠能の中身として江戸に出張、忠能の思考と行動の追体験をする。

猿ヶ辻のサルはひとりぼっち、猿ヶ辻の金網の奥で木ノ内の帰京を待つが、なんとも手持ち無沙汰の日々。

やることがない、かんがえることがない——サルも人間もこの状況に追いこまれると焦ってしまう。世のなか、自分だけが無価値な存在であるかのように感じるからだ。

なおわるいことに、この世の中、無価値なサルも人間も現実として存在している。稀有ではなく、むしろ多数の無価値のサルや人間が。だから、「あんたは無価値じゃないよ」と激励してやっても、逆効果になるケースがすくなくない。そうかといって、距離をあけ、冷静にみていると、「冷たいやつめ！」と恨まれる、世の中、むずかしい。

ちよつとだけでいいんだ、江戸城の様子を手紙に書いて知らせてくれてもよさそうなもの——木ノ内を恨む気分になりかかったとき、「もう待つてはいられない！」

ようやく木ノ内が帰京したとおもったのは錯覚だが、声の主が姉小路公知とわかるに時間はかからない。

「あれー、公知さん！」
「いつまで待たせるのか、われは、もう飽きたよ！」

この場合、「あなたの出番じゃありません」とは、いえない。公知はまちがいなくこの物語の主人公のひとりだから。

「そろそろ出ていただこうかと、木ノ内民夫とも話していただきますよ」と、公知さんは木ノ内民夫をご存じ……ですよ、ね」

公知を呼ぶのに「さん」をつけ、木ノ内民夫は身内あつかいで敬

称をつけない。この相違の意味が公知に知られるとまずいことになるが、さいわいにも、公知は気づかない、若いからだ。

「知ってるよ。先斗町の竹澤で太田黒俊一といっしょに酒を呑んだ平成の世に生きる木ノ内民夫であり、そしてまた寛政の世の中山愛親の生涯の追体験をやり、幕末の……ということはずまり現代の……中山忠能の生涯を追体験する木ノ内民夫、忙しいひとだね、あのひとは」

姉小路は、木ノ内民夫を忙しい境遇に押し込んだのがサルだと知っている。忙しくない姉小路が忙しい木ノ内の境遇を羨望しているのがあきらかだ。

「われ、すなわち右近衛権少将姉路公知は文久三年五月二十日の夜、あと五十歩ほど歩けばわが屋敷にもどれたはずのところを、あんたの守備責任地点の猿ヶ辻のちかくで殺される」

「お気の毒に……」

「殺されるについては恨みもないんだが、わたしに刃を突き刺したのがだれか、いまもって不明のままであるについてはいささか関心がある。そこへもってきて、あんたが、あのー、そのー、猿ヶ辻のサルさんが、われ、つまり姉小路公知はほかのだれかとまちがえられて殺されたのではないかと疑問を発し、疑問を一步すすめて、まちがえられたのは中山権大納言ではなからうかと見当をつけたときいて、こりゃ面白いなアと……」

それから、あれこれとしゃべって、

「そろそろ出番だと待っていたのに、なかなか呼びがかからない。待ちくたびれたのさ」

天保十年うまれの姉小路、親子内親王が江戸へ下向した文久元年には二十四歳、結婚の式がおこなわれた二年には二十五歳、若いだけに言葉づかいがいまふうだ。

「われが殺されるのは文久三年五月、いまは二年の三月、そろそろ準備にかからなければ、間に合わない」

「間に合わない……なんの間に合わない？」

「だが、われを殺すのか？ われを殺すその者は、われをわれと知って殺すのか、ほかのだれかとまちがえて殺すのか？ その相違を認識し、区別すべきところは区別し、重なるべきことは重なる作業の準備にかならなければならぬ。のんびりしているひまはない」

公知はテキパキしている。

物の言い方、表情の操作、起居、腕の振り方、脚の運び、すべてがテキパキしている。

木ノ内をノンビリタイプときめつけるわけではないが、姉小路とくらべて差があるのは否定できない。

そこで、猿ヶ辻のサルは、自分が苦境に追いこまれつつあるのを自覚する。

「ねエ、サルさん。あの木ノ内民夫っていうひと、悪いひとじゃないのはわかるけれど、いつもゆっくりしてばかり、あれで……」

公知が口をつぐんだ部分に あの一とに事の真相を解析する能力があるんですかね？ の疑念が満ちているのはあきらかだ。

まあ、これ自体はサルが責任を問われるべきものではないが、もうすこし深刻になると、「ねえ、サルさん。あの一とには退場してもらい、われらふたりで真相解明に邁進しようではありませんか」の誘いがきて、サルが当惑するにきまっている。

友情優先か、効率優先か？

姉小路公知が「はやく舞台に出してくれ！」と迫ってきましたよと、サルから木ノ内民夫に通知した。

木ノ内からの返答がない。あっさり、そしてスピーディ、これが木ノ内民夫の長所なのに、どうしたんだろうと案じていたら、ようやく返答がきて、それが、なんとというか、いつもの木ノ内とはちがう消極的なものだから、サルは不安になり、「木ノ内さん、からだの具合でも、わるいんじゃないですか？」と問いわあせると、「からだも、こころも、調子がわるいんだ」との返答だから、サルの不

安は二重になった。

二重のままならいいが、二重から三重、三重から四重、四重から五重と不安が加重するのは目にみえている、しばらく放っておこうと悲壮な決断をくだしたら、こんどはすぐに反応があった。

「中山忠能または木ノ内民夫、ユウウツ状況におちてしまって、いまだに脱出できない」

「忠能のユウウツの原因、あるいは理由について木ノ内さんの推測は……？」

「わからないんだ、ぼくには。だから、ぼくのからだもこころも調子がわるい」

「わからないはず、ないでしょう！」

「そんな、無茶な！」

「ひとことだとおもうから、わからないんだ」

「だって、ひとこと……あ、そうか、忠能の生涯を追体験するのがぼくの役目だから、忠能は他人ではない。いやいや、他人ではあるが自分自身でもある、こういうわけだから、忠能のユウウツの原因はわかるはず、そういう状況ですよ、ね」

「そのとおり！」

「おしえてくれて、ありがとう」

あっさり、そしてスピーディの木ノ内民夫にもどった民夫から、追いかけるように素早く、

「岩倉具視に対する嫉妬、あるいは嫉妬に根ざした恐怖、それが忠能のユウウツの原因……推測にすぎないんだが、まちがいはないとおもう」

「中山が岩倉を嫉妬する？ 嫉妬に根ざした恐怖感？」

「おおむね、そういうこと」

「そんなこと、あるものか！」

サルは木ノ内の言い分を真っ向から否定する。否定の根拠は中山と岩倉の格の相違だ。

「嫉妬、恐怖の感情は下位のものが上位に対して抱くものだ。中山

は上位、岩倉は下位。上位の中山が下位の岩倉を嫉妬し、恐れるなんて、精神原理のうえからしてありえない！」

断言してから、サルは、木ノ内の言い方をささえている自信に気づいた。

「ひょっとして、なにか、あった？」

「あったですよ」と木ノ内がいい、サルがうけて、「それならそうと、早く教えてくれなくては」と愚痴った。「たぶん、あれですよ……」

簡単に前置きして木ノ内は文久元年十月二十一日、近江の天津で起った事件を語りだした。

「十月二十一日という……」

「親子内親王の一行が京都を発したのは二十日、その翌日の事件です」

十月二十一日の早朝、中務権大輔の豊岡資健が勅使に任じられて京都を出発、夕方ちかくに近江の天津の岩倉具視の宿舎に到着した。

「岩倉具視と千種有文に御用である！」

意外の時刻、意外の勅使の到着だから天津の駅は緊張した。

関東御縁組世話掛の筆頭、そして内親王の勅別当は中山忠能だが、豊岡が勅使に任命されて内親王ご一行の跡を追いかけるなんて、忠能は知らされていない。

ならば、内親王が京都を発ったあとで勅使の件がきまったのかといえば、そうではないはずだ。天津の駅で勅使をむかえた岩倉は驚くふうもなく、冷静に対応した。ということは、すくなくとも岩倉と千種のふたりには、京都において、勅使追走の件があらかじめ知らされていたにちがいない。

豊岡資健は岩倉と千種に、つぎの二件を幕府老中に伝達せよと命じる天皇の勅意をつたえた。

①安政大獄で罰をうけた鷹司政通・鷹司輔熙・近衛忠熙などを複飾させ、宮廷に出仕できるように処置せよ。

② 酒井忠義がひきつづき京都所司代として勤務するように処置せよ。

岩倉と千種は「身命をなげうって勅意実現につとめます」と誓った。

「岩倉と千種が感激、感動したのは当然として、主上はなぜ、世話掛筆頭の中山に勅命を与えなかったのか。主上みずから上下の秩序を乱したものと解釈されても仕方がない」

「主上から世話掛筆頭の中山に勅命をくだすのは尋常すぎて意外性に乏しく、勅命が重大である所以（ゆえん）を幕府老中の胸に突き刺す効果が薄い、このように考慮されたのではないだろうか」

「意外性が薄い……モダンな言い方をなさいますな、木ノ内民夫さん」

「この場合、意外性という表現にこだわるのが効果満点だとおもいます。尋常のやりかたでは幕府の幹部の肝っ玉をヒンヤリさせられない」

「肝っ玉をヒンヤリ……なるほど。その、意外性に目をつけたのは、だれなんだろう？」

「主上ご自身ですよ」

木ノ内があっさりといつてのけたのが、サルを驚かせた。

「安政大獄の犠牲者の、大物のなかの大物の鷹司や近衛を無罪にして宮廷に出仕させるなんていう、重大このうえない勅意をつたえるべき公的な適任者はいうまでもなく中山です。だが、それでは勅意に重みをつけられない。これまで何度もやってきて、一度も実らなかつたやりかただから、幕府の重役が問題にしない、ああ、またか で終り、そうでしょう？」

「老獪な幕府重役が目をむくほど新鮮、かつ意外なやりかたならば効果がある、主上はこのように計算した……うーむ、無視できない解釈だな！」

「主上が驚かせようとした相手は幕府役人だけではないと、こうい

えばサルさん、ほかにだれを連想しますか」

「幕府役人のほかといえ、お公家さん、こういうわけになるけれども……」

渋々ながらのサルの同意を莞爾として胸におさめ、木ノ内は決定打を放った。

「主上はね、サルさん、これまでどおりの生ぬるいやりかたしかやらないお公家さんの頭上をジャンプして、まったく新しいやりかたで幕府の胸にお手を突っこもうとなさったのです！」

「ジャンプ……？」

「文久元年のころの標準言語にもどせば、飛越または跳躍、義経の八艘飛び」

「義経までひっぱりだすのはゆきすぎですよ」

そういうものかもしれないが、しかし、もうひとつ認めがたいものがあるなど疑惑の表情のサルを、木ノ内民夫が追撃する。

「主上は強気になられた、自信を持たれた、こういうことじゃないか。親子内親王の江戸降嫁の件は幕府や九条閑白の主導ですすみ、主上はただ『諾』か『否』か、ふたつにひとつの返答をするしか手がなかったかのようにいわれていますが、じつは、そうではない。幕府の降嫁申し入れから降嫁決定にいたる要所々々のすべては主上のご意志のままになったのです」

「そうか、なア？」

「そうなんですよ。あのね、いいですか、内親王さまの降嫁をいちばん強く望んだのはだれか？ さあ、だれですか？」

「わたしを詰問するほど木ノ内さんは自信がある。ならば、内親王さまの降嫁をいちばん強く望んだのは主上ということに……」
「なるでしょう。ほかに、ありえない」

摂政にも閑白にも、親子内親王の江戸降嫁の件は任せない。かたちのおうえでは降嫁世話掛の筆頭を中山忠能に任せはしたが、あくまでもかたちだけ、肝腎なところはみずから決定し、みずから実現す

る——これが孝明天皇の決意であったのを、大津の駅で中山忠能は知った。

知るの辛いことであつたが、そもそもは中山を相手にするはずのない勅使の豊岡資健をつかまえて、「ならば、内親王降嫁のすべでは世話掛筆頭の中山権大納言に一任するとおおせられたのは、ギ……」などといえるものではない。

口には「ギ」まで出したが、その先はいえない。あとにつづくはずだったのは「マン」の二音であつた、漢字にすれば「欺瞞」である。

そもそも孝明天皇自身には「欺瞞」の意識はない。だから、忠能が決死の想いで「主上よ、あなたの遣方は欺瞞でございます！」と難じたとしても天皇には通じない。

「あのとときから、わたし、木ノ内民夫は、中山忠能の生涯の追体験者よりは、忠能のからだのなかにあつて忠能を観察する、第三者に近い立場を意識するようになりました。太田黒さんとの約束に背くかもしれないが、わたしの感情に率直であるうとするなら、ほかに方法はないのです」

サルは無言、「あとひとこと、言い足りないものがあるんですけど」と、民夫をそそのかしているふうにも感じられる。

「主上にとって、親子内親王さまの降嫁の意味が軽くなった、このようにわたしはかんがえます」

「軽く……？」

「それほどまでに内親王が欲しいのであれば、いいよ、呉れてやるよ……そんな感じ」

「呉れてやる……庶民の嫁取り、嫁入りばなしでつかわれる言い方だな」

「さよう、まさに庶民レベルの感覚。こうすることで主上は中山忠能にたいし、言外に通告しているのです……内親王の降嫁は軽い、だから、降嫁世話掛筆頭のおまえも軽い存在なんだよ、と」

「降嫁は軽い、中山忠能の存在も軽い……」

木ノ内民夫の顔を凝視しながら、サルは口のなかでくりかえし、
「中山忠能は祐宮睦仁親王の外戚、忠能の存在を軽くするのは睦仁親王の境遇または身边を不安、脆弱なものにするおそれがある。それをご存じなさらぬ主上ではない、だから主上がそんなことをするはずはない——理屈のうえでは、こうなるんだが」
「いや、主上は事情を明察なされている。ご明察のうえで、決せられた」

「わざと、あえて……？」

「わざと、あえて……」

「睦仁親王が孤独になってしまいかもしれぬというのに……？」

「中山忠能を退けることで、忠能よりも強力な親王保護者が登場するルートがひらかれるとすれば、どうです？」

「それは、いつたい、だれ？」

グイツと身を寄せてきたサルに、木ノ内民夫があっさりとこたえる。
「岩倉具視！」

「岩倉具視！」

岩倉具視の妹の堀河紀子は孝明天皇の後宮にはいり、寿万宮と理宮、ふたりの皇女を産んだが、寿万宮は文久元年五月、理宮は二年八月に亡くなる。准皇の九条夙子が産んだ富貴宮はそれよりも早い安政六年八月に亡くなったから、孝明天皇の皇子皇女は祐宮睦仁親王しかない。

「堀河紀子が第三番目の皇子皇女を妊娠した気配がみえた、とでも？」

「いやいや、そんな複雑なはない。事態は、サルさんがかかんがえるよりはもっと単純、岩倉がサチノミヤ睦仁親王の保護者として主上のまえに名のりをあげた、そういうことだろうと推察されます」

「しかし、サチノミヤさまの保護者なら、ずっと以前から外戚の中山忠能が頑張っている、岩倉が顔を出す場はないはずだが……」

それがそうでもない、と木ノ内はさえぎり、

「天皇と藤原氏の関係には二本の柱がある。一本は藤原氏が外戚として皇室に介入、牛耳る柱、もう一本は天皇が外戚藤原氏の介入に反発する柱。当今はあとの柱に乗り換える決心をなされた。ああ、あなたは中山家が藤原氏であるのをご存じのはず」

「いいかえれば、中山から岩倉に乗り換えた……そうかッ、岩倉は妹の紀子が第三の皇子皇女を産むのを待つよりは、睦仁親王の保護者になる決意をきめたわけだ。睦仁親王はすでに十二歳、岩倉が新しい天皇の保護者になる日は確実に近づいている」

「大津の駅で、岩倉にたいする主上の格別の勅意を知ったとき、中山忠能の様子は如何でしたか？」

「自分の人格が崩壊しないようにと、それだけにすがって耐えていた。忠能の生涯を追体験するのが役目のわたくしではあるが、これほどの苦悩を追体験するのは耐えられないと、辛い想いを強いられました」

江戸――

親子内親王と徳川家茂の婚儀の行事がすすむなか、岩倉は幕府老中との異例の会談に臨む。

「幕府は、おそれおおくも、内親王さまを名目は將軍夫人、内実は人質として主上に退位を迫るとのうわさがある。老中は、このこと、如何に弁明するのか？」

勅諭をふりかざして追及する岩倉に、老中久世広周と安藤信正は反論はおるか、弁明の機会さえあたえられない。岩倉の強弁の、ほんのわずかの隙に食いついて、

「さようなこと、あるはずもなく……」

弱音を吐くかのごとき弁明をするのが精一杯だ。

「ない、ともうすのですな！」

「毛ほども」

「ないともうすのに偽りなければ、主上のお怒りをはらしたてまつ

る道がないでもない」

誘うかのごとき、導くかのような言を吐き、

「その道を……！」

是非とも指示ねがいたいと相手が誘いに乗ったのを確認して、

「将軍が京都の義父さまにたいしたてまつり、『廢帝の企みなど毛頭もございませぬ』と書いた自筆の誓約書を提出いたすならば、あるいは」

京都の義父さまとは、家茂の夫人となったばかりの親子内親王のかたちのうえの父、孝明天皇である。

將軍家茂の自筆誓約書ではなく、久世と安藤の誓約書のレベルにダウンしてもらおうと二老中はあれこれ策を弄したが、岩倉にへもなく拒否される。

「われら老中は將軍の身代わり、その老中二名の誓約書がご不満とは……」

「老中は更迭される、よって老中の誓約書は信頼するに足りぬ！」

「神祖家康以来、將軍が主上に自筆誓約書をたてまつった前例はございませぬが……」

「おイヤなら、おやめになればよろしい」

久世と安藤は屈伏した。

年の瀬、岩倉と千種が帰京の挨拶に登城すると、十二月十三日づけの徳川家茂自筆の誓約書が渡された。

「先年来、容易ならざる譏説（さんせつ）が主上のお耳にはいり、そのうえ、このたびは御讓位など、かさねての内勅が下されたのと、老中どもより承り、驚愕しております。家茂をはじめ諸臣にいたるまでそのようなことは心底にこれなきゆえ、ご安心なされたく候。委細は老中から岩倉・千種両卿へ申し入れます」

誓約書とはいっても、実態は將軍自筆の謝罪文である。岩倉は將軍自筆の謝罪文をちからづくでもぎとった。久世と安藤、そのほかの四老中もそれぞれ誓書を奉呈した。

岩倉は十二月二十四日に帰京したが、実母の勸修寺淑子が亡くな

った直後とあつて参朝せず、つぎの年の二月まで服喪する。

徳川家茂の誓約書を天皇に呈上したのは千種有文である。誓約書を手にした孝明天皇は、「字の勢いが弱く、字の形も不揃い、まぢがいなく家茂の自筆」と満面に笑みをうかべた。

中山忠能の帰京は十二月二十六日だが、十月二十日の江戸下向のときの姿にくらべれば、同人とはもおえない威勢凋落であつた。

「大丈夫ですか、大納言さま、お気をしっかりお持ちになつて——こんなふう呼びかけて元気にもどつていただこうかと計画したこともあるのですが、これ、許されないうすよね、わたくし、木ノ内民夫は中山忠能にたいして客観的にはなれないんだから」

「非常時の概念を導入すればまったく不可能でもないが、まあ、非常時を想定してかかるのは最後の最後として……」

二三日、いや、四五日してか、日暮れ、木ノ内から猿ヶ辻に——
「会話の姿勢をとつて！」と性急な通告があつた。サルが金網の奥から中山邸の門に視線をあてると、西山に落ちゆく陽光をあび、門の内側に何気ないふうで立つ木ノ内がみえる。

「大納言の顔色に、わずかずつですが、朱色が濃くなつてきました。やる気をとりもどしつとあると判定してよろしいようです」

「そりゃよかつた！ 木ノ内さん、なにか手を打つたの？」

「いや、わたくしはなにもしやつていない。中山大納言が自分で自分をコントロールした、明るいほうへ、積極的に」

「みごとなものだなア。ほんもののお公家つて、こういうひとをいうんだらうなア！」

中山忠能が積極性をとりもどしたいきさつを、すこしでいいから説明してくれないかとサルがいい、木ノ内が応じる。

中山は最初にコペルニクス的転回をこころみて、成功した。岩倉具視を警戒し、遠ざかるのではなく、反対に岩倉と提携し、自分で自分を岩倉の有力な味方の第一人者とする計画を立て、成功した。

ただいまの政権は九条尚忠の関白政権だが、中山忠能と岩倉具視

は九条閑白の政権をかたちだけのものとして棚上げし、ふたりの提携をより実質的な政権として成長させたい。そして——ここが肝腎なところ——孝明天皇よりもサチノミヤ睦仁親王の存在に重点を移すことで政権の前途を明るくしたい。

きっかけはなにかとのサルの問いに、木ノ内は「長州ですよ、長井雅楽（うた）の航海遠略策（こうかいえんりやくさく）」とこたえた。

岩倉具視が將軍家茂の天皇にたいする自筆誓約書をもぎとった、この一事が長州や薩摩の西南雄藩の朝廷観を一変させたのである。

——孝明天皇と臣下のお公家さんは、ひよっとするとなにか大変なことをやってのけるかもしれんぞ！

ぐずぐずしてはおれんと焦りでした。

長州藩直目付の長井雅楽が「航海遠略策」なる公武合体論を書きあげ、藩主の承認を得て上京し、議奏の正親町三条実愛に建議した。欧米諸国の一方的、攻撃的な貿易に任せるのではなく、日本からも積極的に貿易にのりだし、公海上で対等な取引をするならば屈辱的な貿易ではないというのが「航海遠略策」の眼目である。

天皇の攘夷論にたいしては「屈辱的ではありません」と弁護し、幕府の貿易推進論にたいしては「受けるのではなく攻めなさい」と激励する、両者双方の面目をたてようとする曖昧な論だが、そこが朝廷にも幕府にも歓迎され、長州は一躍して時代の先端をゆくかのような評判をとった。

だが、長州藩の下級藩士の尊攘派は長井を憎んだ。われらが攻撃的としている幕府や開国論者を救おうとする裏切者として長井糾弾の作戦をおこし、ついに切腹に追いこんだ。

中山忠能も岩倉具視も三条実愛の斡旋で長井に逢い、意見を交換したことがある。その長井が切腹させられたときいて、ふたりは身をすくめ、長井とも「航海遠略策」とも長州藩ともまったく無関係であるように身辺を装った。

ここで中山と岩倉の提携ができあがった。火中の栗を拾わない、

政局の焦点に背をむける一蓮托生のかたちの提携は堅く、エネルギーにあふれている。

「長州とは関係ないと身辺を装うのはいいが、そのままでは政治力を失ってしまう」

「幸運というべきか、長州に代わる勢力が朝廷に接近しようとしている」

「ああ、そうか、薩摩だ！」

島津斉彬は安政五年七月に鹿児島で急死したが、異母弟の久光(ひさみつ)が斉彬の政策をそっくりそのまま継承し、まずは京都で、そのつぎには江戸で政界に打って出る作戦をねりあげた。

薩摩藩主の座には久光の子の忠義がすわり、無位無官の久光が忠義の代行として政界に打って出る。

久光は政界ではまったく無名な存在であった。無位無官だから政界登場の手掛かりさえないが、藩士のうちの下級、少数過激派の強力な支持があった。西郷隆盛や大久保利通である。

西郷は安政大獄で罪に問われた京都清水寺の月照を護衛して鹿児島に逃げもどったが、身を隠すところがなく、ふたりして櫻島の海に投身した。月照は死んだが、西郷はたすけられ、奄美大島に流罪された。

西郷の留守のあいだの少数過激派は大久保利通がリーダーとなって久光と提携する途を模索し、成功した。久光は少数過激派を「精忠の士」と呼び、政界登場のエネルギーとして利用する作戦をたてた。

文久二年正月、江戸では親子内親王と徳川家茂の婚礼行事がつつくなか、鹿児島島の島津久光は大久保利通を上京させ、久光の拳兵上京計画を近衛忠房に披露させた。忠房の父の忠熙は井伊直弼によって謹慎させられている。

久光が五百騎の軍隊をひきいて上京、別に三百騎を京都守衛とし

て駐屯させ、さらにもう一隊の二百四十騎を小倉と下関に駐屯させる。

勅使を江戸にくだし、一橋慶喜を將軍後見、松平慶永を大老とすべきことを幕府に命令する。

雄藩に勅命をくだし、朝廷に忠義を尽くさせる。

関白九条尚忠を廢して近衛忠熙を関白とする。

安政大獄で隠居させられた青蓮院宮朝彦親王の幽閉を解除して朝議に出席させ、孝明天皇の親裁政治に協力させる——これが久光の拳兵上京策の大綱だ。

近衛忠房の反応は消極的だったが、ここで、岩倉が存在感を發揮する。久光の上京がちがづいた三月、久光の信頼あつた堀次郎が先駆として江戸から京都へはいると、岩倉から来訪をもとめられた。

岩倉邸へゆくと、大原重徳が同席して堀を歓迎した。堀が久光の拳兵上京計画をつたえると、岩倉と大原は手をうって悦んだ。「明日も来てほしい」と望まれ、翌日に行くと、

「昨日の件、内々に叡聞に達したところ、ことのほかに感悦なされ、そのうえ、『久光にたいし、忠節を尽くしてくれとあなた（堀）からつたえてほしい』との御内命であつた」

権少將の岩倉が天皇に内奏するのは容易ではない、ここには中山忠能の同意と協力があつたはずだ。

中山忠能・正親町三条実愛・岩倉具視の三人が孝明天皇の望みを實現すべく、久光の拳兵上京を歓迎する態勢がととのつた。

「中山忠能・岩倉具視、そして正親町三条実愛……三人の名がここに並ぶと、『さーて、役者が出揃つたぞ！』の感じになるんだが、この感じを、目にみえる、もののかたちにたとえていうと、どんなことになるかな？」

「両手で持て余すぐらいの大きな桃の実、そこからニューツと、斜めに、白い芽が突き出してきた、こんなふうにいえばいいんじゃないか。ありきたりではない、新しい政権のかたち」

「桃の実が孝明天皇、白い芽が新しいかたちの政権ということ？」

「島津久光を加えて四人の役者の揃い踏みとしてもいいわけですよ」
ひといきついで、木ノ内民夫が、

「田中河内介と息子の嵯摩介、中山家の諸太夫を辞職しましたよ」

「忠能は引き止めなかった？」

「お公家と諸太夫は主従よりは雇用の関係にちかいものです。諸太夫が辞めるといえば、引き止めるのはむずかしい」

「中山家を辞めて……そうか！」

「お察しのとおり」

久光が拳兵上京すると知って、京都や大阪にあつまっていた尊攘派の志士たちは奮いたった。

志士は京都でクーデターを起し、幕府に痛撃をあたえ、いや、できるならば幕府を打倒して天皇親政の途をひらこうとしていた。

久光の拳兵上京は公武合体策である。志士たちの武力革命方式とは相入れない、むしろ敵対する性質のものであったが、それは志士にはわからない。いや、わかっているかも知らぬふりをして突進しようとしたというのが正解だ。

——われらの主の久光は、われらのクーデターにちからを貸すために拳兵上京にふみきられた！

薩摩の志士は久光の名をつかってクーデターの主導権をとろうとする。はじめは信じなかった志士も、久光が兵をひきいて鹿児島を出たときけば、信じる。

一部は大坂に、一部は伏見の船宿「寺田屋」にあつまって、久光の到着をまちかまえた。

京都クーデターの計画が久光の耳にはいった。

久光は奄美流罪の西郷隆盛を釈放し、先発して伏見にゆき、志士たちを解散させよと命じた。

西郷は伏見についたが、もはや手遅れ、志士の熱気を冷やすのは不可能だった。

中山家諸太夫の田中河内介は息子の嵯摩介をつれて伏見にゆき、

寺田屋で久光の到着を待っていた。猿ヶ辻のサルが「そうか！」と
いったのが、これだ。

久光が伏見に着いた。

志士鎮撫に失敗した西郷を鹿児島に送り戻し、「沖永良部（おきのえらぶ）島に流罪にせよ」と内示した。薩摩藩で沖永良部流罪といえ
ば、「死んでもかまわぬ」ということだ。

そして久光は寺田屋に鎮撫の使者を派遣し、「抵抗すれば斬つて
よろしい」と内示した。

抵抗した志士は斬られた。

鎮撫令に伏した志士は逮捕され、鹿児島、あるいは出身の藩地に
還送された。田中河内介と嵯摩介は身を託す地がないので鹿児島還
送の途中、播磨灘で殺され、死体は海に投げすてられ、小豆島に漂
着した。

「河内介が中山家諸太夫のままであれば、忠能の政治生命は致命傷
をうつける。だからこそ河内介は辞職し、忠能に迷惑がかからぬよう
に配慮した」

「賢明、しかし、哀切」

伏見のクーデターを阻止したことで天皇に褒賞された久光は、四
月十六日に入京した。

久光がひきいる数百騎の薩摩兵が堺町門から九門をぬけて公家町
を北にすすみ、近衛邸をびっしりと囲んで守護し、そのなかで近衛
忠房と久光が膝詰め談判、中山忠能と正親町三条実愛の二議奏が同
席して、渋る忠房に圧力をかける。

「江戸に勅使を派遣し、幕府の政治を改革せよとの勅命をくだすべ
きです。勅使の護衛は、不肖島津久光にお任せあれ！」

天皇も近衛も、いまこのときに久光が江戸に行くのは不安におも
っている。伏見のクーデターを未然に阻止した久光である、これほ
どの武力をもつ久光だからこそ滞京して尊攘派志士の暴力から守つ

てほしい。

久光と朝廷のかけひきは数日つづいた。

島津久光の宮廷工作は成功した。

勅使の大役が大原重徳にきまり、勅使が幕府に示す勅諭の内容をどうするか、中山忠能・正親町三条実愛・岩倉具視に諮問された。

「これは文章にしなければならぬ……ですね、後日のためにも？」

サルが問い、木ノ内が「もちろん」とこたえる。

「だれですか、勅諭起草の大役に任じられるのは？」

「岩倉ですよ。中山や正親町は事態の切迫を認識してはいるが、事態が進んでいる方向というか、事態の姿というか、岩倉ほどには鮮明に認識してはいない。お公家としてのセンスの差、それです」

「または身分の軽重の差？」

「あ、そういうほうがわかりやすい。高貴な身分の機能が充分に発揮される場、それを求めて行動するのが中山や正親町なんですな。」

岩倉には、身分がない。お公家さんだから身分がないわけではないが、

中山や正親町とは比較にならない。そこで、勅意大綱を文章にする

のはだれが適任かとなると、ハイツと手をあげるのが岩倉です。中

山や正親町はこんな役は卑官がやるものだとおもっているから、岩

倉がまさに適任、争おうとはしない」

勅意は三ヶ条にまとめられた。

① 将軍が大小名をひきいて上洛し、国政を協議する。

② 豊太閤の前例に倣い、沿海の五大藩の主を五大老として国防策

を協議する。

③ 一橋慶喜を將軍後見、松平慶永を大老とする。

勅使の大原重徳は五月の末に江戸へ向かった。

島津久光は大軍をひきいて大原の護衛役をつとめた。

年賀の答礼使や日光例幣使のほかは、勅使の江戸下向の護衛は少

人数にかぎられ、小規模大名の参観交代にも劣る侘しいものだった

が、大原勅使の護衛は薩摩の大軍である。

江戸の役人は緊張して勅使をむかえ、応対したが、大原と久光の強硬姿勢には対抗できない。

幕府は屈した、岩倉がまとめた改革三大綱に従いますと声明せざるをえなかった。

(第9章・終)

「さーて、新しい章になった。いよいよ、われ、姉小路公知が暗殺される場面、そうだろ！」

おしつけがましい言い方に猿ヶ辻のサルはムーツとして、声が発せられたとおぼしきあたりに顔をむけ、抗議しようとして、ハツと気づいた。声の主におぼえないような気がする。

「だーれ、あんたは？」

「だーれって……そんなひどい言い方があっていいものじゃない。

文久三年の五月二十日、その猿ヶ辻で暗殺された姉小路公知を忘れてもらっては困るじゃないか。そもそも、この物語の第一の主役が、われ、すなわち姉小路公知なんだ」

「あ、そうだ。主役が姉小路公知であるのに異論はないが、その公知と猿ヶ辻警固の主任の金網のサル……つまりわたしだな……とのあいだに通信が可能であるはずがない。木ノ内民夫は存在そのものが曖昧で架空の人間だからサルとの通信は可能、お公家の中山忠能の生涯の追体験も可能だが、實在の人間、實在のお公家さんの公知さんとわたしのあいだの通信が可能であるはずはない」

「はずはないっていうけど、げんにこうやって通信しているじゃないか。だから、通信は可能なんだよ」

「そりゃ、まあ、リクツはそうなるが……」

「リクツなんか、あとまわし。事実を優先して認識し、事実に合わせてリクツをつくれればいいのさ」

「文久三年に暗殺された姉小路公知さんが、それから百五十年ぐらいあとの平成年間に、暗殺現場の猿ヶ辻のサルと通信している。この事実にあつち理屈はなにかといえば……ええと、生と死を区別しても意味がない……ということ？」

「それですよ、サルさん！」

姉小路公知……と自称する声……は快活、高音の声でサルを激励したかとおもうと、今度はいかにも感慨ぶかけに、

「われはねエ、サルさん、嬉しいんだ、このような晴れがましい舞台に出られて。感謝の言葉もないっていうのは、まさにいま、この瞬間のわれの気分ですよ！」

そういえば、とサルはおもう、そもそもは自分のほうから死んでいる公知に呼びかけ、あの世からお出でいただくべきところ、呼びかけないうちに、公知自身があらわれてくれた。もうしわけない想いがあるところへもってきて、「嬉しい」といわれると穴があればはいりたい気分だ。

「わたしは暗殺された……暗殺されるというのが正しいのかな……文久三年五月二十日がちがった。わたしには暗殺される理由はない。わたしを殺したのは犯人であり、わたしじゃないから、理由がないと断言はできないが、暗殺される理由がないと確信している。犯人はわたしを、ほかのだれかとまちがえたのじゃないか。そしてサルさんは、犯人は中山忠能を殺すつもりなのに、なにかの手違いで、われ、姉小路公知を殺したのではないかと見当をつけた……整理するところになりますね？」

「はなしはゴチャゴチャですが、大筋は、それです」

「だからね、姉小路公知が殺された理由を推測するよりは、犯人が中山忠能を抹殺しようとした理由または原因を推測するほうが事態の真相……そんなものが実在するともおもえないんだが……を把握するには効果的じゃないかな、どうです？」

「うーん。リクツはそうかもしれないが……」

「また、リクツ、リクツ！ あかねえ、リクツなんか放っておきましようって同意に達したばかりじゃないか」

「うーん」

「そのために、あんたは、木ノ内民夫さんに中山忠能の生涯の追体験をやってもらっているのです、わすれちゃだめだよ！」

サルが姉小路に同意して、木ノ内民夫と三人がかり、文久二年六月、江戸城における大原勅使と幕府老中の会談前後の中山忠能の動

向の検討がはじまった。

姉小路公知が、どの地点に立ってサルと木ノ内との通信を交わしているのか、じつはサルにもわからない。

猿ヶ辻の東向かいの突き当たりには野宮家、その南に飛鳥井家、そのまた南が姉小路家だ。猿ヶ辻から姉小路家はみえるが、中山家からはみえない。

といっても、それは江戸時代のはなし、平成年間のいま、公知が立脚するのは公知自身の墓だとすれば、それは姉小路家の跡地から東へぬけ、寺町通にある浄華院（じょうげいん）ということになる。公知の墓が浄華院の墓に立ったり坐ったりして、サルと木ノ内を相手として三角形の通信を交わしているとおもえばいい。

浄華院の南が盧山寺、ここには中山愛親の墓がある。愛親の墓のとなりには自然石の碑がたてられ、曾孫の忠能が明治十七年に書いた墓碑銘が読める。忠能の墓は盧山寺ではなく、東京の豊島岡にある。

大原勅使が島津久光の護衛をうけて江戸に到着したのは六月七日だが、それより前の六月十一日の京都、議奏の中山は朝議にしたがって右近衛権中将の三条実美に書簡をおくった。

「土佐藩主山内豊範（とよのり）の参観出府の期日を内密にとりしらべ、当方に教えていただきたい」

大名が規定にしたがって江戸にゆき、徳川將軍に忠勤の姿勢をみせるのが参観交代である。

公務だから期日やルートを隠す必要もない、隠せば却って疑われるおそれもあるが、それをなぜ「内密に」と秘密めかすのかというと、薩摩や長州に知られたくないからだ。

朝廷の権威を笠にきて江戸にのぼり、幕府に幕政改革の勅諭をつきつけて大名としての権威と威勢を高めようという政策をめくって薩摩と長州が争っている。

先鞭をつけたのは長州だが、「航海遠略策」を掲げた永井雅楽が失脚したことで長州は後退、その隙に薩摩の久光が登場、伏見の寺

田屋で尊攘派志士を踏み殺して孝明天皇に称賛され、幕政改革の大綱を奏上して、とうとう幕政改革を命じる勅使の護衛役に任じられた。

令名さくさくたる薩摩にたいし、長州が一步も二歩も遅れをとつたのはあきらかだ。捲土重来を期す長州と薩摩の京都における軋轢を排するには第三勢力を登場させて中和剤とするのが上策とかんがえられた。

「そうか、三条実美（さねとみ）さんに声をかけたのは中山権大納言だったのか！」

姉小路公知は顎をガクン、ガクンと上下に振る。真相察知の興奮を隠せないようだ。

実美の父の実万が井伊直弼に憎まれ、内大臣を辞めて洛北の一乗村に隠棲したころから公知はしばしば実万を訪問、激励していた。

実万が亡くなり、息子の実美が三条家の主となってからは、年齢がちかいこともあり、実美と公知は尊攘公家の兄と弟の関係になった。

公知は従四位下で侍従、宮廷政治の闇の奥のうごきにまでは目も耳もとどかない。

「大原重徳さんと島津久光が幕政改革を命じる勅諭をにかけて江戸に行ったあと、実美さんの熱気が一段と高くなった。どういう事情があったのか、いま、やっとわかった。実美さんを引き立てたのは中山さんだった！」

「大原と久光が江戸にむかったあと、中山忠能は元氣澁刺となった。これはわたしが忠能の日常を追体験した結果からして、まちがいのないところ」

「大原と久光は江戸にのりこむ。自分は京都にいて、大原と久光に負けず劣らずの奮闘を展開する、そういった状況ですか」

「お公家さんの武者ぶるいというのは形容矛盾、言葉の使い方がまちがっているけれど、忠能の澁刺ぶりを表現するには武者ぶるいが

「適当な言い方」

「天皇が、というか、朝議が、というか、伊達や前田ではなくて土佐に目をつけた理由は？」

「岩倉具視が起草した幕政改革大綱には『海岸の五大国の主を五大老として幕府の独裁を弱体化する』との構想が示されていた。沿岸五大国に指定されたのが奥州の伊達、九州の島津、土佐の山内、加賀の前田、中国の毛利の五大藩。前田や伊達は格が高いうえに上京となれば陸路によるしかないから、いまずぐの上京はむずかしい。

土佐の山内は参観交代で江戸にゆく準備をしている。天皇の命令となれば、海の上をすっ飛んでくるとみられたわけだ」

「土佐に目をつけたのは、ひよつとすると……」

「中山だが、島津と毛利はすでに京都に出ている、前田と伊達は遠いから咄嗟の上京は無理、となれば土佐に呼びかけるしかなかった。中山のお手柄というほどのことでもない。それよりは……」

口ごもった木ノ内に、サルと姉小路が目をつりあげ、表情に圧力をつけて木ノ内に迫る、説明をつづけてくれよ、と。

「ここを政局の最大ポイントとみて、功を他人に奪われまい、どんなことがあっても自分のものにする覚悟をきめたのではないか。いいかえれば、他人より一刻でも早く動かねばならんぞと自分で自分にいきかせた」

「他人とは？」

「岩倉と三条実美。岩倉は格下だから競争相手としてはさほど強敵ではないが、三条実美は右近衛権中将でほぼ同格、しかも実美の母は土佐十代藩主山内豊策の娘、三条実美が『わたくしが山内に声をかければ、よろこんで京都護衛の軍隊を提供するにちがいありません』などと言い出せば、中山の出る幕はなくなる」

「三条が腰をあげるまえに、いや、腰をあげさせないために中山は真っ先に動く必要があった……なるほど」

姉小路とサルが息をあわせてうなずく。

「しかも、ですね……」

三者鼎立の状況から木ノ内が一步ぬけだすかたちになった。

「実美の父の実方は内大臣、安政のころには井伊直弼を向うにまわして奮戦した大物だが、この実方の母というのが一条輝良の娘なんですよ」

「一条輝良……きいたことがある名だな、だれだったかな？」

「テンメイハチ、ツチノエサル、ムツキ……」

「ナンメイハチ……ええーっと、これは、その……」

「わすれちゃ、だめだよ、サルさん！」

「ああッ、あれだ、そうだ！」

姉小路公知が頬をふくらませ、余計者あつかいには屈しない姿勢を誇示する。

「公知さん、公知さん。あんたが余計者だというつもりはないんだが、時間が足りない。ここは我慢してください！」

天明八年、戊申の四月、孝明天皇の先々代の光格天皇は父の閑院宮典仁親王に「上皇」の尊号を贈りたいと計画し、数年にわたって幕府と交渉したが、ついに実現できなかった。

中山忠能の曾祖父の愛親は閑白の一条輝良とともに光格天皇の計画が実現するように奮闘したが、敗れ、忠能は江戸に召喚されて閉門の罪をうけた。

猿ヶ辻のサルは、姉小路公知を殺した犯人の姿を見損なった。みえて当然の犯人がみえなかったのを恥としたが、ほかのだれかとまちがえられて公知は殺されたのではないかとかんがえ、犯人の目標は中山忠能ではないかと見当をつけた。

忠能が命を狙われたのは忠能個人というより、中山家の歴史のなかに原因があるのではないかとかんがえ、木ノ内民夫に愛親と忠能の人生を追体験してもらおう計画をたてた。

木ノ内は過去と現在の二本の時間軸を生きるから、現在にしか生きられないサルとのあいだに時間認識の差が生じるおそれがある。たとえ時間認識の差が生じてもすぐに修正できるようにテンメイハ

チ、ツチノエ、サルを合言葉にきめた。

いささかややこしいいきさつを姉小路公知に説明できない理由はないが、時間がない。だから説明なしで我慢してもらうことにして、ただ、「一条輝良は関白をつとめた方」とだけ教えた。

「なるほど。その一条輝良の血につながる三条実美さんは中山さんには強敵だ、ぐずぐずしてはられない。薩摩と長州につづく第三勢力として山内を呼び出そうと朝議が決定されたのは忠能さんにとつては絶好のチャンス、すぐに手をあげて、『わたくしが三条権中将に朝議を伝達いたします』と大役を買って出た。そういういきさつなんだろう」

公知の理解の速さに驚嘆した木ノ内だが、驚嘆は隠して、「朝議が三条実美につたわり、さらに実美から山内豊範につたわつて土佐の上京が実現するだけでは忠能さんにとつては意味がない。

朝議をつたえたのが議奏の中山忠能であるという事実、これが政界に認識され、歴史の事実として記録され必要があつた」

公知の理解力よりも高いレベルの政治学を披露して優位を維持する木ノ内だ。

— 189 —

土佐藩首脳部の反応はどうだったかというところ、嬉しさ半分、迷惑半分。

薩摩や長州と同等の扱いをつけるのは嬉しいが、尊攘派の公家と志士が仕組んだ策じゃないかと疑っているから、よろこんでばかりはいられない。

首脳部は保守的傾向が強いから、尊攘派の招きに応じるのは危険だとかんがえる。この政情認識はまちがってはいない。

当主の山内豊範は十七歳の若者、政治経験は乏しいから、政治の魔界の京都にゆき、政争の渦にまきこまれると取り返しはつかない。

高知を出て大坂に到着、大坂で実美の書簡について討議した結果、豊範は京都にとどまらずに江戸に直行するが、随行藩士の半分の京都に留めて御所守衛の勅命にこたえることにすると決した。

「まずは妥当で賢明な決定」

「しかし、土佐には土佐勤王党を自称する激しい尊攘派がいる、頭領は武市半平太（はんぺいた）、かれらは承服しないはずだが……武市は、どうした？」

「護衛の一員です。豊範が京都を素通りするときいて憤然と決起、豊範を京都に留め、参内を実現しようと奔走するが、おもつようにはいかない」

「豊範が京都を素通りすれば、中山さんや三条実美さんの苦心も水の泡だ」

「それがね……」

木ノ内が満面の笑みをうかべ、舌なめずりをする感じで口をつぐんだから、公知とサルはあせってしまふ。

「それがね……」

じらせるだけじらして、

「豊範がハシカにかかった！」

「ハシカ？」

「字に書けば麻疹」

「ハシカは子供の病気じゃないの？」

「そもそも豊範が子供なのだとおいては笑い話にもならないが、ドゥツと熱が出て寝込んでしまった」

「勤王党の面々にとっては天の恵みの殿様のハシカ、江戸にいた間崎哲馬が大坂に急行し、武市や随行団の幹部の小南五郎右衛門に面会して、大原勅使と島津久光をむかえた幕府が汲々としている状況をつたえた」

幹部のうちに「われらが主は入京し、参内すべきだ」との意見にかたむくものが多くなった。いずれにしても江戸にいる前藩主の豊信こと、ご隠居の容堂（ようどう）の決裁をあおがねばならない。

小南五郎右衛門が入京して三条家に伺候し、勅意に応じたいが、しばらく時間の猶予をねがいたいと言上し、そのまま江戸に走って容堂に面会した。

公知が顔をほころばして、「ああ、小南というひとの顔はおぼえている。名は知らないが」といった。

「江戸についた小南は容堂に『殿の入京、参内をご承認いただきました』と願った」

「容堂としては、これは承諾せざるをえないだろう」

「そのとおり」

小南は大坂にトンボ返り、豊範に「ご隠居さまの承認をいただきました」とつたえた。

豊範は入京し、天皇の沙汰書を受けた。沙汰書には「薩摩、長州とともに京都守衛の任務を遂行し、忠勤に励むべし」と書かれていた。

土佐は第三勢力の地位を獲得した。土佐が第三勢力の地位を得るにいたった功績者は中山忠能、そして三條実美である。

- 191 -

姉小路公知が不満そうな表情をした。木ノ内民夫はそれに気づいて、「親友の三條実美が土佐を第三勢力にした。公知さん、嬉しいでしょう」ぐらいいはいつてやるべきかなとおもった。

山内豊範が入京して妙心寺の塔頭の大通院を本陣としたのは七月二十五日、姉小路公知が猿ヶ辻で暗殺されるのは次の年の五月二十日、一年の余命もない。事前のはなむけの言葉をかけてやるべきではないか。

勅使大原重徳と護衛の島津久光は幕政改革の勅諭を幕府におしつけ、完勝した。

幕府は大原勅使に誓った——將軍家茂が上洛、参内して長年の失政について謝罪する、將軍後見職・京都守護・政事総裁の三職を新設する、攘夷を実行する、つまり勅諭の全項目を実行すると約束した。

江戸の交渉の経過が京都につたわり、尊攘派は氣勢をあげ、佐幕派は消沈する。

六月二十三日、ペリー来航以来ずっと幕府支持の姿勢をくずさなかつた九条尚忠が関白を辞職した。京都における佐幕派の巨頭が身をひいたからには政局の激震は避けられない。

最初に動いたのは薩摩の尊攘志士や越後出身の尊攘志士の本間精一郎などである。

かれらの攻撃は九条尚忠に協力して親子内親王の降嫁を推進した岩倉具視などの公家にむけられた。

本間は議奏の正親町三条実愛に拝謁し、「岩倉を排除すべし」と建言し、そのうえで薩摩の志士の藤井良節にあてて「奸物として排除すべきは久我建通・岩倉具視・千種有文・富小路敬直と今城重子、堀河紀子の 四奸二嬪 だ」と記した書簡を送った。

堀河紀子は岩倉具視の実の妹、寿万宮と理宮のふたりの皇女の生母であり、今城重子とともに親子内親王にしたがつて江戸へ下向した女官だ。ただし、寿万宮はすでに亡くなり、一歳に満たない理宮も重病で、快復は望めそうもない。

本間の書簡は藤井良節から新しい関白の近衛忠熙に呈上され、さらにその写しが公家のあいだに回覧されて衝撃をまきおこした。

七月二十日の夜、前の関白九条尚忠の家来、左兵衛権大尉の島田左近が暗殺され、死体は罪状書とともに四条河原にさらされた。本間精一郎の肅清予告書簡はたんなる脅しではなかつたのだ。こうして、尊攘派による 天誅 がはじまった。

サルが、いかにも不審といった表情で、

「内親王の降嫁の世話掛筆頭は中山忠能だった。中山より下役の岩倉や紀子が非難攻撃の槍玉にあがつたのに、上役の中山が危機をのがれたのは、なぜかな？」

姉小路公知が身をのりだし、

「それをよく知るの、われ、姉小路公知」

首をグルグルツとまわし、得意顔で、

「中山忠光！」

「やはり！」

即座に同意を表明し、公知に代わって説明役を買って出たのは木ノ内民夫だ。

「わたしがサルさんと約束したのは中山忠能の生涯の追体験です、息子の忠光のことは約束の外だが、忠光にかんする情報がゼロでは肝腎の忠能の追体験がおろそかになる。そこでまず、中山忠光のひととなりをいえば、快活を通り越して乱暴、衣冠をつけたまま川をわたって参内し、殿上で相撲をとって勝ち、相手の衣冠を破るのを快感とする、そんなところがある」

鴨東の田中の中山家別邸には、その忠光の同志を自負する尊攘の志士があつまって悲憤慷慨の日々、京都所司代や町奉行が忠光の身辺に探索の視線を走らせないはずはないが、サチノミヤ睦仁親王の叔父にあたるとあって迂闊には手を出せない。睦仁親王の叔父だから尊攘志士が忠光のところに集まる、そうともいえる。

忠光は今城重子と堀河紀子を殺そうと計画した。本間精一郎はふたりを二嬢に指定して宮廷からの排斥を計画したのだが、忠光はもう一步ふみこみ、二嬢の命を奪おうとして、土佐勤王党の党首、武市半平太に協力をもとめた。武市は藩主の山内豊範にしたがって在京している。忠光は武市をテロリスト集団の頭領としてかんがえていたらしい。

武市といえども、公家の女性の命を奪うことまではかんがえていない。「おやめなされ」と諫めて帰したが、田中河内介の後任の中山家諸太夫の大口出雲守が忠光の暴挙計画を父の忠能に告げたので、こんどは父と子の争いになった。

「やめよ、忠光。父の言にしたがうのがイヤなら、われの首を斬つてからにせよ」

ここまでいわれると、いかに乱暴な忠光もひきさがるしかない。

しかし、四奸二嬢の排斥をあきらめたわけではないから、闕白

になつたばかりの近衛忠熙に面会して、「四奸二嬪を遠島、または官職から追放すべきです！」と迫った。

忠光は性格暴戾、悍馬の質に満ちている、いや満ち過ぎているが、だからこそ尊攘志士のあいだに人気が高く、それが父の忠能を尊攘派の攻撃から守る防波堤ともなっている。安政以来、忠能は佐幕と尊攘の二方面作戦を展開していると評してもいいだろう。

天誅の熱気が京都の政界を制圧する。

議奏の中山忠能と正親町三条実愛は岩倉具視・千種有文・富小路敬直に退却を勧告した。

「いまのうちに主上の側ら遠ざかつて身の危険を避けるのが賢明ではないか」

三人は勧告にしたがって近習の辞表を提出した。

「そのあとで忠能は政治家としてただものではないところをみせた、わたしはそうかんがえている」

木ノ内民夫の言い方は大袈裟だが、公知とサルが喉をゴクンと鳴らして興奮するだけの効き目はあった。

「なにを、やったのですか、忠能は？」

「岩倉たち三人が近習の辞表を出したつぎの日、忠能と実愛、野宮定功の三議奏がそろって進退伺いを提出したのです。本間精一郎が近衛忠熙に呈上した警告書の写しを添えて」

公知とサルは、はじめは、木ノ内の言い方が理解できない顔をしていたが、

「つまり……それは」

「岩倉たち三人ばかりではなく、自分たちも天誅の標的にされた被害者なのです……中山はこういいたために進退伺いを出した。こつしなれば、わるくすると、天誅に同調する加害者の立場に立たされるおそれさえあった」

「自分たちも岩倉たちとともに処分してください……中山さんは主上を脅迫した格好だな」

中山と正親町の進退伺いをうけた天皇は岩倉たちのために、名を捨てて実をとる道をひらいてやった。命を失うよりは、いまはとりあえず政界から逃れて他日を期すべしと諭すがごとく、岩倉たちに蟄居を命じ、落飾を願い出よとの沙汰書をさずけた。

四奸二嬪 はこうして政界から追放され、しばらくは京の郊外を逃げまわることになる。

幕府を圧倒して帰京した大原重徳は尊攘派全盛の京都政界から英雄としてむかえられた。

護衛の任を果たした島津久光はどうかというと、大原以上の歓迎の熱気を浴びた。

大原よりも先に江戸を発した久光の行列が神奈川の生麦（なまむぎ）村にさしかかると、四人のイギリス人が騎乗のままで行列と行き違った。久光の家来がイギリス人を下馬させようとしたが、うまくいかず、トラブルとなり、リチャードソンを斬った。リチャードソンは騎乗のまま逃げたが、落馬し、追いかけてきた薩摩の士によって止めを刺された。生麦事件である。

駐日外交団と幕府の外交担当官が事件の処置をめぐる右往左往するが、それを尻目に京都にもどった島津久光は、

「薩摩がついに攘夷を決行した！」
英雄として大歓迎された。

だがしかし、久光には尊皇はあっても攘夷はない。徳川の独裁政治を憎悪し、島津が徳川に取って代わりたい、いまなら可能とみえたから勇んで政治の舞台に登場してきただけだ。

大原勅使を護衛して江戸にゆき、幕府を痛めつけた快感を土産に帰京するつもりが、生麦のトラブルで奇妙な境遇に嵌まってしまった。

——生麦のイギリス人殺しは政治としてはなんの意味もない、行き掛かりのトラブルにすぎません。

久光自身の胸のうちの真実を表明すれば、たちまち評判は下落、

天皇の信頼もなくなる。

京都政界のトップの地位を維持するには「わたくしはもともと尊攘論者なのです！」と爆弾宣言する手があるが、まさか、そうもいかず、進退きわまって京都をはなれ、鹿児島にもどった。鹿児島では藩論が分裂、内争の様子も出てきたので、帰国するのが賢明だと判断したのだ。

帰国するにあたって久光は、近衛家から、「天皇に内々もうしあげるつもり」との条件つきで、今後の政策の大綱をもとめられた。

「近衛と島津のむすびつきは深い！」

「近衛が毛利を相手にしないわけではないが、近衛と島津の提携意識の強さは圧倒的」

「久光はもう、天下を取った気分、そうじゃないのかな？」

単純明快、しかし皮肉な調子たっぷりの判断をくだしたのは姉小路公知だ。生きていたむかしも、殺されて霊となつたいまも、かれはどうやら薩摩藩が嫌いらしい。久光が嫌いだから、久光にひきいられる薩摩藩が嫌いというわけでもあろう。

久光が京都滞在の居心地の悪さを感じたころ、議奏の中山忠能はジワジワと政権重鎮の存在感を強めていた。

親子内親王降嫁の責任を表明して進退伺いを出したが沙汰止みとなり、差控えの軽い処分がくだった。

差控えが免ぜられると、忠能はすぐに議奏辞任を申請した。この時点での議奏辞任がみとめられるわけではないと知ったうえでの辞表である。つぎの日すぐに「議奏辞任はみとめられない」と沙汰があり、議奏として磐石の地位を固めた。

忠能は長州藩家老の益田弾正をよびつけ、「攘夷行動の先頭に立つように」との勅意をつたえた。

「この件について、忠能の生涯追体験役のご意見は如何ですか？」

猿ヶ辻のサルへの問いの発信をうけて、木ノ内民夫が公知とサルに返信する。

「忠能が益田を呼んだときいたとき、わたしは咄嗟に、長州の重役に『攘夷の先頭に立つべし』との勅旨をくだしては如何でしょうか……このように上奏したのは中山忠能自身ではなかったと直感しました。サルさんの質問は的を射ています」

在京三藩の重役が一堂に会し、幕府にたいする攘夷の勅命降下を奏請することを決議した。

三藩の奏請は九月二十一日に朝議によってうけいられ、攘夷の勅命を幕府につたえる勅使の人選がおこなわれることになった。

じつは、毎年の正月、朝廷から幕府に年頭勅使が派遣されるしきりがある。攘夷の勅命伝達は年頭勅使に託せばいいのではないかとの意見も出たが、それでは攘夷勅命の重みが薄れるとの反対が多数を占め、攘夷勅命を直接につたえる勅使が「攘夷別勅使」の名で任命されることになった。

攘夷別勅使に任命されたのは三条実美、二十六歳、左近衛権中将。副使には侍従の姉小路公知、護衛役は土佐藩主の山内豊範。

任命の翌日に三条実美の叔母が亡くなり、実美は服喪しなければならぬ立場になった。服喪の立場のまま勅使の大役を果たせるか、どうか、不安になり、内々で辞意を表明したが、われながら納得できない。

姉小路公知を呼んで、相談した。

「とんでもない！」

年下の公知が年上の実美を、叱りつける勢い。

「ようやくここまで漕ぎ着けたのに、勅使役を辞任するとは責任逃れというほかはない。あなたが辞任するならば、わたしは死ぬしかない！」

実美は「そうか」といって、辞意をとりさげた。

実美は権中納言、公知は右近衛権少将に昇進し、山内豊範の護衛

をうけて江戸にのりこむ。

「姉小路公知、堂々の登場！」

「よかったなア。姉小路公知さんが出てきてくれぬことには、デレデレと締めりのないこの物語、いつになっても終わらないんだもの！」

三条実美と姉小路公知は十一月二十七日に江戸城にのりこみ、將軍家茂に攘夷督促の勅書と親兵設置の沙汰書を家茂に授けた。

家茂は二書を受けとり、二度目の会談で「勅諭督促の勅旨はおうけする、じっさいの策略についてはお任せいただきたい」と奉答したので勅使の役目は果たされ、年末に三条と姉小路は帰京した。

十二月九日、新しい役所の国事御用掛が朝廷に設置された。

源頼朝が鎌倉に幕府をたててから行政の最高執行権は武家ににぎられていたわけだが、それを朝廷にとりもどすことを展望した国事の討議、執行機関である。

国事にかかわる意見をもつものははばかりことなく国事御用掛に上申せよとの勅令が発せられたが、これは要するに、格下の尊攘派公家にたいして広範な活躍の場をあたえるのが目的であった。

青蓮院宮尊融法親王をはじめ、関白の近衛忠熙や前内大臣の鷹司輔熙、中山忠能など四人の議奏など二十九人の公家が国事御用掛に任命された。

法親王や高位の公家はあえていえば公武合体派に親近感をよせているが、それはあくまでも表面のこと、下位の三条実美や姉小路公知など、尊攘派公家として名を馳せている面々も任命されて、国事御用掛の実質的な代表と目された。

国事御用掛は尊攘派による、尊攘派のための、尊攘派の行政機関であるのは隠れもない事実だった。

公武合体派は国事御用掛が尊攘派の牙城となった状況に満足せず、

まず近衛忠熙が関白を辞任して鷹司輔熙と交代した。中山忠能と正親町三条実愛の二議奏も御用掛を辞任した。

公武合体派のメンバーが辞任したことで、御用掛の尊攘色はますます濃厚、言動は過激になる。

年があらたまつて文久三年、正月二十二日の夜、儒学者の池内大が大阪で暗殺された。大学の首は難波橋に梟され、「天誅を加えた」と書いた紙が置いてあった。

二十四日、大学の首から切りとつた——とおぼしき——耳が京都の中山忠能と正親町三条実愛の屋敷になげこまれ、「正義に味方していたにもかかわらず、裏切つた罪はゆるせない」と弾劾したうえで、「すぐに隠退せよ」と脅迫する天誅状が添えてあった。

青蓮院宮朝彦親王と関白の鷹司輔熙、前関白の近衛忠熙の屋敷には中山忠能と正親町三条実愛の罪を弾劾し、ふたりの議奏の官を奪うべきだと論じた書が投げこまれた。

中山と正親町三条は議奏を辞任し、中山は権大納言の官も返上したから、これからは無官の身である。

中山忠能はサチノミヤ睦仁親王の肝煎役でもあったが、議奏や権大納言といっしょに肝煎役も辞任した。忠能が尊攘過激派の攻撃目標となつたいま、孝明天皇は睦仁親王の肝煎という重職に忠能を留まらせてはおけない。

肝煎役を退職した——免職になつた——中山忠能にサチノミヤから綸子一巻と銀五枚、妻の愛子に紗綾一巻と銀子若干、子の忠愛と忠光に金が贈られた。

忠能の後任は、だれか？
いうまでもない、三条実美だ。

「クビとミミの関係は、どうなのかなア？」
ポツリとつぶやいたサルに、木ノ内民夫と姉小路公知の驚愕と疑惑の電波または光波、または音波がつきささる。

「クビとミミの関係？」

「難波橋に梟した池内大学のクビにはミミがついていたのか、どうか、ってこと。別の言い方をすれば、暗殺者は大学を殺してクビを切りとって難波橋に梟し、梟したクビからミミを切りおとして京都へはこんだのか、そうではなく、殺してクビを切りとり、クビからミミを切りおとし、クビは難波橋へ、ミミは京都へ別々にはこぼれたのか、ってこと」

「ミミが付いたままのクビを難波橋に梟し、梟したクビからミミを切りおとするのは合理的ではないね。月の出ない暗夜だとしても、天下の台所の大坂の難波橋、だれかの目につかぬ保証はない。橋の上にクビを梟し、サッーと逃げるにはミミを切りおとす時間の余裕はないとかんがえるのが合理的だ。難波橋に梟されたクビにはミミはなかった、梟されるまえにミミは切りおとされていた」

「天誅の士がかならずしも合理主義者とはかぎらないとおもうけれど……」

「いや、合理主義者にきまっていますよ。政敵を肅清するには殺すのが手つとり早い、天誅殺人こそ合理主義の神髄」

わずかの時間の沈黙がすぎて、

「首よりは耳が大事だったんだ！」

三者、無言の同意。

「重いナマクビを京都にはこんで中山邸と正親町邸にはこぶのは手間がかかって大変だ。だから、クビよりはミミが大切、耳寄りはなし」とはここからはじまった」

「中山邸と正親町邸にミミを投げこむ計画がはじめからあって、それから大学殺し、大学のクビ取り、そしてミミ切りが実行された」

「大学より、大学のミミが欲しかった……ということ？」

「ミミじゃなくてもよかった、中山忠能と正親町三条実愛を脅迫する道具として使えるものなら。とはいっても、ミミは脅迫の道具としては有効で便利だ。軽いうえに不気味このうえない。天誅横行の時期、ナマクビはありふれて珍しくもないが、ミミはユニークだも

の

「天誅犯人は中山と正親町三条の胆を冷やすにミミがいちばん有効だとかんがえた」

池内大学は近江の出身、京都に住み、医者を生業とするかたわら、儒学者として青蓮院宮に仕え、公家にも儒学を教授していた。將軍継嗣問題では慶喜擁立支持者として活躍し、尊攘論者として名をあげた。

安政大獄がおこると一度は伊勢に逃れたが、京都町奉行に自首して出、江戸に送られて追放処分となった。大坂に隠棲していたが、むかしの尊攘の仲間からは裏切り者として憎まれた。

文久三年正月二十二日、山内容堂に招かれて大坂の土佐屋敷の宴会に出席、帰宅の途中で暗殺された。

「土佐だ！」

「土佐ですよ、これは、絶対！」

土佐の山内と中山・正親町をつなぐ高等政治家の人脈の線があり、一段低いところに行動力に溢れる政治家の三条実美と姉小路公知、尊攘過激派志士が存在し、いまは佐幕派を装っても、尊攘派であった過去の呪縛から逃れられない知識人の池内大学がいた。

大学の耳は、土佐にたいして「薩長を向うにまわして政界を牛耳る勇気があるのかね！」と強圧し、中山と正親町にたいしては「大名と手を組むなら第三勢力にしかねない土佐ではなく、薩長だよ！」と誘うシンボルだ。

「木ノ内さん……」

サルが木ノ内民夫の問いかける言葉は、あえて柔軟をこころがけることで最大限の有効情報をひきだそうと計算してある。

「木ノ内さん、いかがですか、中山忠能の胸のうちに、土佐に接近すればするほど薩長との距離が遠くなる二律背反の認識が観察されませんでしたか？」

「いま、問われて気がつきました。大学の耳に託されているのが土佐と手を切れ　との強圧であること、それは中山は悟っていました。そして、わたくし木ノ内民夫は、そこまでしか理解できなかったのです」

おのれの能力の限界の低いのを指摘され、みとめるのは辛い、辛いのをこらえて一歩すすめばゆたかな心境に到達できる。それを希望として、木ノ内はつづける。

「土佐接近は危険、ならば薩長へ近づけばいいではないかとかんがえた瞬間があったのです。それを、わたしは気づかなかった。屋敷に閉じこもり、家族や諸太夫に当たり散らすばかりの日が何日かつづいたあと、土佐から遠ざかって薩長接近に転じるのは公卿として、中山家の主としての存在価値を下げるだけ、なんの得もないと判断したのです」

「……………」
サルと公知の無言をやりすごし、木ノ内はつづける。

「議奏も権大納言も辞める。なんの得もないかもしれないが、損はしないだけでもよしとする、この心境になりました。それから、他人のわたしがみてさえ、闊達の様子になりました」

「とどのつまり、大学の耳は中山忠能を強圧して土佐から薩長側勢力に轉身させるには役に立たなかった、こういうわけだ」

国事御用掛は高等、佐幕派メンバーの辞職によって権能を骨抜きされ、瓦解するかとおもわれたが、尊攘派の公家は粘り腰でもりかえした。かれらは国事御用掛のほかに、新しく国事参政と国事寄人の役所を増設したのである。

参政に任じられたのは参議で親子内親王の伯父の橋本実麗、大蔵卿の豊岡随資、左近衛権少将の東久世通孁、右近衛権少将の姉小路公知の四人、寄人には正親町実徳、正親町公董、中山忠光、四条隆調、錦小路頼徳、澤宜嘉など十人。正親町公董は中山忠能の子、忠光の兄だが、正親町家の養子になっている。養父の正親町実徳は尊

攘派として知られている。

国事御用掛と国事参政、寄人はどこが、どう違うのかというと、ほとんどおなじだが、尊攘派公家が諸藩の尊攘志士の推薦によって参政や寄人に任命されたから、はじめから佐幕派は排除されている。国事御用掛の権能はあつというまに参政と寄人に吸収される結果となった。

そしてまた諸藩の尊攘志士にたいして、朝議で「学習院出仕として補任する」ときまった。学習院出仕の肩書を得た志士たちは天皇の臣下の身分をみとめられたといえる。

「公知さんは、ここで中山忠光と同役になったわけだ」

「以前から名と顔は知っていましたよ、屋敷が近いんだから。わたしは参政、忠光さんは寄人として毎日のように顔を合わせるようになって、なんとまあ激しいおひとだと、驚くやら、感心するやら」

「公知さんも激烈、忠光さんに優るとも劣らない。ところで、公知さんが猿ヶ辻で殺されるのは文久三年五月二十日だが、それから一年とすこしあとで、忠光さんも殺される。まあ、先に殺される公知さんがご存じのわけもないが」

「忠光さんも？　そうですか。どこで、殺される？」

「長州で、ですよ」

「わたしの後に、忠光さんが、しかも長州で殺されるなんて、わけがわからないはなしだなア」

文久三年二月、將軍家茂が入京した。

將軍を呼びつけたつもり京都の尊攘派は勝利の予感に酔い痴れた。

尊攘派の興奮は長州藩主の毛利敬親と世子の定廣の入京によって絶頂にちかづく。公武合体論に執着する薩摩は長州の後塵を排する苦境においこまれた。

孝明天皇が賀茂社と石清水八幡宮へ攘夷祈願の行幸をおこなう案

が提議された。提議者は毛利定廣である。定廣が提議し、国事参政と寄人が待つてましたとばかりに賛成の決議をして、すぐにきまる。賛成と寄人の会議は朝議とおなじ権威をもつとされている。

四月十一日にまず賀茂社行幸がおこなわれた。行幸の総御用掛は三条実美がつとめ、前駆は関白の鷹司輔熙、内大臣二条斉敬、侍従の中山忠光、左近衛権少将の姉小路公知、おなじく正親町公董など、大名は長州藩世子の毛利定廣をはじめ、宇和島の伊達宗城、仙台の伊達慶邦や阿波の蜂須賀斉裕など十一人、後陣は將軍徳川家茂、水戸の徳川慶篤、將軍後見の一橋慶喜など。

午前は下鴨神社へ、午後は上賀茂神社へ攘夷祈願の行幸がおこなわれた。

無官の中山忠能は行列を拝見、手傘を捨てて地にひざまずき、衣は雨に濡れた。

「公知さん、「」存じでしたか、中山忠能が行列を拝見していたのを？」
「ことによると、などとおもいましたが、左右に見物人がびっしり、だれがだれとも、わかりませんでした。忠光さんにはお父さまの顔がわかったはずですよ」

尊皇攘夷の旗をにかけて独走する長州の勢いを阻止しようとしたのか、薩摩の島津久光は三月十四日に入京、中川宮朝彦親王（青蓮院宮）、鷹司関白、一橋慶喜と談義して当面の政治を論じた。

久光の主張のうちに、中山忠能と正親町三条実愛の議奏復職の一件があった。

「木ノ内さん、これ、忠能の耳にとどいていましたか？」

「断言はできないが、忠能がいつもの元気をとりもどしたのがこのころです、ことによると……」

「薩摩と長州の対立、拮抗は悪化の一途をたどっていたのです。どちから一方の支持で議奏に復帰するのは得策ではない、忠能はこの

ようにかんがえていたのではないかな」

「しかし、それなら、忠能が元気になったのは、なぜなんだろう？」

「朝廷をオーソドックスな政権として機能させるには中山の存在が不可欠だと久光はかんがえていた。それが嬉しかったのではないかな」

「大名に期待されてよろこぶ公家……なにか、おかしい気がしないでもないけれど」

「時代ですよ。大名との関係なしに朝廷政権は維持されない、そういう時代になっている」

三月十八日、中山忠光の行方がわからなくなった。三月十八日の当番の日に宮中に出勤したが、夜になっても帰宅しない。

忠能は四方に手をまわして息子の行方をさがしたが、手掛かりがつかめない。

(第10章・終)

中山忠光は西国の様子をみようとしたり。

とりあえず大坂に行こうと、許可なしに京都を脱出、伏見で長州尊攘派の入江九一と久坂玄瑞に出会い、決死の想いをうちあけた。

「西国に行つて多くの正義の士をあつめ、京都にもどつて尊攘の戦いをはじめろ！」

「ならば、ひとまず萩にお出てください。優柔不断の幕府や大名にさががけ、われらは尊攘の戦いをおこなう計画です。中山侍従に指揮をとつただけければ、同志一同、百万の味方を得て勇氣百倍となります」

入江が供になつて、忠光を萩に案内した。

公家が京都を出るには許可が必要な掟を久坂や入江が知らなかったのか、知りながら敢えて危険を冒したのか、それはわからないが、わるくすると長州藩は忠光の無許可京都脱出の罪に連座するおそれがある。

久坂や入江の気持ちは、たぶん、

——もはや天下はわれら尊攘派のもの、中山卿を罪に問う勇氣が幕府にあるはずはない！

そんなところだったろう。

忠光は萩から京都の父にあてて、「心配をかけてもうしわけないが、皇国の御為に決起いたします。それにつき、おあずけしてある金子を早く萩にお送りください」と書いた書簡をとどけた。かれは、いずれ決起の日にそなえて軍資金を蓄え、父にあずけておいたらしい。

忠能は諸大夫の大口出雲守を大坂に派遣し、忠光の帰京を命じる手紙をわたしたが、大口が大坂に着いたのは忠光が萩にむかったあとだった。

忠能は忠光の辞官と位記の返上の手続をとり、すぐに許可された。

父も子も無官になったが、意気消沈どころではない。跳躍のチャンスをねらって、ふたりとも意気たからかである。

忠能は尊攘派政権から警戒されている。土佐藩を京都政界にひきだし、長州と薩摩の軋轢をやわらげる第三勢力にそだてた、かれは尊攘派の敵とみななければならないのではないか？　これが忠能にかわる疑惑だ。

忠光には父が苦境にある意味を理解する能力があつたが、だからといって、父にむかい、父上よ、土佐を贖済するかのごとき姿勢をするのはおやめなされ　と諫言するつもりはない。父には父の意地と計算があるのを理解している。

ふたりの、このあたりの心象風景を木ノ内民夫は「阿吽の呼吸が通じている」と表現する。

「忠光の辞官と位記返上、これは中山家の安泰をはかるためには必要で有効な措置です」

「忠能はおもてむきには当惑の顔をしているが、内心では当然のなりゆきだとかんがえていた、そうでしょう、木ノ内さん？」

「息子は父の立場を理解し、承認したうえで動き、そういう息子を、父は理解している」

「父と息子のあいだに阿吽の呼吸が通じている、そう解釈していいわけですね」

「通じている、なまぐさい阿吽の呼吸が」

「自分が長州の萩に来たのは長州尊攘派の誘いに応じたからだ

……この態度を維持するかぎり、京都にいる父の安全はまもれる、これが忠光の計算だ。おもてむきには　父に逆らう息子、息子の逆に激怒する父　を装っているが、内実は、そんなものじゃない、父も息子も計算しているよ、したたかなものさ」

「阿吽の呼吸がめざす、究極は？」

「いまさら、なにをおっしゃる。サチノミヤ睦仁親王の践祚と即位そのほかに、なにがあります！」

「たとえば忠能が不慮の事故で倒れても、忠光がすぐに跡を継げるように手をうつておかねばならない。そのためには、京都のことは父に任せ、息子は長州尊攘派との提携を深めておく……うーん、きっちりと役割を分担しているなア！」

「ところで、いまのこの瞬間、忠光は長州の萩で、なにをやっているんですかね？」

サルが木ノ内にたずねたが、たずねられた木ノ内は返答に詰まり、サルの質問から身をかわして姉小路公知に振り替えた。

「わたくしは中山忠能から離れられない。外からも中からも、忠能の存在にピッタリ貼りついて言動を追体験するのがわたしの任務。

任務を回避すれば、わたくしの存在そのものがなくなってしまうから、サルさんも、わたしも、いま現在の忠光の言動を知るのは無理、となれば、ここは姉小路さんしか……」

「いない。お願いしますよ、公知さん」

「おふたりよりは、いささか……」

ゆつたりと身を乗り出すあたり、いかにも時勢の先頭を突つ走る尊攘公家の身のこなし、歳は若いが貫禄は充分。尊攘派政権の頭領は三条実美、第二の位置にいるのが姉小路公知である、京都にいても、長州における尊攘派のうごきは手にとるように承知しているらしい。

公知がおもむろに、

「ご両人、今年の十一月、江戸でなにがあったか、ご存じないでしょうか」

「十一月……公知さんと三条実美は攘夷督促の勅使、副使として江戸に滞在」

「早く將軍を呼び出して勅意をつたえたいのだが、將軍がハシカにかかってしまい……」

「山内豊範につづいて將軍もハシカ！」

「文久二年はハシカが政治日程の消化に影響をあたえた年として後

世に記憶されるでしょう。それはともかくとして……」

勅使と將軍の対面がおこなわれない政局停滞の隙を衝くべく、江戸にいる久坂玄瑞や高杉晋作を頭領とする長州尊攘派が横浜在留の外国人の襲撃をくわだてた。

高杉たちは、尊攘実行さきがけの名譽を薩摩の生麦事件に取られたのをこのうえない恥辱とし、生麦事件よりも激しい攘夷を実行して名譽挽回しようとした。

長州藩の幹部は右顧左眄の日々を送っていて、藩による攘夷即時実行は望めない。ならば藩の正式な攘夷ではなく、自分たちの独自の判断による攘夷行動で藩幹部に決断をうながそうと計算した。

神奈川の旅籠の下田屋にあつまり、明日はいよいよ攘夷決行とはりきった翌朝、下田屋は幕府の役人に包囲されていた。

土佐藩主の山内豊範に計画が察知され、豊範から長州藩世子の毛利定廣、勅使三条実美と副使姉小路公知に通知されたうえ、幕府の政事総裁松平慶永に報告された結果、下田屋は嚴重に警戒包囲されたのだ。

- 209 -

警戒を破って外国人を襲撃するのは不可能である。どうするか、つぎの方針を検討しているところへ三条実美と姉小路公知連署の書簡がとどいた。宛名は「久坂玄瑞殿始」、大要はつぎのとおり。

——われら両使は攘夷の勅諭を將軍につたえるべく江戸に下向し、ちかぢか將軍と対面の予定である。この状況において諸兄たちが外人を襲撃すれば、勅命伝達さえ不可能となり、勅意の実現は大失敗におわるおそれがある。しばらく猶予なされて幕府の出方を監視し、他日を期していただきたい。

久坂や高杉は横浜外国人襲撃策はひっこめたが、攘夷そのものを捨てたわけではない。いや、ここで攘夷を捨てれば藩内の保守派の攻撃をうけ、存在が危うくなるおそれさえあった。

かれらは尊攘実行の組織をつくって「御楯（みたて）隊」と自称し、決死の誓約をかわした。そして十二月十二日、品川の御殿山に建築されつつあったイギリス公使館に放火して全焼させた。

薩摩の生麦事件は偶発的なものであったが、長州のイギリス公使館焼討ちは綿密な計画のうえで決行されたもの、「われらの尊攘は薩摩のなまぬるいレベルを越えた！」と鼻高々になった。

公知はつづける。

「わたしは十二月七日に江戸を出て帰京した。長州尊攘志士のイギリス公使館焼討ちを知ったのは帰京してからです」

「横浜外国人襲撃計画が三条実美と公知さんの要請によって中止されたのは、公知さんから中山忠光につたえられたわけでしょう。そのあと、江戸から、イギリス公使館焼討ちを知らされた」

木ノ内につづいて猿ヶ辻のサルが、

「長州の尊攘実行の意志は生半可なものではない、ほんとうにヤル気なんだと知って、忠光は居ても立ってもいられなくなった」

念を押す。

木ノ内がサルのとをうけて、

「忠光と忠能のあいだに、京都脱出、長州ゆきについて打ち合わせはなかった。忠能の生涯の追体験役のわたくしの記憶にないのだから、これは事実としてうけとっていただきたい」

「だけど、忠光の脱出を知ったあと、行く先はどこか、なにをするつもりか、木ノ内さんにはおよその見当はついたはず」

「うわさが出たのです」

「どんな、うわさが？」

「三月十一日の賀茂社への攘夷祈願行幸、これは無事に済んだが、四月四日に石清水八幡への行幸が決議されたが、物騒なうわさが出たので、延期された」

「物騒なうわさの主人公が中山忠光であった……とでも？」

「そのとおり」

——姿を消した中山忠光は長州へゆき、長州尊攘派をまとめて京都にもどり、四月四日の石清水行幸の行列に襲いかかって孝明天皇を鳳輦ごと奪い、將軍を殺そうと計画している——

「と、まあ、こういったうわさです」

「將軍を殺すのはともかく、天皇を奪って、どうしようというんだらう、忠光は？」

「うわさ、ですからね、忠光がその疑惑にこたえる義務はない。しかし、天皇は攘夷祈願の行幸をお嫌いである、やらずにすむ途をお探しになられているというのは、うわさではなく、かなり確実な観測として内裏から流れていました」

「木ノ内さんがいうんだから、事実なんだろうね」

「中山忠能のところに、天皇の苦衷の気持ちが届いたのではないかと、これはまあ、わたくし木ノ内民夫が忠能の胸のうちを推測した結果にすぎないんだが」

「四月の五日……賀茂行幸がおわり、つぎの政策目標として石清水行幸が登場したところ……サチノミヤ睦仁親王から中山邸に組着四重がとどきました、お言葉を添えて」

「親王のお言葉には、なんと？」

「ひさしく前大納言の参内がないが、元気であるかと」

「主上ではなく、親王さまの名で？」

「朕の名を出せばさしさわりが多いから、出せぬ。親王の名を使わねばならぬ朕の苦境を理解してくれよ……主上のお気持ちはこのあたりではないでしょうか」

サルが叫んだ。

「天皇は中山忠能に救出を依頼したのだ、石清水行幸を中止させる策を教えてくださいよと」

「忠能はもちろん天皇のお望みを実現したいのだが、宮廷は尊攘派に牛耳られ、手も足も出せない」

「宮廷の尊攘派というと……？」

「まずは三条実美、つぎが……」

「わたくし、ですな」

姉小路公知が、いかにも もうしわけない といった口調で、いう。気をもたせるだけでは誠意を示せないとおもったのか、「天皇

や中山さんを恨んだり憎んだりする気はないんですよ」と付け足し、それでもまだ足りないのか、「天皇も中山さんも我らの強い味方、そうとしかおもっていなかった。どうも、そのあたりに食い違いがあつたようですね」

公知の言い分、まるで、ひとごとみたい。

石清水行幸は四月十一日に実行ときまったが、前日の十日朝、天皇は関白鷹司輔熙を召して「不予（ふよ）である、行幸は中止したい」と命じた。「不予」とは心身の不調のこと、つまり孝明天皇は仮病をつかってまで攘夷祈願行幸を避けたかったのだ。

しかし輔熙は尊攘派の威勢に押されて、勅意を奉じる勇気が出ない。

輔熙が右往左往しているあいだに三条実美が参内、強引に拝謁し、「不予に耐えて行幸していただきたい」と訴えて、ついに十一日の行幸が実現した。

- 2 1 2 -

「石清水八幡はそもそもは武家が篤く帰依するところ、源義家は石清水八幡の社頭で元服の式をあげたので八幡太郎と通称された故事があり、武家のなかでも源氏はことさらに石清水を尊敬してきた。

徳川が『本姓は源氏である』と称するからには、石清水の社頭で攘夷決行を誓約すれば、後へは退けない」

「後へは退けないからこそ、石清水の麓までは供奉した將軍家茂も、後見の慶喜も社頭へはのぼらず、下山する天皇を麓でむかえた」

「將軍と後見が社頭に立つ、立たないより、天皇が石清水の八幡神に攘夷を誓約するのを徳川は防げなかった、このほうがはるかに深刻」

「攘夷は既定のこととなり、是非善悪の議論は問題外となった」

「幕府のまえには何月の何日に攘夷を断行するか、日にちの決定だけがのこされた」

「中山忠能は、いまはもう口を閉じるしか、ない」

「ハッハッハー」

ほがらかに笑う猿ヶ辻のサルを、姉小路公知と木ノ内民夫が呆れたように、にらむ」

「ごめん、ごめん。でもね、権大納言の中山忠能さんが ミザル、キカザル、イワザル のイワザルになったかとおもうと、おかしくって……」

「もともとは イワザル のあんたがベラベラしゃべるサルさんに変身したから、あんたに代わって中山忠能が イワザル にならざるをえない。この物語が終わったら、あんた、中山さんに謝らなければダメだよ！」

木ノ内民夫、本来はユウモリストなのだ。

四月十七日、幕府は十万石以上の大名にたいして、親兵を提出し、京都を守護せよと命じた。

四月二十日、幕府は天皇にたいし、五月十日を以て攘夷実行にふみきると誓約した。

四月二十五日、姉小路公知は幕府の軍艦順動丸に乗って摂津の海の防衛施設を検分した。順動丸の艦長は軍艦奉行並の勝義邦である。

「幕府の軍艦に乗ったご感想は？」

公知はグユイツと唇にちからを入れた。サルの問いに咄嗟にこえる態勢をとったわけだが、なにをおもったのか、息をぬき、逡巡の表情に転じた。こんなことをいうと、サルさんや木ノ内さんに軽蔑される。いわないほうが身のため、かなア のボディーランゲージである。ボディーランゲージ、訳せば身振り言語。

双方無言の時間がすぎ、もはや沈黙に耐えられないところまできて、仕方なしに公知が言葉を吐き出した。

「はじめはね、軍艦に乗る予定はなかった」

「エエッ！」

「まさか！」

朝議が公知に命じたのは「大坂、兵庫、紀伊、淡路の海防の施設と体制を検分せよ」であり、「軍艦に乗って」の指示はない。といつて、「軍艦に乗ってはならんぞ」とも指示されていない。

二十三日に大坂にゆき、本願寺の別院を宿舎とした。随行は長州の佐々木男也、清水清太郎、桂小五郎、肥後の山田十郎、紀伊の伊達五郎など、七十人ほど。

「土佐や薩摩のひとは？」

「数が多いからおぼえていないが、土佐人や薩摩人がいれば長州人と喧嘩が起きる。喧嘩はなかったから、土佐人や薩摩人はいなかったのだと推測している」

「宿舎の本願寺に勝義邦がきて、摂海の防衛はこういう具合になっていますと説明した？」

「ずいぶん長い演説だったが、わたしの頭にすんなりと染み込まない。わたしはもう、うんざりだな の顔色になったらしい。そこを看てとつたらしく、軍艦奉行は『わたくしの軍艦にお乗りになられ、摂海沿岸が御覧なされば一目瞭然でございます』といった。チヨット強い口調だね」

「ははあ、軍艦奉行の挑発ですよ、それは、まちがいない」
木ノ内につづいてサルも、

「お公家さんには軍艦なんかに乗る勇氣はないときめこみ、くやしかったら軍艦に乗ってみなさい。陸のうえでリクツをこねても、防衛施設がわかるはずはない と挑発した」

「わたしは『よろしい、軍艦に乗ろう！』と承知したが、さようであつたのかな、軍艦奉行の挑発作戦に乗せられたのかな？」

挑発に乗せられたのかな、と気弱な告白をして公知は気が楽になった。サルや木ノ内に軽蔑されるかもしれないとおそれていたのは、じつはこの予感に圧迫されていたからだ。告白すれば、おそろしいことはない。

公知の一行は四月二十五日に順動丸に乗った。

勝奉行は公知の一行総勢百二十人ほどを相手に「あれはこのようにすべきである、これはあのようにはすべきである」と持論を披露し、おおかたの賛同を得たと日記に記した。

順動丸には奉行がアメリカで買ったスチームエンジンの設計図、セバスポール戦争の図、軍学書『三兵答古知幾（さんべいたクチキ）』が積みこまれていた。『三兵答古知幾』は砲・騎・歩の三兵科の共同による戦争術を説いた書で、プロシヤ軍の参謀ハインリヒ・ブランドの研究が基になっている。答古知幾はオランダ語の TAKTIEK、英語では TECHNIC。

勝義邦の弟子の坂本龍馬は師匠にねがってこの三品をもらいうけ、公知に進呈した。

「すばらしい物をいただいた、かならず主上に献呈いたします」

公知は二十八日には加太浦から紀淡海峡を巡察、五月一日には大坂城で將軍家茂と会見、二日に帰京、ただちに参内して視察の結果を奏上した。

五月九日、朝廷から幕府にたいして摂海防衛に関する沙汰書が下された。

一、大坂は摂海の咽喉を扼する地であるから、防衛の主将が駐屯しなければならぬ。したがって然るべき大藩に守備を命じること。

一、堺の津は立花飛騨守に守備させているが、飛騨守はことのほか国力疲弊であるときく。然るべき大藩と交代させること。
一、製鉄所は長崎に一ヶ所あるが、攘夷戦争を戦うには堅牢で大型の軍艦を造る必要がある。適地をえらんで新しい製鉄所を建造し、諸藩にたいして艦砲を配布すべきである。

「勝義邦は『自分の意見が天朝に採用されたのは姉小路卿の奔走のおかげだ』と語ったそうです」

「沙汰書が下された二、三日あとに、わたしもきましたよ。快活な、いい男ですな、かれは」

勝の快活を快活な調子の声で称賛した、その直後、公知は悲痛な声で叫んだ。

「ああっ！」

「どうしました？」

「これ、じゃないかな！」

「どれが、これ？」

「攘夷の旗を振って名をあげたわたくしが、幕府の高等役人から感謝された。これ、おなじく尊攘のひとつから見れば裏切りでしょう」

「そうかもしれない」とサル、

「裏切り……ねエ」と木ノ内民夫、

「いや、チョット待ってくださいよ。わたしを裏切り者とみて天誅を下したのなら、天誅書があるはずじゃないですか。わたしが殺された猿ヶ辻で天誅書は発見されなかった。姉小路家にも、どこにも、天誅書は投げこまれなかった。天誅のつもりでわたしを殺したのなら、殺し損 ですよ」

「ひとちがい……かなア、やっぱり」

「そうか……なア」

幕府が攘夷決行の期日と誓約した五月十日、長州藩は攘夷の戦いをはじめた。

横浜から長崎経由で上海にむかうアメリカ商船ペンブローク号が下関海峡にさしかかり、田ノ浦の沖に投錨して潮時をみていた。長州の軍艦庚申丸と癸亥丸が夜陰に乗じてペンブローク号に接近、砲撃した。ペンブローク号は錨をあげ、豊後水道に難を避けた。

この日、中山忠光は筑後の久留米にいた。

久留米の水天宮の神官、真木和泉は尊攘派の闘士であるが、藩主によって拘禁されていた。忠光は久留米にのりこみ、公卿の権威をふりかざして真木救出に成功した。

「公知さん、あなたが長州のアメリカ船砲撃を知ったのはいつです

か？」

「砲撃が五月十日、それから四日か五日あとだから五月十五日あたり」

「天下を取った感じ……でしたか」

「そりゃ、もう、ねエ！」

サルは質問の相手を公知から木ノ内にきりかえた。

「木ノ内さん、中山忠能の身边に、なにか変化はありましたか？」

「変化というほどのことか、どうか、長州の佐々木男也、寺島忠三郎などが中山邸に忍んできて、忠光が藩主の毛利敬親と対面したとつたえていました。そうそう、庭田重胤との通信が頻繁になったのは特筆すべきことがらでしょうか」

「庭田……？」

意外な公家の名をきいて驚いた表情の公知。

「国事御用掛になったのです」

「庭田の家職はお神楽ですよ。お神楽をやる庭田がなまぐさい政治の先端をになう国事御用掛とは、世の中、変われば変わるものですねア」

「アメリカ船砲撃のことは……？」

「五月二十三日に、十日の砲撃について日記に書きました。長州領でアメリカ船へ大砲を撃ちこみ、船は逐電したとそうだと、素っ気なく」

「五月二十三日……わたしはもう死んでいた。わたしが殺された件について、中山さんは、なにか？」

「何度も何度も日記に書きました、憤激の感情をこめて」

「中山さんに心配をかけてしまったなア」

「ああ、そうか、姉小路家と中山家は縁戚ですね、平戸の松浦家が共通している」

姉小路と中山が縁戚であるのは事実だが、いま、このとき、そんなことを話題にするひまはない。

猿ヶ辻で公知が殺される二十日はすぐそこに迫っている、公知は

なぜ殺されたのか、真相に一步でもちかづくために三者三様に頭をひねらなければならない。

ではあるが、これがどんなに難事であるのか、これまた三者三様に痛感している、こたえが出る気配はなさそうだ。気配はないのは知っているが、最初に「気配はない」と言葉にする勇気がないから、縁戚がどうのこうのと、むだなことに首をつっこんでいる。

「公知さん、ここまでできて、殺された理由がなんなのか、こころあたりはないのですか？」

「ぜーん、ぜん。三条さんを殺したいものは何十人、何百人でしょうが、三条さんとわたしでは、公家として政治家として、雲泥の差がある。わたしを殺してもなんにもならない」

「とすると、犯人は姉小路公知さんと三条実美をまちがえたのかな？」

「でも、サルさんははじめから、公知さんは中山忠能とまちがえられて殺されたのではないか、犯人は忠能を狙ったのに、殺したあとで忠能と公知さんをまちがえていたのがわかった、このように推論したではなかったのですか、この物語のはじめから？」

サルは目を半分つぶって、

「公知さんはご自分と三条実美を比較して、自分を殺してもなんにもならないとおっしゃるが、三条実美よりも中山忠能のほうが、まだ上です。殺し甲斐にこだわらぬなら忠能を殺すのが本筋ですよ」

ひと息おいて、

「なにしろ、サチノミヤ睦仁親王をにぎるのは中山忠能なんだから」

念を押した。

公知がサルの見解表明にちからを得たのはまちがいない。

「わたしが死んだあとだから推測でしかいえないけれど、五月二十日のあと、政局の激変なんてなかったでしょう。まあ、薩摩藩が内裏守備役から疎外されましたが、激変というほどではない。狙われたのが三条さんか、中山さんか、それはともかく、すくなくとも姉

小路公知ではない！」

気がつくとき、サルは居眠りをしている。

木ノ内が肩をたたいて、

「サルさん、どうやらこの物語も終末が近づいた。肝腎かなめのこのとき、居眠りなんして、ダメじゃないか！」

「うーん。わたしはね、どういうわけか、五月二十日という数字が出てくると、眠くて眠くて、どうにも耐えられなくなるのです。ここ百年のあいだ、ずーっとそうなんですよ」

いうなりサルは、猿ヶ辻の金網の奥で横になり、気持ちよさそうにイビキをかきだした。イビキはかいているが、両手で御幣を胸の前に抱き、倒れないようにしているのは、さすがだ。

「サルさんは、このまま深い眠りにつくのではないのかな？」

「でも、横になったままでは猿ヶ辻のサルのポーズがとれない。となると、勤務怠慢容疑で猿ヶ辻のサルの職を解職されるおそれがある」

「そうと知っていて、手をうたないのは我らの怠慢」

木ノ内民夫がサツサと中山邸の門をくぐって出ていたから、姉小路公知はびっくり、

「木ノ内さん、軽い気持ちで外に出てはだめですよ。中山忠能の立場は、いまや微妙なんだから」

「ながいつきあいだが、サルさんが眠る場にはじめて遭遇した。秘密の交信は不可能、わたしがサルさんに近寄るしかない」

中山邸から猿ヶ辻へゆき、足場がないのを知ると中山邸にもどり、梯子のようなものをついで戻ってきた。権大納言にはふさわしくないこしらえだが、緊急の場である、仕方ないと公知は悟った。

梯子をかけて金網まで登り、金網に手をつっこんでサルの肩をポンポンと叩く。

「うーん」

ムニヤムニヤいって身を起したサルのからだを中腰にして、良ウシトラの方角に向けて立たせ、

「サルさん。そのまま、ずつーと、どうぞ降りてきた。」

「これがそもそも本来の猿ヶ辻なんです」

結局のところ、公知暗殺事件の真相は突き止められなかった。

木ノ内民夫は先斗町の酒場「竹澤」で太田黒と約束した義務から解放され、自由の立場になったが、こうなってみると、木ノ内自身ここで中山忠能の生涯の追体験をやめるのは惜しい気がしてきた。

とつくのむかしに死んで、いまは豊になっている小路公知も木ノ内の胸のうちを察したらしく、

「ねえ、木ノ内さん、清浄華院の墓の下でポヤーツと死んでいるだけの毎日に、わたしは耐えられない。あなたさえよろしければ、もうすこし、いっしょにやりましょう」

そういうわけで、姉小路公知と木ノ内民夫のふたり、五月二十日のあとの中山忠能の追体験をつづける。

- 220 -

六月十一日、長州の佐々木男也が中山邸をおとずれて忠能と面談、「内密にねがいます」と前置きして、こういった。

「忠光さまは一昨日に上京なされ、森俊斎の名で河原町のわれらの屋敷にちかい旅宿に潜伏なさっております。このこと、あなたより内密に三条実美さまにつたえていただきたい」

忠能は言葉をえらび、

「そうときいたからには、忠光の身柄は中山家がひきとつたうえでその筋へ報告し、朝議の決定に任せることにしましょう」

「いずれはそうなるかもしれませぬが、いましばらくは伏せておいていただきたい」

忠能は無言で承知した。三条実美が朝議を牛耳っているうちは、実美の同志の忠光の件は三条に任せるのがいちばん賢明の策なのだ。

危険を冒して入京した忠光は、なにをやるうとしたのか？

「忠能から庭田重胤、庭田から三条実美へ通じて、長州藩の言い分が朝議で承認されるようになってゆく、これでしような」

「ああ、正親町公董の件は忠光からはじまったわけですな、それにちがいない！」

六月十四日、正親町公董が攘夷監察使に任命され、十六日に長州にむかった。公董は中山忠能の次男、つまり忠光の兄で、左近衛権少将、国事寄人。

公董が監察使に任命されたいきさつはつぎのとおり——長州藩が五月十日にアメリカ船ベンブローク号、二十三日にフランスのキンシャン号とオランダのメデューサ号を砲撃した。

三艦砲撃は天皇の命令にしたがったことだが、天皇から「よくやった！」との褒称の言葉が発せられない。

このまま時間がすぎると、いつなるとき京都の風向きが変わり、長州がやったことが忘れられるおそれもある、それでは困るというわけで忠光が京都に出てきて、朝議が「長州藩の主従よ、よくやった！」との褒称を決定するように工作した。

公董は山口で毛利敬親、定廣の父子、支藩の幹部と対面し、攘夷実行にたいする天皇の嘉賞の勅諭をつたえて使命をおえた。

イギリス海軍が鹿兒島におしよせ、薩摩の軍艦と鹿兒島市内に艦砲射撃をあげたのは七月二日である。受身のかたちの薩摩軍だが、勝負は薩摩が七分、イギリスが三分、天皇は島津にも褒称の言葉を贈った。

「中山家は総力をあげて尊攘政権の三条実美に協力、朝廷と長州との提携を日に日に強化している」

「ただし、当主の中山忠能自身はおもてむき攘夷と公武合体の両面作戦の姿勢をくずさない」

「まさに 老獪 の一語に尽きますな、忠能という政治家は」

鹿兒島灣で激戦があったつぎの日の七月三日、サチノミヤ睦仁親王は中山忠能と妻の愛子に鯛・鱧・鮑・川魚を下賜して屏居暮らしの気分をなくさめた。忠能はおかえしに親王のお好みの松魚（かつお）・香魚（あゆ）を献上した。

帰京した中山忠光は父の中山邸にいたが、このことで中山父子を叱責する声はおこらない。

久留米水天宮の神官の真木和泉、長州の久坂玄瑞や寺嶋忠三郎、土佐の吉村寅太郎などがたずねてきて面談する席に、忠能も姿をみせることが多かったが、これも問題とはならない。

真木和泉は 学習院出仕 のれつきとした肩書をもっているし、久坂や寺嶋は外国船砲撃で天皇に称賛されたばかりの長州藩士なのだ、大手をふって公家町を闊歩している。

中山邸で談義されたのは忠光の官位復旧であったようだ。

許可なしに京都を出て長州に走った罪が軽いはずはないが、それは通例のこと、三条実美が頭領の尊攘派政権のもとでは、忠光の官位復旧はむしろ当然のこととして朝議で可決される可能性が高かった。

八月十三日にはついに 攘夷祈願・親征軍議のための大和行幸の詔勅が發布された。大和朝廷発祥の地の大和へ天皇が行幸し、攘夷戦争の指揮をとる軍議を練るといふ詔勅である。行幸の期日は八月十七日。

「中山忠能の日記に中川宮朝彦親王の名が頻繁に出るようになりました」

中川宮は伏見宮邦家親王の子、仁孝天皇の養子として奈良一乗院の門主から京都の青蓮院門跡となった。

安政の政争では条約調印に反対、將軍継嗣問題では一橋慶喜擁立の立場をあきらかにして尊攘派の希望の星となったが、幕府の奏請によって隠居・永蟄居に処せられた。文久二年にゆるされ、国事御

用掛となつて遷俗、中川宮と称し、公武合体派の重鎮として政界に大きな影響力をもっている。

木ノ内が中川宮の名を出したのをうけて、殺されて豊となり、いまや身軽で気楽な姉小路公知が、

「中川宮さまが、いまさら、なにをやるうとおっしゃるのか？」

「攘夷行幸を中止なされたい主上の意を、まず薩摩藩がむかえ、宮さまは薩摩藩に手を添えるかたちで行幸中止にもつてゆく、そういうところでしょう」

「忠能は中川宮さまの味方のつもり？」

「自分が無官であることで生じる空間を中川宮に埋めてもらう、そういう計算ではないかな」

「クウカン？」

「主上と自分のあいだの空間、隙間」

「そうか！ 主上と自分のつながりを太く、堅固にしておくのが第一、攘夷祈願行幸に賛成する、しないは二の次なんだ」

「忠能は両面作戦だ。行幸実施は息子の忠光や三条実美にやらせ、行幸中止は中川宮さまにやってもらおう」

八月十三日、中山忠光は三条実美に書をおくり、「ひとあしお先に大和を占領し、主上の行幸を奉迎いたします」と計画をつたえ、方広寺で天誅組を結成した。

伏見から大坂にくだつて海に出て、木津川沖で軍令をさだめた。

十七日に大和五条の代官所を襲い、代官を斬って初戦勝利の凱歌をあげた。

それからは敗戦につぐ敗戦、仲間がちりぢり、忠光は長州に逃亡したが、保守派の手によって殺される。

十八日の朝議で大和行幸は政策として否定され、三条実美など尊攘派公家七人が官位を剥奪され、長州に集団逃亡した。

この日、国事参政と国事寄人の職が廃され、議奏格の職が新設されて中山忠能、正親町三条実愛、阿野公誠が任命された。

この日、天皇は中山忠能を召し、議奏格就任を祝って大鯛と大鱧、九月十九日にも鮮鯛一折を下賜した。忠能は大香魚を献納して謝恩のしるしとした。

この日（八月十八日）、中山忠能が命によって参内すると、「議奏として再勤せよ」との勅命がくだったが、忠能は辞した。

八月二十一日、攘夷監察使として長州に出張していた正親町公董が京都によびもどされて国師寄人を罷免され、差控の処分をうけた。

逃亡した三条実美と三田尻で会見したのを罪に問われたのだが、実美との会見は口実にすぎない。長州の攘夷戦争を天皇の名によって褒称したからには、いずれ処罰されるにきまっていた。

八月二十八日、忠能は「忠光を義絶する」と届けた。

（第11章・終）

「なまぐさい政治むぎのことには手を出さない、これが八月十八日政変のあとの中山忠能さんの心境ですか？」

「そうともいえる。政治の表舞台から追われて時間の余裕ができたのをさいわい、天皇やサチノミヤ睦仁親王との接触を深めます。これが高位の公家のふつうの姿」

木ノ内の断定の声には、溜息のような、なにかしら切ないリズムがある。

忠能夫妻は孫のサチノミヤ睦仁親王に逢うチャンスが減った寂寥に耐えられないが、天皇か親王から「参れよ」の声がかからないかぎり、親王の声もきけない。

「親王にお逢いできるよう、なにか手を打ってくれませんか」
夫妻の娘、そして親王の生母の慶子は新宰相に昇格している。愛子から慶子に、慶子から典侍の中山續子、掌侍の高野房子に懇願が通じ、ついに愛子の親王謁見がかなえられ、若宮御殿に参上する。

贈答と下賜の交換がおわり、いよいよ辞去、なごりおしさに肩を落とす愛子の背に、サチノミヤの声がかかる。

「新宰相の母よ、今宵は宿直（とのい）せよ」
親王に寄り添うようにすごした一夜があけ、親王と准后から忠能への土産を手に愛子は中山邸にもどり、飽かず眺めたサチノミヤの様子を夫に語る。

「親王が愛子を召して宿直させる、それは中山夫妻だけではなく、慶子や續子の存在を重くすることにもつながるわけだ」

「忠能にしても、おもうままにお孫のサチノミヤさまに逢えるわけではない……？」

「そうなんです。親王肝煎の役を辞してからの忠能は宮中の様子に触れるのがすくなく、参内してもサチノミヤには逢えないのがふつ

う。たとえば……」

十二月三日に忠能はサチノミヤに寒中見舞いの書をさしあげ、慶子を通じて菊屋霰酒、鱧、海老などを贈り、四日には参内して寒中見舞いの記帳はしたが、サチノミヤには逢えなかった。

そうと知ったサチノミヤは慶子を通じて「逢えないのは残念であった」とつたえたうえで、「近日、参内して謁見の手続をとれ」とまで示唆した。

九日には宮中年末の恒例、若宮御殿の煤払いがある。前々日の七日、サチノミヤから慶子を通じて「煤払いの日は終日御三間におる、謁見できる」と知らせがあった。

サチノミヤから祖父に「参れ、逢えるぞ」と伝達があったのだから簡単にことがはこぶかというところではない。愛子の若宮御殿参上と親王謁見、一夜の宿直がしきたりにこだわる役人の感情を刺激したうえに、親王胆煎をやめたばかりの忠能がいまさら親王謁見を願うのはケシカランという雰囲気もある。忠能が強引にことをはこぶと、サチノミヤの立場を悪くするおそれもある。

忠能は議奏の正親町実徳に書をおくり、「若宮御殿に参殿してもよろしいか」と是非の判断をあおいだ。

「それについては、明日に評議します」

実徳の返答に忠能は不安を抱く。

九日、実徳から「先日の件、観慮（えいりよ）は数日のちにくだされます」と不安な予告があり、十一日に「勅旨により参殿はしばらく遠慮いただくことになりました」と最終の通告があった。

「忠能と実徳のあいだは……？」

「忠能の次男の公董が実徳の養子、政治上の意見も似ているから同志といつてもいいが、三男の忠光が脱走、反乱、次男の公董が罰をうけている現状では実徳が忠能と気脈を通じているとみられるのは双方にとって危険です」

「たがいに敬遠するふうを装っている……？」

「そのとおり！」

元治元年（1864）七月十九日、長州藩の軍隊が内裏に攻めよせて砲撃した。幕府、会津、薩摩の軍隊が応戦して長州軍を追い返したが、内裏の砲撃戦の火が市中に飛び移って大火となった。

二十日の夜、禁裏付の糟屋義昭が、大和の十津川郷土が宮中に乱入して鳳輦を奪おうとしているとの怪情報を得たので、禁裏守衛総督の徳川慶喜につたえた。

慶喜が関白の二条斉敬と中川宮に急報すると、斉敬と中川宮は急遽出仕して玉座を御三間へ移し、さらに紫宸殿に移した。

サチノミヤ睦仁親王と准后は天皇に従って紫宸殿に移ったが、親王は紫宸殿で卒倒し、中御門経之が水を飲ませて気をとりもどした。うわさの十津川郷土はどうしたのか、内裏のすみずみまで搜索したが、怪しいものはひとりも見つけられなかった。ただし、朔平門と猿ヶ辻のあいだの穴門の鎖がねじ切られていたのが不気味であった。

- 2 2 7 -

「猿ヶ辻の穴門の鎖が切られた・・・？」

「ならば……」

「猿ヶ辻のことなら猿ヶ辻守衛総督を自任しているサルさんが知らぬはずはない、たたき起こして、なにが真実なのか、きかせてもらおう……木ノ内さんはこういいたいわけだ」

「公知さんだつて、そうおもっているのじゃありませんか？」

「うるさいなア、たまにはゆっくり寝させてもらいたいものだ！」

サルの声が天井から降ってきた。

「穴門の鎖がねじ切られるなんて、ただごとじゃない。サルさん、そこから見なかつたのですか！」

「ここからじゃ、穴門は死角だ、なにが起こってもみえない」

そのあとすぐに、サルのたかいびきがきこえた。

「サルさん、寝ちゃダメですよ。ほら、起きてくださいよ。あなたに頼まれて中山忠能の生涯の追体験をしている木ノ内民夫、わたしに頼んだサルさんが寝てしまつては困るんだ！」

「ダメだなあ、ぐっすり寝込んでいる。飛び上がつて金網を揺すつてみたら、どうだろう」

「あぶないですよ。溝を踏み越えるとセンサーが感知してブザーが鳴り、警備員がすつとんでくる。警備員ならいいが、ほんものの皇宮警察官が出てくると、おだやかには済まない」

「贈正二位、参議・左近衛権中将のわれ、姉小路公知、皇宮警察官などに負けるものではないが、しかしそれも生きていればこそ、清浄華院の墓の下の公知では、いくら威張つても実らない」

二十三日の朝儀で長州藩主毛利敬親の有罪が認定され、幕府にたいして長州征伐命令が発せられた。

毛利に呼応した嫌疑で前関白の鷹司輔熙、有栖川宮熾仁親王、熾仁親王、中山忠能などが参内を停止され、外出と他人面会を禁止された。

慶応元年（1865）正月二日、中山忠能は新宰相の慶子を通じて年初の祝辞をサチノミヤ睦仁親王にさしあげ、絵扇子を献上した。通例ならば参殿して謁見、そのうえで祝辞をのべるところだが、謹慎の立場にあるのを憚った。

「木ノ内さん、中山邸にアンスの樹があったのを、おぼえていますか？」

「おぼえている、どころじゃない。祐宮さまはものごころがついたころから中山邸のアンスが大のお気に入り、宮中にもどられてからも忠能が毎年献上するのを楽しみにしていた」

「それが、今年はですね……」

「ええっ、なにか、あった？」

「アンズが熟さないうちに近所のワルガキが侵入、竹竿をふるってアンズの実を落とし、盗んだ。忠能は献上しないうちにアンズがぜんぶ盗まれるのをおそれ、未熟のアンズを献上しました」

尊攘派に圧迫され、官職を追われた公家が公武合体派勢力の支援をうけて続々と復活する。

親子内親王の江戸降嫁をすすめたとして児（ちこ）を免職された岩倉具視の子、周丸が復職した。周丸は天皇、親王、准后にそれぞれ謝恩の品を献上した。具視の養子の具綱も養父に連座して差控を命じられていたが、天皇の近習として復帰した。

「父の具視は？」

「ふたりの子は自身の罪で免職されたのではない、あくまでも連座。父がゆるされるか、どうかとは別の次元の問題。具視の復職が朝議の議題になるのは時間の問題だが、反対者がないはずはない」

「それは、だれ？」

「中川宮朝彦親王、強力です」

慶応元年七月十八日、サチノミヤ睦仁親王は中山忠能にギヤマンの器に入れた年魚の付焼を賜った。

この日、新宰相の中山慶子が宮中の神事の関係で中山邸に里帰りする予定、サチノミヤ親王は慶子に託して年魚の付焼を忠能に贈るうとした。

ところが、神事が延期されたので慶子の里帰りも延期、それはいいとして、炎暑の時期、年魚は腐ってしまう。

案じた親王は慶子の使者を通じて、ギヤマンの器に入れたままの年魚を忠能に贈った。

「それほどまでにサチノミヤさまは、わたくしを大切におもっておいである……忠能はこういいたかったわけだ」

「いわなければ不忠にあたる。そして、いえばいほど親王と忠能のつながりの強さが強調されて世間につたわる」

「たかが年魚の贈与だが、それ以上に、政治の高等作戦でもある」

ギヤマンの器の年魚の付焼事件の二ヶ月後、宮廷の内部事情に通じたひとを、

「これは？」

深刻にかんがえせる事件がおこった、堀河親賀（ちかよし）がサチノミヤ親王の祇候衆に登用されたのだ。

「ホリカワ……？」

姉小路公知の豊の聴覚に、ホリカワの名に刺激されてほんやりとした記憶がよみがえる。

「堀河家は高倉流高倉家の庶流、家格は羽林家、家柄は新家で外様だから、まあ、たいした公家ではない。その親賀が親王の祇候衆に登用されたからといって……あ、そうか、親賀は岩倉具視と堀河紀子の兄だ！」

岩倉具視の子の周丸が兄に、具視の兄の親賀が祇候衆に登用されても、それが具視や紀子の免罪復職につながるとはいえない。しかし、政治の舞台が大きな音をたてて回転したしるしではある。

— 230 —

慶応二年六月にはじまった長州征伐戦争は幕府軍の惨敗があきらかになるなか、幕府將軍の徳川家茂が大坂城で亡くなった。慶応二年七月二十日、享年二十一。

一ヶ月後に家茂の死と一橋慶喜の徳川家相続が発表された。慶喜は参内して長州征伐軍の解兵を請い、勅許された。

八月五日に東宮御殿の建造がはじまり、二十七日に上棟式があった。天皇は内侍所に鈴を奉呈し、初穂として銀一枚・鮮魚一折などを供し、内宴を催した。

いずれは東宮御殿の主となる祐宮睦仁親王は上棟を賀して鮮魚一折を天皇に献納し、内宴で天皇に陪席した。

「ドンドンガラガラ……」

「はあ……？」

「八月三十日からはじまる宮廷の騒動を音響にあらわせば、まさにこれ、ドンドンガラガラ！」

木ノ内民夫は唇から泡を吹かんばかり、あえていえば下品だが、想いのままを表現できないおのれの無能に絶望寸前のどん底から発したものだ。

「はあ……？」といったまましばらく呆然無言状態がつづいた姉小路公知だが、緊張が解けたらしい。

「ドンドンガラガラですか。そうときくと、猿ヶ辻でひとちがいの暗殺の犠牲者になったのが、いまさらながらくやしい。自分の耳できたかったなア、ドンドンガラガラ」

一瞬おき、公知がかさねて民夫に問う。

「なにがあつたんですか、八月三十日に？」

「二十二卿が列参して朝彦親王や関白の二条斎敬を弾劾した」

「列参、なんと懐かしい！ 安政五年三月十二日、八十八卿の列参、わたしは八十八卿のひとりとして参加、張り切っていたなア」

「あのと、公知さん、お歳は？」

「二十八歳、若かった……ああ、そうだ、木ノ内さんは木ノ内さんであつて中山忠能でもあるんだから、一同の先頭に立ち、わたしといっしょに公家町を練って歩いたのですよね。ちよつと信じられない風景だけど、ほんとうのことなんだ。中山さんが執筆した諫疏案（かんそあん）にわれら一同が賛同して署名、九条関白に突きつけた」

「諫疏案のこと、いまだにおぼえていただいているの身にあまる光栄」

「小奉書四つ折りに書かれた諫疏案、すべては、あれから始まったんだ。思い出すと興奮のかぎりですよ」

木ノ内民夫が舌先をチョットつき出して、まず上唇、つぎに下唇を舐めた。舐めて、はなしの先をつづけていいですか と公知のOKをもとめている。

「二十二卿の列参は、どんないきさつではじまったのですか？」

「公知さんは柳図子（やなぎのずし）町を「ご存じのはず」

「ヤナギノズシ……ああ、相国寺の西向かい、烏丸通の上立売」

「藤井九成（かずしげ）という男」

「知ってますよ。宝暦事件で処刑された藤井右門の孫か曾孫だそうですね。右門がのこした柳図子町の家に住んでいた。はじめは三条さんに仕え、やめて尊攘運動をはじめた。三条さんにも出入りして、尊攘の同志として実美さんに信頼されていました」

あの藤井と宮廷のドンドンガラガラと、どんな関係があるのかと聞きたい表情の姉小路公知。

柳図子の藤井家に松尾神社の神官の家の松尾但馬や水戸の鯉沼伊織、土佐勤王党の武市半平太など尊攘志士があつまり、討議を交わしていた。町奉行の捜査網に察知され、危険であったが、文久三年から事情が一変した。

- 2 3 2 -

「文久三年から？……ああ、口惜しいなア。文久三年の前半分なら知っているが、五月からあとのことは知らない、わたしは死んでしまっただから！」

「薩摩屋敷ができました、柳図子の東の向かいに」

「薩摩屋敷が目の前……そうかッ……町奉行の役人なんか怖くもなるともない、そういうわけだ！」

「怖いものがなくなったから、だれいうとなく、柳図子党の呼び名が付いた」

松尾但馬は非蔵人で国事御用掛の書記をつとめたこともあり、松尾神社の神官の一族だから町奉行なんか恐れることもない、カネもある。岩倉村に塾居している岩倉具視と早くから交遊があり、しばしばおとずれては政治論を交わしていた。

薩摩藩屋敷ができると、柳図子党の藤井九成や松尾但馬と薩摩の

大久保利通や井上石見とのつきあいはじまり、

「いかがですか、岩倉具視さんとお会いになつては？」
「四奸二嬪の、あの岩倉？」

「お元気です。天皇中心の統一政権樹立の構想を練つておられ、『叢裡鳴虫』や『全国合同策』と名づけて我々に読ませ、解説なされ、賛同者が増えるのを目標にしておられます」

「会えるのですか、危険ではない？」

四奸二嬪 排斥に積極的だったのは薩摩よりも長州だから、大久保や井上には 岩倉 の名に抵抗感は薄い。かれが主張しているという『全国合同策』の名に惹かれるものがある。

「おゆるしが出るまでは入京できませんが、こちらから会いにゆくのは……」

「会つて、岩倉さんに迷惑はかからぬかな？」

「参議の中御門経之さまはしばしば岩倉に出かけ、お会いになります。中御門さまはご親戚だから別としても、ご来客との会見は禁止されてはいない」

「会おう！」

大久保をはじめ、薩摩の大物が岩倉村をたずねて岩倉具視と正論を交わした。統一政権樹立と岩倉具視の免罪と入京許可の二点が目標となった。中御門経之も協力を惜しまない。

薩摩藩の有志と提携して政界に復帰した場合、集中すべき目標を明確にしようとかんがえ、岩倉は「大政奉還」の四字にまとめた。

持論の全国合同は幕府から朝廷へ大政を奉還させることで実現する展望を立てた。

岩倉の大政奉還論は薩摩の藤井良節、井上石見、山中弘庸によつて晃親王や近衛忠房、関白の二条斉敬に密奏された。晃（あきら）親王は伏見宮邦家親王の子、孝明天皇の猶子として山階宮家を創立し、常陸太守と国事御用掛に任命されている。

岩倉の大政奉還論は薩摩の島津久光、大久保利通や小松帯刀にもつたえられているが、この時点で薩摩は大政を奉還させるために幕

府にはたらきかける気配をしめさなかった。

動いたのは公家である。

岩倉は、いまこそ公家が総体としてちからを合わせ、二条関白などの公武合体派勢力に対抗して朝廷改革を訴える必要があると論じ、これに賛同した公家が動いた。

中御門経之が先頭に立ち、大原重徳・北小路随光・高野保身・穂波経度・千種有住・岩倉具定・岩倉具綱など二十二卿がそろって八月三十日の夕刻に参内し、「一同の所信を天皇に達するため、特別に拝謁を許可されたい」との書を呈上した。

拝謁が許可され、学問所に天皇が出座、重臣が左右に侍した。朝彦親王・晃親王・関白二条斉敬・国事御用掛・同九条通孝・議奏正親町三条実愛・同柳原光愛・同六条有容・同広橋胤保・同久世通熙・武家傳奏飛鳥井雅典など。

「公武合体派の重鎮の面々、ずらりと並びましたなあ。顔も声もおぼえています。この面々が相手では、中御門さん以下、苦戦は避けられない」

姉小路公知の言い方は ひとつこと の立場にあえて徹する決意をかためているひとのそれだと、木ノ内の耳にきこえた。

「これ、後日になって中川宮がまわりに漏らしたことです、御所に詰め寄せた公家のなかには、斬り合いになったときの防護のために着込みで身をかためたものもいたようだと……」

「公家が着込みで参内、ですか。なるほど、もはや合戦前夜、ドンガラガラですな」

大原重徳が一同を代表し、天皇に奏上した。

一、朝廷が直々に諸藩を招集すること。

二、文久二年以来幽閉を命じられた面々を釈放し、復帰させること。

三、長州征伐の軍隊を朝命によって解兵すること。

「岩倉具視などに 四奸二嬪 の汚名をあびせ、追放したのは尊攘派公家でした。そういうかれらが、いまは、 四奸二嬪 の罪を解いて復帰させるべしと主張している。変われば変わるもの」

「わたしは変わらないうちに殺されてしまった、恥ずかしくて、たまらん。岩倉の全国合同、大政奉還の魅力は相当なものだ」

「岩倉を追放したのは尊攘派だが、大政奉還論に行き着いた時点で、岩倉はすでに 尊攘か、公武合体 の対立をのりこえている。尊攘派はすでに解体されているから対立勢力としての公武合体派も存在しえない。公武合体の 武 はともかく、公 のほうは影も形もないといっておおげさではない。敢えていうなら 保守派 だ。だがしかし、そこに錯覚というものがあって、天皇が大原以下二十二卿を叱責したとき自称公武合体派は歓呼の声をあげた」

天皇は「いまさら、なにをいうか。その意見なら去年の兵庫開港のときに持ち出すべきであった！」と激怒したが、「来月二日に大原ひとり参れ」と命じた。大原は二日にも参内し、拝謁、先日の言上について詳細に説明した。

二十二卿の進言を天皇がうけいれるのではないかと恐れた二条斎敬が真っ先に左大臣、関白の辞表を提出して天皇を牽制しようとした。

中川宮朝彦親王も上表して、国事扶助の任務を解いていただきたいと願った。

一橋慶喜は武家傳奏を通じて上書し、関白と朝彦親王の辞職をみとめるべきではないと天皇に迫った。

自称公武合体派が辛うじて對抗姿勢を取りもどし、十月二十七日に列参関係者の処分を断行した。

まず晃親王が槍玉にあがった。国事御用掛の辞職はみとめられず、蟄居の処罰が下った。

正親町三条実愛は遠慮、閉門に処せられた。

中御門経之と大原重徳は閉門に処せられた。

北小路随光、高野保美など十九人は差控の処分をうけた。

処罰された公家と岩倉具視の屋敷は会津や桑名の藩兵が嚴重に警衛した。

「列参関係者を処罰して、保守派公家または中川宮派は権力を奪回した、このように評して、いい？」

「可能ではあるが、召命に応じて上京したのは加賀・備前・松江の三藩主と徳島・津の二世子だけ、新設の権力機関というにはあまりにも貧弱」

「ほかの大名は、なぜ上洛しない？」

「召命がとどくと、たちまち病気になってしまふ。將軍の命令ならまだしも、ただいま將軍の座は空席、先行きがどうなるか、まったく見当もつかない朝廷保守派政権から発せられた召命は信用できない、病気になるしか策はない」

— 236 —

「岩倉一派の敗北を、中山忠能はどのように観ていたのかな？」

姉小路が問い、木ノ内民夫がこたえる。

「列参のあと、不穩の出来事をこまごまと日記に書くようになった。これ、わたしの立場からしても異様におもわれました」

「不穩の出来事……たとえば」

「だれだれの屋敷の塀に張紙があつた、といったこと。これまで、張紙などは日常茶飯事、珍しくもなく、忠能も張紙の文句などは日記に書かなかつたのですが、この時期になって、とつぜん、こまごまと」

「忠能自身が公家町や宮中に密偵を放っている、そんな気配？」

「二条家の諸太夫の北小路摂津守が逮捕された情報がある、とか、桂家の松永が逃亡したのは北小路と同罪ではないのか、といったことなど。夜間に砲声がきこえたので吟味したところ、川端丸太町の会津屋敷で花火をうちあげたとわかつたと書き、この不穩の時期に

花火など、無用なことをするものよと憤慨の気分を記録するありさま、忠能が緊張しているのはまちがいない」

「サチノミヤ睦仁親王と中山家の音信は？」

「わたしの気のせいかもしれないが、以前よりは頻繁で濃密になった印象」

慶応二年の十二月五日、徳川慶喜が十五代征夷大将に任命された。

サチノミヤ睦仁親王は権中納言中院通富を使者として慶喜に祝いの品々を贈った。

十二月十七日、孝明天皇が疱瘡に罹った。

サチノミヤ睦仁親王は下賀茂神社に使者を派遣し、七日七夜にわたって天皇の病氣平癒を祈らせた。

疱瘡に罹ったのを知った天皇は親王に感染するのを恐れ、平癒するまでは参内してはならぬと命じた。

「じつは、ですね……」

木ノ内民夫が公知にうちあける。

「サチノミヤがまだ中山邸に住んでいたときのことだが、忠能は蘭方医の大村泰輔に依頼して種痘を親王に植えていたのです。痘苗そのものは種痘術の名人の安藤桂州から取り寄せてあったのですが、牛痘を直接に植えるのを憚り、いったん野宮定功の娘に植えてから祐宮に植えたそうです」

「なんと、用意周到な！」

「サチノミヤは天皇にたいし、『これこれしかじかのいきさつですでに種痘をしていますから、このたび感染の恐れはございませぬ、ご安心を』と奏上し、天皇を安心させたということ」

十八日の夜、サチノミヤが軽い風邪に罹ったのがわかった。天皇の治療が優先するから親王に手がまわらず、案じられたが、平癒にむかった。

サチノミヤが風邪をひいたと知った中山忠能は北野神社にひそかに代参を派遣し、天皇の病氣平癒と親王の安泰を祈願し、二十日に北野社からとどいた供米を親王に献納した。

「こういうことは、はじめから最後まで、ほんとうにひそかにやらなければダメなんです。悪事をたくらむものが聖なる供米に毒を塗れば大変ですから。こんなこと、ほんもののお公家さんの公知さん、とっくにご承知のはずだが」

「いやいや、それが、なかなか」

「なぜ？」

「それぞれの家に、そういうことを役目としているものがあるんです。公家の主人がすっかり手を出し、口を出すと、おおさわぎになる」

十二月二十五日に孝明天皇が亡くなった。

サチノミヤ睦仁親王の践祚、皇太后の冊立、そして大喪の発表へとスケジュールがすすむ。

二十六日、天皇の服装や祭使の装束のことを家職とする内蔵頭の山科言縄に命令が下った、「践祚の儀式に親王が着る服装を如何にすべきか、先例を調査せよ」と。

言縄は古代からの例をしらべ、

「髪は総角（あげまき）、お衣は引直衣（ひきのうし）、張袴で横目扇をお持ちになる」

などと奏上し、つけ加えた。

「光格天皇さまの童形践祚の前例にならうものです」

祐宮睦仁親王はまだ元服していない童子だから童形の服装で践祚の式をあげる。践祚の服は光格天皇童形践祚の服を前例にするときまった。

そうときいた中山忠能は感激に身を震わせ、盧山寺に走って、曾祖父中山愛親の墓に知らせる

——愛親さまにもうしあげます。あなたの玄孫（やしやう）の、そのまた子のサチノミヤさまが、むかし、おなじくサチノミヤさまともうしあげた光格天皇さまとおなじ重形践祚のお服で践祚なさいます！

（第12章・終）

（大尾）

読者のみなさまへ

おもいきって長い時間をかけた『サチノミヤ（祐宮） ひいじいさまもサチノミヤ』がようやく完成しました。内容はともかく——奇妙な言い方ですが——達成感はいじゅうぶんです。

読みやすいように、を目標にして書いたのも、このさき、いい思い出になるとおもいます。

ありがとうございました。

ご感想、ご意見など、お寄せいただければ幸いに存じます。

高野 澄

kuupachi@jade.plala.or.jp

<http://takanokiyoshi.com/>